

ダーチャ・マライーニさん 歓迎・交流会

Conoscere Dacia Maraini:
Momento di accoglienza e confronto

2024年6月12日13時開会 新宿・常圓寺
12 giugno 2024, Tempio Joenji, Shinjuku, Tokyo

＜プログラム・参考資料＞

PROGRAMMA E DOCUMENTAZIONE DI RIFERIMENTO



ダーチャ・マライーニを日本に迎える会・東京

Comitato Accoglienza Dacia Maraini in Giappone - Tokyo

<プログラム>

- ① 開会あいさつ 泉 定明さん
- ② 「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」代表・唐渡興宣さん
- ③ ダーチャ・マライーニさん挨拶
- ④ 歓迎の言葉
福原 恵美さん（宮澤弘幸さん姪）
土肥 秀行さん（東京大学文学部南欧語南欧文学研究室准教授）
小宮まゆみさん（POW研究会＝戦時下の敵国民間人抑留を研究）
川嶋 均さん（東京藝術大学講師、自由と平和のための東京藝術大学有志の会）
- ⑤ 参加者からの発言

<PROGRAMMA>

- ① **Saluto iniziale – Sig. Sadaaki Izumi** (Comitato Accoglienza Dacia Maraini - Tokyo)
- ② **Saluto di Benvenuto – Sig. Okinori Karato**
(Rappresentante del Comitato Accoglienza Dacia Maraini in Giappone)
- ③ **Saluto e discorso dell'ospite d'onore, Sig.ra Dacia Maraini**
- ④ **Saluti e discorso di accoglienza da:**
 - **Sig.ra Emi Fukuhara** (nipote di Hiroyuki Miyazawa)
 - **Sig. Hideyuki Doi**
(Professore associato, Lingue e Letterature dell'Europa Meridionale,
Facoltà di Lettere, Università di Tokyo)
 - **Sig.ra Mayumi Komiya**
(ricercatrice di internamento dei civili nemici in tempo di guerra,
POW Research Network Japan)
 - **Sig. Hitoshi Kawashima**
(Docente, Tokyo University of the Arts, Associazione dei volontari per Libertà e
Pace presso la Tokyo University of the Arts)
- ⑤ **Parole dei partecipanti**

< 参考資料 >

- ① ダーチャ・マライーニさん紹介 4
- ② ダーチャと日本の強制収容所 望月紀子 5
- ③ 「マライーニ家の受難」上田誠吉著「人間の絆を求めて」から 15
- ④ ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち 青月社／2014年9月刊から 25
- ⑤ フォスコ・マライーニ紹介 北大山岳部HPから 28
- ⑥ フォスコ・マライーニ写真展「東洋への道」 32
- ⑦ フォスコ・マライーニ写真展「魅惑の海女たち」 35
- ⑧ フォスコ・マライーニの死にちなんで 谷泰 37
- ⑨ アジア太平洋戦争下の民間人抑留 小宮まゆみ 43
- ⑩ 愛知県天白村抑留所 壮絶な飢えと闘ったイタリア民間人の抑留所 49
- ⑪ 「捕虜収容所・民間人抑留所事典」紹介 55
- ⑫ 「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」を伝え続ける活動の報告（東京） 57

< DOCUMENTAZIONE DI RIFERIMENTO >

- ① **Chi è Dacia Maraini** 4
- ② **Dacia Maraini e il campo di concentramento giapponese** 5
Noriko Mochizuki, Tesi all'Università di Rhode Island
- ③ **La passione della famiglia Maraini** 15
Seikichi Ueda, tratto da *Alla ricerca dei legami umani*, 1988 Kadensha
- ④ **Dacia Maraini**
Hideyuki Doi, tratto da *Gli scrittori più vicini al Premio Nobel per la letteratura* 25
settembre 2014, Seigetsusha
- ⑤ **Fosco Maraini – schizzo biografico** 28
dal sitoweb dell'Academic Alpine Club of Hokkaido (Università di Hokkaido)
- ⑥ **“Via per l'Oriente”** Mostra fotografica di Fosco Maraini, Hokkaido, 2003 32
- ⑦ **“L'incanto delle Donne del Mare”** 35
Mostra fotografica di Fosco Maraini, Tokyo, 2015
- ⑧ **Memoria di Fosco Maraini alla sua scomparsa** 37
Yutaka Tani, dal notiziario dell'Academic Alpine Club of Kyoto (Università di Kyoto)
- ⑨ **L'internamento civile durante la guerra Asia-Pacifico**, Mayumi Komiya 43
- ⑩ **Campo di internamento del villaggio di Tenpaku**, Prefettura di Aichi, Giappone 49
Campo di internamento dove i civili italiani hanno lottato contro una feroce fame
- ⑪ Presentazione di **Enciclopedia sui campi di prigionia e di internamento civile in Giappone** 55
- ⑫ Relazione sulla **campagna per promuovere la diffusione della verità del “Caso Miyazawa-Lane: falsa accusa di spionaggio”** (Tokyo) 57

ダーチャ・マラーニさん紹介

◇両親とともに札幌へ

ダーチャ・マラーニは1938年2歳の時に、アイヌ文化研究のため北海道帝国大学に来た父フォスコ・マラーニとともに来札幌しました。一家は北大構内の外国人教師官舎に暮らしました。1939年、北大では「心の会」が発会し、外国人教師と学生たちが国籍、立場を超えて人間的な信頼を育んでいました。メンバーの宮澤弘幸とマラーニは、旅行、登山、スキーなどを共にし、大変深い親交がありました。

◇暗黒の時代

1941年にフォスコ・マラーニは京大にイタリア語教師として赴任しました。1943年イタリアが連合国に降伏すると一家は「敵国人」となり、強制収容所（名古屋・天白寮）に収監され死と隣り合わせの厳しい生活となりました。口に出せぬような人間の浅ましさを経験しています。終戦後1946年、一家はイタリアへ帰国しました。帰国後、フォスコ・マラーニは日伊の交流に多大な貢献をしています。（この功績を記念してイタリア文化会館では、「マラーニ賞」を設けています。（ダーチャは、今回授賞式で挨拶を予定）

【参考文献】マラーニ一家の強制収容所での経験についての本が出版されています。

『ダーチャと日本の強制収容所』 望月紀子著
2015年 未来社刊

『漫画ENDO』パッパ作 小学館刊 現在1、2巻発売中

◇戦後、フォスコと宮澤が再会

1941年12月8日、宮澤弘幸とレーン夫妻らは、いわれなき軍機保護法違反で検挙され、重刑が科せられました。宮澤は厳しい監獄生活で極度に衰弱、終戦後GHQ覚書で釈放されます。釈放後宮澤が唯一訪問したのは、楽しさを共有

したフォスコのところでした。フォスコは宮澤の心身の酷い裏れ方に驚き、ショックを受けたと書き残しています。宮澤は病の為、釈放後もなくして1947年2月22日、27歳の生涯を閉じました。

◇文学者としてのダーチャ

昨年秋、『Vita Mia（わが人生）』を上梓しました。その中でこれまで語ることのなかった辛く苦しい日本での経験を「世界中に、あらゆる形の暴力と憎悪が再び溢れる今、それを証言しなければならなかったのです。そして自分の原点は日本でのさまざまな体験です」と語っています。

これまでも、主にフェミニズムや反ファシズムに焦点をあてた作品を執筆してきました。

【日本語に翻訳された作品】

『不安の季節』（1970年）、『バカンス』（1971年）、『メアリー・ステュアート』（1990年）、『シチーリアの雅歌』（1993年）、『帰郷 シチーリアへ』（1995年）、『イゾリーナ 切り刻まれた少女』（1997年）、『声』（1996年）『別れてきた恋人への手紙』（1998年）、『おなかの中の密航者』（1999年）、『思い出はそれだけで愛おしい』（2001年）、『ひつじのドリー』（2016年）、『ある女の子のための犬のお話』（2017年）

【映画脚本

『三人姉妹』（1988）、『ビエラ/愛の遍歴』（1987）、『未来は女のものである』（1986）

◇ダーチャの今回の来日中の予定

今回来日するダーチャは、東京では父の親友であった宮澤弘幸の墓参りと交流会、イタリア文化会館での「マラーニ賞」授賞式での挨拶、名古屋では強制収容された寺の訪問、旧友との再会、札幌では写真展、講演会などを予定しています。

ダーチャ・マライーニと日本の強制収容所

ロードアイランド大学論文

望月 紀子



はじめに

ダーチャ・マライーニは1938年10月から1946年5月まで、つまり1歳11か月から9歳半まで日本で過ごしたが、そのうち7歳から9歳までの約2年間は強制収容所での生活だった。

本稿では、未来の作家ダーチャ・マライーニが、第二次世界大戦下の日本の強制収容所で何を見たのか、どんな経験をしたのかを検証して、この経験が彼女の文学といかなる関わりをもつのかを探る。

「牢獄からの解放」という彼女の作品の一貫したテーマはまちがいに収容所での体験に発しており、牢獄を知らずして「牢獄からの解放」というテーマはありえないからだ。

日本の収容所での体験については、ダーチャ自身、いろいろな作品で断片的に触れており、父も体験記を刊行しているが、今回は末娘のトーニ・マライーニの著書に挿入された、母トパーツィアが収容所で書いていた「ノート」の生々しい記述に多くを教えられた。

強制収容所に入るまで

1938年10月、ダーチャ・マライーニは両親¹⁾とともに、イタリア南部のブリンディジ港から、大型客船コンテ・ヴェルデ号で日本の神戸港へ向かった。ま

だ2歳にもなっていなかったが、大人たちが船酔いのためにがらんとした食堂でひとり、面白いボーイたちに囲まれて旺盛な食欲をみせる小さな旅人だった。ここでひとつ想起しておきたいのは、小さな旅人が知るはずもない未来の彼女の強制収容所生活と牢獄を暗示するかのよう、このコンテ・ヴェルデ号に、より悲惨な未来の強制収容所と牢獄を逃れて、多くのユダヤ人が乗っていたことである。彼らの行き先は第二次上海事変ののち日本軍の統制下にあった上海の国際共同租界に設置されていたゲットーで、1939年半ばごろまで無制限にユダヤ人を受け入れていた。マライーニ一家の出航のひと月まえには、イタリアでも「人種法」が公布されて、ユダヤ人に対する差別政策がとられだしていた。その年、日本では、1936年の「日独防共協定」による親善事業の一環として、ヒトラー・ユーゲントの一行を迎え、青い目に金髪の青少年たちが3か月かけて日本を巡回して各地で熱狂的な歓迎を受けた。

『外事月報』1939年3月分の「ユダヤ人問題」という項目に、「欧州より上海に渡来せるユダヤ人総数、3月21日到着せし850名を合わせて約3150名」とあり、その数は4月末には7000名と報告されている。また3月27日に大本営に「ユダヤ人問題批判座談会」が設けられて、「ユダヤ人を真に研究することなく排撃するのは慎むべき。それは皇道精神に反する」と結論づけられている。折しも陸軍や海軍上層部の反ユダヤ的言説が強まっていたなかで、それを批判する座談会が大本営に設けられ、皇道精神をもって踏みとどまったことにより、軍国主義まっただなかの日本が間接的に多くのユダヤ人の生命を救ったことになる。戦局が厳しくなるにつれ、上海ゲットーでの生活も日に日に悪化したものの、ヨーロッパ内のゲットーに収容されたユダヤ人のように、最終的に絶滅収容所へ送られることはなかったから。

さてマライーニ一家は神戸に着き、そこから列車

で東京へ向かい、2週間ほどの滞在ののち、寝台車で本州最北の青森へ、そこから連絡船で北海道の函館にわたり、12月半ば、およそ2か月の長旅ののち、最終目的地の札幌に着いた。父親が北海道大学でアイヌ文化を研究するために、政府留学生としてやってきたのだった。ダーチャは北の町で雪になじみ、地元の子たちと元気に遊んだ。自分も日本人だと思い、母親が押しつけるイタリア語や英語でなく、日本語で話し、記憶にないイタリアなどどうでもよかった。北海道での2年4か月を作家はのちに「もっとも幸福な時代だった」と思い出す²⁾。5歳以前の、さほど鮮明でないはずの記憶を幸福な記憶として想起できるのは、『神戸への船』の巻末に収められている、父の撮った、どれも楽しそうな札幌、京都でのたくさんの写真のおかげだろう。だが老年となった作家は、当時のプリプリした肉体をもつ女の子の写真を見ながら、「その女の子は残念ながら死んだ。私はとても辛い思いをして成長したので、その女の子はほとんど遠い敵のように感じる」³⁾と書く。『神戸への船』の最後のページには、解放直後の焼け跡のダーチャと妹たちが写っている。痩せて表情がない。収容所に入ってからカメラを没収されたので、写真は無い。

1941年春、父が京都大学のイタリア語講師に採用されて、一家は札幌を去る。この時期に京都大学がイタリア語科を新設したのは、イタリアが日独防共協定に加わったことにより、国策で急遽日伊文化協定が結ばれたからである。イタリアでは、この年の1月に日本の伝統文化や日常生活、産業などを伝える写真の多い、B4版ほどの大型月刊政府機関誌『YAMATO』⁴⁾が刊行されて、戦意高揚をはかっている。日本人は一家がイタリア人と知ると、ローマ式の敬礼をして「ニチドクイ、バンザイ、ムッソリーニカッカ、バンザイ」と叫んだ。この年9月にドイツはブルガリア、ユーゴスラヴィア、ギリシアに侵攻し、日本は12月7日、真珠湾を攻撃して、英米に宣戦布告。日に日に戦況が拡大し、日本はタイ、フィリピン、マレーシアに侵攻し、日本人は戦況の実態を知らされないまま、浮かれ気分だった。

だが、自国のファシズムとファシストの父親⁵⁾から逃れ、もうひとつのファシズムの国日本に来たフォスコはすでにこの国の戦時下の厳しい思想統制を身をもって経験していた。「宮沢レーン事件」⁶⁾であ

る。真珠湾攻撃の翌日の12月8日、北海道大学で同僚だったアメリカ人英語教師ハロルド・レーン夫妻と工学部電気工学科学生の宮沢弘幸その他がスパイとして逮捕されたのである。レーン夫妻は新来のマラーニ一家のために親切に走りまわり、大学の外国人教員宿舎を斡旋してくれた。マラーニその他の外国人教師と「La société du coeur (心の会)」という学生を含めた親睦会をつくっていたのが、太平洋戦争勃発とともに摘発されたのである。宮沢は語学に堪能な優秀な学生で、フォスコの山友だち、スキー友だちでもあり、北方少数民族に対する深い関心から、フォスコとともにあるいは単独で各地のアイヌ部落、さらに満州などを訪れていたのが官憲の目を引いた。国家秘密法による冤罪で、宮沢は懲役15年、上告が棄却されて服役、ハロルドは懲役15年、妻ポーリンは12年、二人とも服役後、帰国した。戦後、宮沢に再会したフォスコは若い友人の心身両面のあまりの変貌ぶりに声もなかった。すぐに手続きをして入院させたが、一家が帰国してフィレンツェに着いてほどなく、彼の訃報が届いた。上田誠吉氏は、自著のなかで、「このイタリアの碩学が、不幸な日本の旧友に対して、早くも1957年に最大級の賛辞を呈した、(…)故宮沢弘幸の悲惨な事件を最初に世界に伝えたのは、ほかならぬマラーニ氏であった」と述べている。⁷⁾

1942年になると、日本はビルマ、シンガポールに侵攻し、アメリカが東京を空襲、ロシアではレニングラード攻防が始まった。しだいに食糧不足が顕著になりだした。そして1943年9月8日。イタリアが連合軍との休戦協定を発表したのを機に、在留イタリア人の運命は激変した。

強制収容所へ

連合軍との休戦条約の発表とともにイタリアが日独伊三国同盟から離脱したために、イタリアは日本にとって同盟国から一挙に敵国に、イタリア人は敵国人となった。イタリア政府は上海に停泊中の、マラーニ一家も乗ってきたコンテ・ヴェルデ号をはじめとする17隻の船舶を自沈させた。三国同盟からの離脱に加え、イタリア政府のこの行為に怒った日本政府は報復としか考えられない非道なイタリア人対策をとることになる。自沈した船の乗組員も全員、日

本各地の工場の強制労働に送られ、アメリカによる空襲で、多くが命を失うことになる。

日本政府はただちに「戦時措置」を実施し、「公務員および在留伊国人は敵国人に準じ保護監視すること」を決定した。⁸⁾「敵国人に準じた保護監視」とは、民間人も公館員とほぼひとしく、外出制限、自家用車使用禁止、電話切断、郵便物の配達停止などである。

その夏も、マラーニ一家は例年どおり長野県の避暑地軽井沢にいたが、イタリアの休戦発表の翌朝、警官が来て、自宅監禁を通告され、その翌日、一家は2名の警官に付き添われて、列車で京都に戻った。このときダーチャは7歳で、事情を察したようだと言われている⁹⁾。そこへ9月12日、幽閉されていたムツソリーニがドイツ軍に救出されて、ドイツの傀儡政府サロー共和国を樹立し、日本政府はその政府を承認した。10月5日の大本営政府連絡会議で「伊国に対する処置調整の件」がまとめられ、外交官と民間人に対して、ムツソリーニのファシスト政府に忠誠を誓うか否かを問い、拒否した者を抑留することを決定。マラーニ夫妻は別々に尋問されて、二人とも宣誓を拒否した。

このときイタリア公館員は2名だけが宣誓し、拒否した32名とその家族の計42名が東京都田園調布の聖フランシスコ修道院へ、民間人190名のうち19名が愛知県てんぱく やごと天白村八事山の松坂屋デパートの社員寮に收容されることになった。19名のイタリア人は、通信員、聖職者、会社支配人、教師、学生、元大使館員などで、60代が2名、50代が1名、40代2名、30代6名、20代3名、それにダーチャと妹ふたりである。ほかに、のちに聖フランシスコ教会から移されてきたらしい、もの静かな38歳の元空軍武官がいた。クラレッタ・ペタッチ¹⁰⁾の元夫だった。

ある語学教師の妻が面会に来て、夫に宣誓拒否を撤回するように勧めたために尋問され、周囲の人たちにそうアドバイスされたと言った。当局は「口先だけの」宣誓者がいる、警戒せよ、と指示した。事実、この教師は妻の助言に従って、「臨機応変」に振るまったらしく、6か月後に解放された。「彼はもっていた缶詰の最後のひとつまでもって姿を消した」と、フォスコは名前を明かさずに揶揄している。¹¹⁾ またFIAT日本支社長の臨月の妻と5歳と3歳の2人の子どもはイタリア人だが抑留延期となり、最後まで収

容されず、実際に天白に出発したイタリア人は16人だった。つまりダーチャの母トパーツィアも宣誓拒否を撤回すれば、7歳、4歳、2歳の子どもたちとともに收容を免れる可能性もあったのだ。だが、「ナチス・ファシズムは私の思想と相容れない」と署名を拒否したときの彼女の決意が揺らぐことはなかった。実は、このとき上層部で、子どもたちの処遇が議論され、警官たちが憎々しげに呼ぶ「裏切りども」の子どもたちのための寄宿舎に送られそうになったが、受け入れ先の名古屋市長の夫人がキリスト教徒で、「子どもは親の行くところへ行くべきだ」という鶴の一声で、子どももいっしょにということになったのだ。このときの1人の憲兵の捨て台詞をトパーツィアは忘れない。「死んだってどうってことはない、女ばかりだから」ただ、その後、日増しにつのる子どもたちの惨状に、仲間うちでも子どもを巻き添えにした選択の是非が問われ、彼女も折れて、フォスコは陸軍元帥の東条英機首相に妻子を、もしくは子どもたちだけでも解放してくれるよう嘆願書を書いた。また親しいスイス領事が子どもたちを引きとると申し入れてくれたが、いずれも許可されなかった。

天白寮

民間人のイタリア人が收容された愛知県名古屋市の收容所は、郊外の荒れた丘陵地帯に建つ木造二階建ての日本家屋である。二階から物干し台に出られ、トパーツィアはそこをベランダと呼んで、よく日向ぼっこをした。デパートの社員用夏期保養所であるだけに夏は快適だが冬の寒さはすさまじかった。冬期は閉鎖されていたので暖房設備はなく、食堂に石炭ストーブがあるだけ。厳寒期には室内のコップの水が凍るほどで、規則で、服を着たまま寝た。トパーツィアはイタリアから着てきた毛皮の長いコートをほどいて、娘たちが着て寝るベストに縫い直した。

すべてが厳しく規制されていた。入浴は週に一度だけで、重要度に従って順番が定められ、女子どもは最後だった。抗議したが、改められなかった。手洗いはドアで隔てた廊下に穴がふたつあいているだけだった。その黒い穴のなかで大きな回虫が動いていた。ダーチャは「私たちの乏しい栄養源を奪う憎らしいこの虫を自分のお尻から引き抜いた」と書いている。¹²⁾ 朝6時起床、5分以内に床をはなれ、布団をあ

げて洗顔、掃除。日中は読書も眠ることも禁じられ、全員が1時間、天候に関係なく外に出て、すわらずに動きまわることを強制された。衰弱して、立っているのがやっとの者もいた。食事は前夜支給される材料で、当番制でつくった。夕食の後片付けを終えて、寝室にもどるとすぐに消灯だった。

警官は4名で、2名ずつ交代で監視にあたった。イタリア人たちは4人を *angiolini* (天使ちゃん)、天使ちゃんたちが神のお恵みを隠しておく食糧庫を *chiesina* (小さな教会) と呼んだ。警官にも綽名をつけた。誰よりも厳しく冷酷で、誰よりも恐れられた小柄なインテリの粕谷は身だしなみがよく、髪をきれいになでつけ、遠くから見るとあの美男の俳優に似ているので *Valentino*、その部下が気のいいところもあって、*cretino* (おバカ)、もう一人が *carogna* (人でなし)、そして愚かで尊大で残酷な軍国主義丸出しの若者が *Radetzky*。イタリアの独立運動を冷酷に鎮圧したオーストリアの将軍だ。

病気

最初にダーチャ、そしてユキ、トーニがつぎつぎとおたふくかぜにかかった。3人が快復すると、トパーツィアが脚気と栄養不良で倒れた。翌日、生の大根と子どもたちの分の牛乳一本を与えられる。体重が5キロ減り、脚が痛くて寝ているしかない。他の人たちもつぎつぎと病気になった。激しい胃痛、高熱。膀胱炎と胃痛。下痢、黄疸など、収容数か月で、収容者のほぼ全員が体調を崩してゆくなか、理不尽な待遇の悪化が加わる。ベンチにすわるとき、壁にもたれることを理由なく禁止する。そのくせ、ならばとたがい背の中合わせにすると、それは見逃す。すべては警官の気分しだいだった。捕虜は屈辱に耐えさせ、「劣等な」敵国人として支配する、だが死なせてはならないのだ。医師の診断のあとに一時的に卵や牛乳が与えられるが、また元にもどる。生かさぬよう殺さぬように最小限の食事が与えられた。小さなトーニは寒さと栄養不足のためか、日に30回もの頻尿がつづいた。

飢え

最初のうちは外部の友人たちが食料を送ってくれたが、警官の手をへて、その一部しか渡されなかつ

た。自分が受け取ったものはみなで分け合っていたが、しだいにそれが機能しなくなった。当時、米の配給量は、通常の日本国民には一人1日2合3勺¹³⁾。収容者16人—ダーチャの妹2人はまるで存在しないかのように数に入っていなかった—に対して、28合だったのが1月には26合となり、しだいに減量されていった。米の代用の大豆や粗悪な材料の乾燥麺類が1人当たり1食12本、小麦粉やパン代わりに薄切りの乾燥さつまいも。それらを日に3回の食事に分割すると、朝食はスプーン数杯のご飯にお椀1杯の味噌汁で、昼と夜は増量のためにご飯をお粥にした。東京の内務省から砂糖や卵、米、味噌、醤油などの缶や箱が届いているのを目撃したが、それらは地元の警官に横流しされていたことがのちにわかった。配給分のない小さな妹たちは茶碗をもって、他の収容者たちからスプーンに1杯や半分の「お恵み」をもらって歩いた。

誰かが二本の大きな食パンを届けてくれたが、警官が収容者に渡さずに土に埋め、さらに人糞までかけていた。それを掘りだすと、カビが生えて、とても食べられそうもなかったが、カビを取り除き、できるだけきれいにして分けあって食べた。「私たちは空腹だった」とのちに母親は娘に話す。ある日の昼食に、いつもの乏しい食事のほかに豆入りの卵焼きがついた。それは赤十字社の視察のための「ごちそう」で、視察団は収容者が食べているのを見て、話も聞かず、そそくさと立ち去った。

「赤十字国際委員会抑留所視察報告(1944年1月—3月)」¹⁴⁾に各地の抑留所の1人1日当たりの食事が記載されている。それによると、天白寮のこの視察の日(1944年3月19日)は、パン110g、米飯220g、マカロニ15g、うどん30g、肉15g、魚12g、卵12g、ミルク14g、マーガリン62ccで、これから視察ゆえの昼のごちそうも作られたのである。日付けは異なるが、同報告書に記載されている埼玉、神奈川、東京1、東京2、兵庫、長崎の各抑留所では、それぞれパンが356g、300g、600g、600g、400g、225gとなっており、天白のイタリア人がいかに苛酷な待遇を受けていたかが読みとれる。さらに同じイタリア人でも、公館員が収容された東京の聖フランシスコ教会では、パン600gのほかに、肉、魚、卵などの蛋白源がそれぞれ56g、112g、1.5個と、天白寮に比

べてかなり多い。内務省は既定の量を配付していたのだから、天白寮で警官による横流しがいかに横行していたかを物語る数字である。

与えられるだけでは到底生きのびられず、しかも天白周辺は荒地で食用になる植物が少ない。どんぐりと麦わらだけはふんだんにあるが、試してみたが食べられない。かくて、その多くが知識人であるイタリア人収容者がゴミ捨て場の警官の残飯を漁るのである。玉葱、じゃがいも、みかんの皮、魚の尻尾。羞恥心は消えた。そして亀や野ネズミ、蛇、野良犬。

このゴミ箱漁りの次の食糧確保は「争奪戦」だ。「小さな教会」と呼んでいた食糧庫や庭の野菜庫のものを「盗む」のだ。いずれも綿密な準備と敏捷な行動が要求される行動であり、この命がけの集団行動によって厳寒の冬を乗り切った。

そして1944年7月。ついにハンガーストライキと後々まで語り伝えられるフォスコのユビキリが起こる。ハンガーストライキのきっかけは戸口で発見された野良犬の糞だ。収容者たちはいっさい関与していなかったが、全員に絶食が命じられた。収容者たちは警察署長との面談と待遇改善を求めて二食抜いた。すぐに名古屋警察署の武装隊が到着し、隊長が全員を並べて、イタリア人に「おまえたちは何の権利もない…お前たちを生かしておくだけでも大いなる譲歩なのだ…イタリア人は嘘つきだ、裏切り者だ…」と言った。これに対してフォスコは薪割りをしていた角材の上で左手の小指を切り落とし、「イタリア人は嘘つきでない」と言いかえして、それをValentinoに差し出した。彼の白い軍服が血まみれになり、他の警官たちも動揺して真っ青になった。

フォスコのこの行為は衝動的なものではない。周到に計算されたパフォーマンスだった。彼の念頭には武士の「ハラキリ」があり、武士ではない平民や農民の抗議行動として「ユビキリ」をしたのだが、指きりとは子どもや恋人が小指を絡ませて約束しあうことで、実際に指を切るのは「指詰め」であり、こちらは一般市民ではなく、現在ではヤクザのすることである。いずれにせよ、一般の日本人のしないこの行為は警官たちを震え上がらせた。そして厳しい尋問が始まった。日本側は数日前にサイパンが陥落して東条内閣が総辞職したのがイタリア人のこの抗議活動の動機ととらえたが、彼らはそんなことを知る由も

なく、飢えの改善を求める集団行動にすぎなかった。フォスコは指はどこだと訊かれて、仲間がアルコール漬けにしていたそれを差し出して、「どうぞ、スキヤキ¹⁵⁾にでも」と言った。だがこれも軽薄な挑発ではない。前日、ストライキの責任が自分たちに及ぶのを恐れた警官たちが自前でスキヤキを用意して、イタリア人に提供したのだ。むろん彼らは拒否した。ところがあいにくこれもイタリア人の知らないことだったが、折しも連合側が日本兵の人肉食を新聞で激しく攻撃していた。フォスコの言葉に警官は激怒し、「謝れ！」と怒鳴り、謝るつもりのないフォスコを殴りつけた。だがその後、一時的にだが、待遇は明らかに改善された。

こんな苛酷な状況にありながら、イタリア人は総じてグループとしての連帯行動をとった。ストライキも全員で行った。時間がたつにつれて、各自の欠点や悪癖があらわになりだしていたが、基本的に全体の利益と連帯が守られた。これは実に貴重なことである。アウシュヴィッツなどの生存者の証言にも、しばしば生きのびるためには連帯感が必要だと書かれている。アウシュヴィッツほどではないにせよ、天白のイタリア人たちは極度の飢えに苦しめられながらも自発的に全体の利益と連帯感を尊重し、全体にかかわることを投票で決定する「全体会議」の原則を守り通した。私は彼らの人間性あふれる理性に心からの賞讃を惜しまない。

こんな「事件」を、ダーチャはどう見ていたのだろうか。7、8歳の育ちざかりの彼女はどんなに空腹だっただろう。「食べる物のない午後の耐えがたい暑さ、もぎたてのみずみずしい桃を思い浮かべては、あまりの生々しさに自分の手に歯をたてた」と書いている¹⁶⁾。このころの彼女はイタリア語も日本語も書くほどの力はなかったのだろう。のちには口で話すのが苦手で、書くほうが自分をよく伝えられたという彼女は、収容所に閉ざされていたときにはその時期のことを書いていないのである。彼女の記憶は文章としてではなく、肉体に刻まれて残ったのだ。小石を肉や果物などにみたてて、いつまでもしゃぶっていた。大人たちとともに以前食べたものを思い出してはその架空の食べものの記憶を反芻した。妹たちが「お腹がすいた」と泣いても、ダーチャは泣かなかった。ダイコンを食べるとき以外は、「いまでも、茹で

たダイコンの小鉢を前に、情けない、むかつく思いで力なくすわりこんだ私の痩せこけた頬を、勝手にあふれでた涙が流れ、ころころと膝に転がっていったのをおぼえている」¹⁷⁾ ダイコンはイタリアの蕪に似た野菜で、ダーチャはそのにおいにむかつくが、それがたまに出てくる野菜の栄養源であり摂取しなくてはならないことはわかっている。だが涙が勝手に流れるのだ。また、ダーチャが蟻を食べたと書いてあるのを母トパーティアが、それはまちがいだ、蟻など食べたことがないと否定しているが、これも 7 歳の子どもの側に立ってみると、母親の否定は独断的に思われる。お腹のすいた 7 歳の子は、蟻を見つけて食べたのだろう。この話を裏付けるようなエピソードを彼女自身、「飢え」¹⁸⁾という短篇で書いている。

天白から広済寺というお寺に移されてからの話である。あまりの空腹に目がさめて、女の子は祭壇の仏陀へのお供えの残りものを探しに行く。毎朝、住職夫人がご飯に汁物、お酒、野菜の煮物などをお膳に並べて供えていた。お腹をすかせた子どもたちを憐れんで、お祈りのあとで、お線香くさいご飯を食べさせてくれたこともあった。暗がりのなか、本堂の祭壇の器を手で探してみた、だが米粒ひとつ残っていなかった…。

…祭壇のお香のしみた上等の布の上でなにか動くものの気配がした。灰色の痩せたネズミが動きをとめて、女の子を見上げていた。これは最高のごちそうだわ。肉なんてもう一年以上も食べていない。彼女はとっさに手を伸ばして、バラ色がかった尻尾の先端をつかまえた。ネズミは逃れようとした。彼女は手に力をこめた。ネズミは振り向いて、怒って、睨みつけた。彼女はもう一方の手で木の燭台をつかんで、狙いを定めた。そのときふいに、どこからか小さな小さな子ネズミが 2 匹飛びだして、守ろうとでもするかのように大きいネズミに駆け寄った。たちまち、手の力が抜けた。少しずつ、手がゆるんで、燭台が床に落ち、その隙にネズミはチュウチュウなきながら子ネズミをしたがえて、姿を消した。女の子はふとんにもどって目を閉じた。外はひどく冷えて、物干し台の屋根からつらが下がっているのが見えた。ガラス瓶のような緑色の空を背に、うっすら月の光を浴びたその氷の結晶

は美しかった。起きて、それを一本取ろうと思った。なんといったって、空気よりつららをしゃぶるほうがましだわ、と思いながら、女の子は眠ってしまった。山盛りスパゲッティの夢をみた。

マライーニはフィクションとも実話とも明かしていないが、これは実体験であろう。飢えた子にはネズミはごちそうなのだ。蟻にしても同じである。これほどの極限状態を経験したことの無いわれわれには言葉がない。

解放されて帰国するとき、このすさまじい飢えはむろんなくなっていたが、その傷は癒えず、娘たちの荷物には生の米の入った袋がしっかり隠されていた。取り上げようとする、彼女たちは野獣のような金切り声をあげ、結局イタリアまで持ち帰った。その後もしばらく、食べものを隠しておく習慣が抜けなかった。子どもにこんな思いをさせたことに私たちの国は責任をとらず、謝罪しない。¹⁹⁾

牢獄

ダーチャ・マライーニは日本の強制収容所ですさまじい飢えとともに、牢獄を体験した。天白寮では二階の一室に一家全員が収容された。玩具を買うことが禁止されて、子どもたちは苛々していた。YWCA が送ってくれた本は取り上げられた。もろもろの厳しい規則があった。子どもには比較的ゆるやかだったが、そのために背筋が凍るようなことが起こった。庭に出ることが許されていたダーチャは、庭から出て農家へ行き、その子どもたちとお蚕を集めるのを手伝って、おにぎり 1 個や卵 1 個などをもらっていた。ところがそれが発覚して、警官がサーベルを抜き、怒鳴りながらフォスコの喉元に長い刃を当てた。

この牢獄で、ダーチャは東南海地震と名古屋空襲を体験した。1944 年 12 月 7 日午後 1 時 36 分、マグニチュード 7.9 の大地震が発生。たちまち漆喰やガラス窓が粉々になった。幸い天白寮は耐震対策が完備していて、揺れに揺れたものの倒壊しなかった。空襲はまずは 1944 年 11 月 24 日に始まった東京のあと、12 月 13 日午後から名古屋空襲となった。防空壕に逃げ、工場や名古屋市街が燃え上がるのを震えながら眺めた。翌年空襲が再開し、

3月10日の死者10万人、罹災者100万人を出し、首都を焼け野原とした東京大空襲のあとが名古屋だった。3月から最後の7月26日の空襲で名古屋も瓦礫と化した。寮の近くにも爆弾が落ちた。ダーチャは窓辺に立って、燃えさかる町を眺めながら、「ドウシテ、パパチャン、ドウシテ？」と何度も繰り返かえした。

『神戸への船』のなかで書いている。

…今でも目を閉じるとそれらの黒っぽい戦闘機が見える。低く飛び、臨月のお腹の大きなアヒルのようにのろのろとぶざまだ。名古屋の強制収容所の空のすぐ近くで、それらは私にはそんな風に見えた。そのお腹の中には卵が入っていて、これから出てきて、みんなの頭の上に黄身を吐きだすのだ、と私はつぶやいた。実際に卵がお腹から出てきて、ひとつまたひとつと地上に向かってすすると落ちてくるのが、明るい空を背景にしてはっきり見えた。だが、卵の殻が割れるのは、やわらかくておいしい黄身をまき散らすためではなく、射程内のすべての者を傷つけ殺す鉄の小さな怪物と炎を吐きだすためだった。私は何度、防空壕がわりの穴に隠れるために走りながら、頭上に、シュルシュルという爆弾の破片の音を聞いたことだろう！ 夜中に並んで飛んでゆくエンジンの音、それはまだそこに、私の耳のなかにある。それは恐怖の音だった²⁰⁾。

この空襲の光景がダーチャの原風景であろう。雪と松の木のにおいのする家があった札幌、いじめられても追いかけて仲良くなった友だちのいた京都の記憶は、この空を焼きつくす戦闘機の光景に塗りつぶされただろう。今にも卵の黄身を吐きだしそうな黒いアヒルは人を殺す鉄の矢を落とすのだった。日本の強制収容所で牢獄と飢えを体験した少女は、飢えた、牢獄に閉ざされた者の目で世界を見る。その目に映る世界は牢獄に満ちている。寄宿舎、学校、職場、家庭、精神病院、さらには家族、結婚などの制度、夫婦、親子、恋人などの関係性にも牢獄がある。2歳にならずして離れた、ほとんど未知の国イタリアに降り立って、世界から排除されているという意識をかかえつつ、その世界に立ち向かわなければならなかった少女はその後、

フィレンツェの寄宿舎に入れられた。そこはまたもうひとつの収容所であり、牢獄だったが、同時に隔離の生活そのものは、ある種の慰めを見出せる避難所でもあった。ここに畏があるのだ。閉ざされている者がその小さな慰めのために牢獄にいることに慣れ親しみ、ひらかれた世界に出て行こうとしなければ。

瘦せっぼちの少女

「あんなにも激烈で苦しかった強制収容所での数年」をダーチャは何年も語ろうとして語れないと言う、それは記憶の暗い領域だと言う。記憶が欠落しているというのではない、いまだにその素材としての体験との適切な関係がつかめないのだという。プリプリした肉体の持ち主だった幼女は強制収容所から瘦せっぼちの女の子になってイタリアに帰った。いまだにそれを書けないほどの記憶の暗い領域となった収容所も学費滞納者としてみなの前で名前を読み上げられた寄宿舎も閉ざされた牢獄ではあったが、閉ざされていた分、安全でもあった。母の故郷、シチーリアのバゲリーア、戦後のイタリア社会はこの瘦せっぼちの少女に新たな現実をもたらした。

それはすでに帰国の途上、大西洋横断客船で若いアメリカ人水兵が少女を自室に連れ込んだときに起こっていた。男が彼女の膝を撫ではじめ、彼女は脱兎のごとく逃げた。そしてシチーリアでたてつづけに二つの事件に遭遇する。ひとつは、ある神父が彼女を抱きしめてキスした。もうひとつは、家族ぐるみの知人の男がズボンの前を開けて自分の性器を握らせたのだ。それは日本で収容所を抜け出て農家の作業を手伝ったときの蚕のように、湿りけがあり、ほろほろとやわらかかった。

性が何であるかも知らない少女は、のちに、自分の肉体が男の欲望をかきたてる対象になっていたことを知る。そして自分が無自覚なままに男たちの視線にさらされていたことを知るところから。男たちを、大人たちを醒めた目で見始める。こうして少女はやがて書くだらう小説の主人公に近づいてゆく。のちにフェミニズムに関わるようになって、自分が体験したようなことを多くの少女が体験し、なかには一生、口を閉ざしてしま

う女性もいることを知った。だがそれはのちの話だ。ダーチャの牢獄からの解放は第1作の執筆へ、『ヴァカンス』へと向かうことによって成就するのだ。そしてある日、一人の少女が作家の家のドアをノックする。

『ヴァカンス』

1962年に刊行されたこの第1作の小説の新版の序文に作者は書く。

…彼女はひと切れのカビだらけのパンに狂喜するほどの飢えを体験した。どんな偶然が幸いしたのか、彼女は戦争を、強制収容所を生きのびた…17歳で『ヴァカンス』と題する本を書きだした。だがヴァカンスといっても気晴らしや楽しい旅行の意味ではない。文字通りの空虚、身をよじるばかりの苦しさで答えを探していた《空っぽ》の感覚だ。ドアの向こう、道路の向こう、川の向こう、街の向こうには誰がいるのか、何があるのか、理にかなった何か、身をささげる価値のある何かがあるのか、それとも苦しみと混乱だけなのか？²¹⁾

ここでは飢えは封印されている。それは、作品ではこれからやってくるのだが、作者にとっては終わった。生きのびた少女はこれから生きていかなければならない。戦後社会の絶望と混乱と貧困。そのなかで少女は自分が、女が男たちに《物》として見られていることに気づく。その現実の衝撃と恐怖。そして寄宿舍というもう一つの収容所。

主人公のアンナは14歳。²²⁾ 弟とともに寄宿舍に入れられている。第二次世界大戦末期のドイツに占領されたローマ。夏休みに父親がオートバイで迎えに来る。父親はドイツ軍関係の怪しげな商売をしているらしい。海辺の家に新しい「ママ」がいると言う。無口で内気で無愛想なアンナと弟は、海辺に寝そべり、夜はカードにふける大人たちを冷やかに眺めている。自分を自分でどうしたらよいかわからないようなアンナはしかし、男たちの目を引く。海辺で声をかけてきた男たちに求められるままに服を脱ぎ、差し出されたワインを飲みタバコを吸い、老年にさしかかった男の家に行く。男が押しつけたはした金

で自分にはアイスクリーム、弟にチョコレートをひと箱買う。お金なんかほしくない。ほとんど言葉を発しない彼女はしかし、階上に住む少年に「ほんとうに愛しあうってどういうふうにするの？」と訊く。少年は耳まで真っ赤になって「おまえはまだ小さすぎる」と言うだけだ。数日後、彼は召集される、ドイツへ送られ、ロシア軍と戦わせられるのだ。そして夏休みは終わる。戦争も終わろうとしていた。寄宿舍へ帰る途中のバールの主人に父親は「あんたたちファシストは終わりだ」と言われる。

小説は「ヴァカンスは終わった」という1行で終わる。それはアンナのヴァカンスが、《空っぽ》が終わったということだ。浜辺でアンナはつぶやいた。

「わたしはいま外にいる。だからこの世のことをすべて知りたい。何でもいっぱい食べてやる。でもいまのところはあまりおいしくない」彼女は世界のすべてを食べようとするのだ。出されたタバコやワインを受け入れて。ヴァカンスが終わり、やがて戦争が、ファシズムが終わる。いや、イタリアでは民衆が立ち上がって自国のファシズムに、ドイツのナチズムに抵抗して戦争を終わらせるのだ。アンナがこれから出会うだろう人たち、バールの主人やその友人たちのめざす新しいイタリアが、新しい世界がかすかに見えている。

おわりに

私はダーチャ・マラーニに1982年の来日のさいにはじめて会い、急遽彼女の作品を読んで対談をした。そして目の前の女性が日本の強制収容所をどう生きのびたのか、それについて簡単には訊けないと感じていた。そのことについて書く予定はあるのかとだけ訊ねた。彼女は「いまの時点で書くと、遠い国で起こった出来事というエキゾチシズムになりかねない。日本のことはむろん書きたい。だから自伝のかたちになるだろう」と答えた。²³⁾ 11年後に自伝小説 *Bagheria* が出たが、強制収容所の体験は書かれているものの、私には、彼女のまなざしはその先に、シチリアの再発見にあり、それを語り、新しい一步を踏み出してゆくことにあると思われた。2001年の *La nave per Kobe* は、父親に渡された母の航海日誌に沿ったもので、収容所そのものについては妹のトーニ・マラーニが書きたいと申し出たという。それゆえ

ダーチャはまだ収容所生活に正面から向きあっていないのであり、死ぬまでに自分で日本での自分のことを書きたいと語っており、私自身、切にそれを願うものである。

拙著『ダーチャと日本の強制収容所』に目をとめて、今回の執筆に誘ってくださった、Michelangelo La Luna, Professor of Italian at the University of Rhode Island に心から感謝申し上げます。
Noriko Mochizuki

註

- 1) Fosco Maraini (1912-2004) フィレンツェ生まれの人類学者。登山家、写真家。フィレンツェ大学に日本語・日本文学科を創設し、イタリア人の日本研究のための「イタリア日本文化研究会」を設立。著書多数。Topazia Alliaia (1913-2015)シチーリアのVillafranca 公爵の娘。若くしてRenato Guttusoなどとともに前衛画家として活躍していたが結婚後断念。帰国後ローマに画廊をひらき前衛画家の育成に貢献した。ベトナム戦争のときには徴兵拒否の若者たちを匿った。その一人の当時 18 歳だったアメリカの詩人 John Minczeski は彼女に詩集 *Circle Routes*, The University of Akron Press, 2001 を捧げた。
- 2) Intervista di Hokkaido Shimbun, 14-10-2015
- 3) Dacia Maraini 2001, p8)
- 4) YAMATO: Mensile Italo Giapponese (1941-1942) Direzione e redazione, Roma. Amministrazione, Novara, Istituto Geografico De Agostino. Presidenti: Pompeo Aloisi, Giacomo Auriti
- 5) Antonio Maraini (1886-1963) 有名な彫刻家でファシスト全国美術家組合委員長として党の美術政策を推進。27 年から 42 年までヴェネツィア・ビエンナーレ委員長。息子に良かれとファシスト党党員証を用意し、フォスコが激怒して彼の目の前でそれを破棄したのがその後の長い親子の断絶の原因となった。
- 6) ハロルド・レーンはクエーカー教徒で、宗教的信念にしたがって良心的兵役拒否を貫き、21 年、日本政府の募集した英語教師に応募して来日していた。レーン夫妻も宮沢もまったくスパイなどではなかったが、「わが国内に置いて合法的に事業を営んでいる各種の外国組織こそ、恐るべきスパイの正体なのである」(内務省警保局外事課参考資料、防諜講演資料、41 年 4 月より) とみなす特高によって、レーン夫妻はスパイ、彼らと親しい宮沢が情報提供者とみなされた。翌 9 日の各新聞は大げさな見出しで「外人スパイ一斉検挙」と報じたが、逮捕者の名前も容疑もいっさい明かされていない。警察の発表そのままに、国民、外国人をスパイにしたのだ。レーン夫妻は 1950 年、北大の謝罪と復職の要請を受けて再来日し、今は札幌の円山墓地に眠っている。
- 7) 上田誠吉、1988、p26
- 8) 『外事月報』1943 年 10 月分 p3-6
- 9) F. Maraini, 2002, p558
- 10) 1945 年 4 月 25 日のパルチザンの総蜂起 2 日後、ムッソリーニとともにスペインへ向けて逃亡し、スイスとの国境でパルチザンに捕まって、翌日処刑されたあと、ミラーノのロレート広場に逆さ吊りにされた。
- 11) F. Maraini, ibid. p567
- 12) D. Maraini *Bagheria*
- 13) 1 合 (go) は 10 勺 (syaku) で、1 合は約 150g
- 14) Mayumi Komiya: 1999, p. 29
- 15) 牛肉を野菜などとともに煮て食べるごちそう。
- 16) *Bagheria, p*
- 17) D. Maraini, p171
- 18) D. Maraini, *La fame*
- 19) 2015 年 6 月 9 日の中日新聞で、三品信記者は『ダーチャと日本の強制収容所』の紹介記事のなかに書い

ている。「日本と第二次世界大戦をめぐる収容所」といって、在米日系人の強制収容や戦後のシベリア抑留など《被害者》の立場から語られることが多いが、一方では冷酷な《加害者》でもあったのだ。『名古屋市史』や『愛知県史』の委員を務め、名古屋市の市政資料館などで保管されている戦時中の公文書などを研究してきた郷土史研究家の西形久司氏は、この収容所に関する資料は見た記憶がないと語る。冷酷な加害者の事実を隠蔽しているのである。

20) D. Maraini, 2001, p171

21) D. Maraini, 1998, p.VI

22) 初版では14歳だが、新版では11歳である。初版で、11歳ではあまりにスキャンダラスだという出版社の意向で14歳とし、Einaudiの新版で元にもどしたという。

23) 文芸誌『海』

参考文献

Dacia Maraini: *La nave per Kobe*, Milano, Rizzoli, 2002

Dacia Maraini: *Bagheria*, Milano, Rizzoli, 1993

Dacia Maraini: *La vacanza*, Roma, Lerici, 1962, Torino, Einaudi, 1998

Dacia Maraini: *La seduzione dell' altrove*, Milano, 2011

Dacia Maraini: *La grande festa*, Milano, Rizzoli, 2011

Dacia Maraini: *Amata scrittura*, Milano, Rizzoli, 2000

Fosco Maraini: *Ore giapponesi*, De Donato, 1959. 邦訳『随筆日本—イタリア人の見た、昭和の日本』、松籟社、岡田温司他訳、2009

Fosco Maraini: *Case, amori, universi*, Milano, Mondadori, 2002

Toni Maraini: *Ricordi d' arte e prigionia di Topazia Alliata*, Palermo, Sellerio, 2003

『外事月報』内務省警保局外事課、1938年8月—1944年9月

上田誠吉：『国家秘密法の爪痕・ある北大生の受難』、朝日新聞社、1987

上田誠吉：『人間の絆を求めて—国家秘密法の周辺』、花伝社、1988

石戸谷滋：『フォスコの愛した日本』、風媒社、1989

鶴見俊輔、加藤典洋、黒川創：『日米交換船』、新潮社、2006

アール・マイナー：『日本を映す小さな鏡』、吉田健一訳、筑摩書房、1962

John Minczeski: *Circle Routes*, The University of Akron Press, 2001

小宮まゆみ：「お茶水史学」43号1999-09.

Zorach Warhaftig: *Refugee and Survivor*, 1984, Yad Vashem and OT VAED, JERUSALEM, ISRAEL. 日本語訳『日本に来たユダヤ難民』滝川義人訳、原書房、2014

マライー二家の受難

上田誠吉著「人間の絆を求めて」（花伝社・刊）から

マライー二と宮沢

1938（昭和13）年12月15日午後7時40分、イタリア人フォスコ・マライー二は妻トパーチャと2歳の娘、ダーチャとともに札幌駅に降り立った。1912年11月15日生まれのマライー二はこのとき26歳で、その前年にフィレンツェ大学を卒業し、やがて博士号をとり、すでにG・ツッティとともにチベット探検の経験をもつ少壮気鋭の文化人類学者であった。国際学友会の奨学金を得て、北海道大学解剖学教室の児玉作左衛門教授のもとでアイヌ民族の研究をするために来日したのであった。

マライー二は、1941（昭和16）年4月まで札幌に滞在してアイヌ研究を進め、1942年には『アイヌのイクバシユ』（アイヌのひげあげべら）という研究書（イタリア語、イタリア文化協会・東洋研究書第1巻）を発表したが、同時に札幌で多くの日本人学生と交友を結び、北大や小樽高商に勤務する欧米人とも交際を深めた。登山やスキーを共にし、日本人学生と欧米人との親睦、研究のサークル、「心の会」（ソシエテ・デュ・クール）に加わった。マライー二は後に書いている。「私が幾人かのまさに最上の日本人の友を得たのは、この『心の会』を通じてであった。そのいくつかのケースは、相互に共感と尊敬とが結びついたものであって、そのとき形成された友情は生涯続いたのであった」（『PASSEROTTO—半世紀前の札幌の思い出—』、『会議は踊る たゞひとたびの』）。

その深い友情を交わした日本人学生の一人が北大工学部学生宮沢弘幸であり、その交友の詳細は拙著『ある北大生の受難—国家秘密法の爪痕』に叙述した通りであった。

マライー二は1941（昭和16）年4月京都に移り、知恩寺の裏手、飛鳥町に住んだ。京都大学でイタリア語を教える講師となったのである。この年の夏、宮沢は京都にマライー二を訪ね、ダーチャを連れて桂川の保津峡に遊んだ。水浴を愉む二人の写真が残

されている。その直後、宮沢は2度目の大陸旅行に出発した。

宮沢とくの訪れ

太平洋戦争が始まったこの年12月8日の朝、宮沢は北大英語教師、レーン夫妻らとともに軍機保護法違反の疑いで特高警察に検挙された。マライー二が京都で宮沢の母、とくの来訪を受けたのは、翌年春のことだった。母とくは、弘幸が検挙されて北海道内の警察署の留置場を転々としていることを語り、「弘幸はなぜ捕まったのでしょうか、なにか検挙の理由に思い当たることはありませんか」と尋ねた。とくの京都行きはよくよく困った果てのことだった。弘幸が検挙されたことは、その日のうちに知人、遠藤毅（当時札幌通信局長）から電話で東京の宮沢家に伝えられた。両親は直ちに札幌に出向いて、検挙の理由と事件の見通しを尋ね回ったが、誰も教えてくれる人はいなかった。ことは軍機にかかわる。特高はなんにも答えない。知人たちにも見当がつかない。こうして母とくは、藁をも掴む気持ちで京都に弘幸の親友、マライー二を訪ねた。

マライー二はこの時初めて宮沢らの検挙を知った。そして「私はすぐにこれはひどいでっちあげであると察知して憤慨しました」（1987年6月20日付、札幌弁護士会主催の市民集会宛メッセージ「宮沢弘幸の思い出」）。

しかしマライー二にも答えるすべはなかった。特高が宮沢に対してどんな落とし穴を用意したのかは、見当がつかなかった。札幌時代の欧米人との交際を思い返してみても、特高のついている隙はなかったはずである。「心の会」でも話題は慎重に選ばれて、「ホットな問題」は避けたのだった。「軍隊の重々しい手や軍国主義的な指導者らのもとに、日毎により狭い国家主義のうちへ閉鎖的になりつつあった世情のなかで」、「警察もまたいろいろな形をとってますます不愉快な存在になってきた」が、しかし「私たちはみんな警察が日（あるいは耳）を光らせていることを知

っていたし、それに注意深いことに越したことはなかったからである」(前掲『PASSEROTTO』)。

マライーニは宮沢とくへの落胆する姿に心を痛めたが、しかし慰めようもなかった。宮沢とくは肩を落としてマライーニ方を辞去した。

マライーニは宮沢とともに北海道の冬山を滑走した日々のことを思い起こした。白銀の山頂に雪穴(イグルー)を作って過ごした夜の冷たさを、いま宮沢は獄中で経験しているに違いない。マライーニは、その冬山で使用した寝袋を獄中の宮沢に差入れることを思い立った。しかし宮沢はスパイ容疑で拘禁されている。マライーニがそれを直接に郵送することは危険だったので、北大時代の共通の親友で京大にきていた武田弘道に依頼した。宮沢はマライーニの名前がなくても、一目でそれがマライーニからのものであることがわかるだろう。武田はマライーニから受け取った寝袋を東京の宮沢家に送って、差入れを依頼した。母とくはこれを差入れようとしたが、拘置所当局は受領を拒絶した。

身辺に迫る危険

太平洋戦争の開戦と同時に、敵国人となった在日欧米人たちは「戦時特別措置」によって収容され、その一部は検挙されて自由を失ったが、日本がナチス・ドイツとともに軍事同盟を結んでいたイタリアの国民、マライーニには、まだ京大で教壇に立つ自由が与えられていた。しかし戦局が悪くなるとともに、マライーニの身辺にも特高と憲兵の圧力が強められた。憲兵が自宅に上がりこんでマライーニの書斎に入り、書籍、書類、手紙の類を調べていった。そのような困難な状況のもとで、1942(昭和17)年3月には、アイヌ研究のうえで師事してきたN・G・マンロー博士の容態の悪化を知って、北海道・日高の平取村二風谷にマンロー博士を見舞い、4月11日にはチヨ夫人とともに博士の死を看取った。「昭和10年代の二風谷」、『創造の世界』66号)

1943(昭和18)年になってから、京都の特高に呼び出された。出頭してみると、特高の机の上にはマライーニが書き損じて捨てた書類や手紙が、つなぎあわせて置かれていた。尋間はたわいないものだったが、身辺は厳重に監視されているという言外の圧力を十分に感じさせるものだった。すでにみたよ

うに、マライーニ一家はこの年9月に収容されたが、その直後、京都の家で幼児たちの家庭教師を依頼していた森岡まさ子夫人は、その夫とともに特高に検挙されて拷問を受けた。広島出身の森岡夫人は、1945(昭和20)年10月に上京し、マライーニの寄宿先を訪ねて、ことの次第を語った。それによると、特高はマライーニがスパイであったことを認める調書に署名することを要求して、夫妻を殴打した。すでにマライーニがスパイであることを自認したから、どんなに否認しても無駄だ、と行って脅かされた。夫妻はマライーニがそんなことを認める筈がないと信じて頑張った。そしてやがて釈放された。マライーニは自分たちがスパイの落とし穴に落ちこまずにすんだのは、森岡夫妻のおかげだったことを知って深い感動を覚えた。マライーニは書いている。「人々は貧しかったかもしれないが、しかし少なくとも不信でずたずたに切りさかれた獣のような暮しを送ることをはっきり拒否していたのだ」(フォスコ・マライーニ著『ミーティング ウィズ ジャパン』、以下おおむねこの本による。特に断らない限り、引用はこの本からのものである)

故国での異変

マライーニの祖国、イタリアでは第二次大戦の末期を迎えて、激しい変動が起こっていた。1943年7月、連合国軍はシシリー島に上陸し、1922年以来のファシスト政権は崩壊に瀕していた。7月25日ムッソリーニは失脚して逮捕され、バドリオ元帥が後を継いだ。そしてバドリオ政権は9月8日に連合国に降伏し、10月13日に対独宣戦を布告した。他方ムッソリーニは9月12日にドイツ軍に救出されてナチス・ドイツのかいらい、ファシスト社会共和政府をつくり、その首班となったが45年4月28日に銃殺される。当然のことながらこれらの異変はマライーニの身辺にも及んだ。マライーニは書いている。「1943年を過ぎるとイタリアは2つに分割されて、私は日本の官憲に身柄を拘束されて家族ともども名古屋のそばの天白というところにある収容所に抑留されました。私達は1945年8月15日まで約2年間そこで暮らしました」(前掲「宮沢弘幸の思い出」)。1943(昭和18)年9月8日以降、マライーニ一家(妻と長女、日本で生まれた次女ユ

キ、三女ト二合わせて五人)その他のイタリア人たちは同盟国の国民から一転して敵国国民の処遇を受けた。すべてのイタリア人が収容されたわけではない。彼らがムッソリーニのファシスト社会共和政府ではなく、イタリア王室のもとにあったバドリオ政府を選んだからである。「私たち全員は、嫌疑だけにせよ公然と宣言したにせよ、いずれにしても反ファシズムであったために、拘禁されることになった」のである。だからプリンチピーニ大佐のように、ファシストとして引き続きムッソリーニに忠勤を励んだイタリア人は、日本政府から唯一のイタリア代表として承認されていたのである。そしてバドリオとムッソリーニがイタリア半島の南北にその2つの政権を維持していた頃、日本の収容所でマラーニたちはどちらの政権を支持するのかについて、厳しい尋問を受けた。祖国の事情について極度のニュース欠乏の状態にあったマラーニたちは、つとめて寡黙に対応した。

名古屋への護送

マラーニ一家が京都の家に軟禁されたのは、9月8日のことだった。外部との連絡は電話を含めて一切禁止された。身辺を片付けるように、といわれたが、なんのためかがはっきりしなかった。おそらくどこか収容所に連れていくためだと思われたが、正式に監禁が知らされたのは数日後のことだった。妻トパーチャは娘たちを連れて、警官の護衛つきで医者診察を受けに行くことが許されたが、その2日後に京都を発つことになった。その日は京都が一番美しい秋晴れだった。娘たちは姉さんと呼んで親しんできた森岡夫人と泣いて別れを惜しんだ。

年来の付き合いで顔見知りになっていた京都の警官たちは親切で、出来るだけ目立たないように護送してくれた。2台の車に分乗して、日曜日の遠出に出掛けるような格好で京都駅に向かったが、列車に乗ってからは様子が変わって、拘束されていることが傍目にもはっきり判るようになった。他の乗客との会話は禁止され、窓外を見ることは許されず、まして停車中に車外に出ることはできなかった。まだ2歳になったばかりのトニは、車内の日本婦人たちの関心を惹いたので、警官はミルク瓶を持たせてマラーニとトニを制動手の部屋に閉じこめてしまった。2

時間後に名古屋に着いた。ここで名古屋の警官への引き継ぎが行われたが、京都の警官はもの静かで丁寧だった。それに上司との間に面倒なことが起きないことを専一にしているような様子だったが、名古屋の警官はこれとは正反対で固い顔つきをして言葉使いも厳重な命令調だった。名古屋で電車に乗りかえて八事で降り、徒歩で石だらけの丘を上って天白(現名古屋市天白区)に向かった。

四人の特高たち

ある大きな会社の社員保養所であった天白寮というところで、16人のイタリア人たちの収容生活が始まった。名古屋の警察部長がやってきて、イタリア人たちは完全に警察の掌握下にあり、イタリア人たちがそのように振る舞えば、万事はうまくいこう、と訓示した。そして4人の特高が天白寮に住み、2人ずつが組んで交替勤務につくことになった。4人の特高の上官は粕谷という男で、諸君は完全に日本式の生活を送ることになる、と宣言した。

粕谷は30歳位の痩せた小男で、身だしなみがよく、決して大声を出したことはないが、また滅多に微笑したこともなかった。神経質そうな、インテリ風の手つきをしており、少し英語をしゃべり、それにイタリア語も理解していた筈だ。粕谷は四人のなかで一番嫌われ、恐れられていた。それは粕谷が一番インテリだったからだ。最初の頃、西村という特高が余分の野菜と米を支給したが、粕谷はこれを見とがめて禁止した。次の2人組の上官は青戸という50歳くらいの男で、少し荒っぽく短気だったが、粕谷とは反対に警察世界での昇進をすっかり諦めた感じだった。青戸は粕谷の冷酷さと洗練を持ち合わせていなかったもので、それだけに率直で庶民的なところがあつた。青戸は時々大きな声を出して冷静を失うことがあつたが、しかしその手中にある被収容者に対して、粗野だが親切な家長ぶりを発揮することがあつた。機嫌のよいときに青戸に物事を頼むとその美質を示してくれたが、しかし粕谷はそうではなかった。4番目は藤田といって、若くて残酷、それに愚かで尊大な振る舞いが多かつた。4人のなかでは最も軍国主義的で、ことあるごとに日本の偉大さを吹聴し、天皇への崇拝を語つたが、しかし藤田は愚かだったから一番怖がられていなかった。

傷痍軍人の目

マライーニは戦後1953年から54年にかけて来日し、日本の各地を旅行したが、その際に名古屋の天白時代の4人の特高のうちの1人と再会した。それは東京、上野公園に盆踊りの見物にでかけた時のことだった。人ごみのなかで白衣を着た傷痍軍人が寄付を求めていた。その傷痍軍人と目が合ったのだ。

「私は彼を見、彼もまた私を見た。しかし私は思い出せなかった。彼は遂に「マライーニさんですか、私は西です、覚えていませんか、と問いかけてきた。彼は哀れな笑みを浮かべ、みじめにも一切の尊厳を失っているように見えた。すぐに私は収容所時代の警官の一人で、一番ヒューマンで丁寧な人だったことを思い出した。彼は2カ月ほど私たちのところにいて、やがてどこかにいなくなった。彼は云った、「私は召集されたんです、どうしようもなかったですよ、沖縄で飛行機の襲撃を受けてなにもしないうちに片足をなくしました」。

それはマライーニにとって苦痛な一瞬だった。なんと答えてよいかもわからなかった。「収容所での寒くてひもじい長い月日のあいだに、私たちは警官の悪口を言い続けてきた。しかし今はこの人の苦境になにか責任があるような感じがして、ひどく自責の念にとらわれた」。あいにくポケットはからだった。マライーニは自分のアドレスを書いて渡し、彼の幸運を祈ってその場を後にした。「私はお祭りの群衆にもまれて人波のなかに流された。暫くして振り返ると彼は頭を垂れてお辞儀をしており、やがて人ごみのなかに見えなくなった。西さん、どうか許してくれ」。マライーニはこう書いている。

飢餓との闘い

天白寮で終始イタリア人たちを苦しめたのは、食糧不足による飢餓と空腹との闘いだった。当初の2、3週間は持参してきた缶詰類で補食をとることができたが、やがて16人に対して、1日当たり米28合（一人当たり1合8勺）、スプーン2、3杯の味噌、醤油、それに若干の野菜が与えられただけだった。ときたま一人あたり半身の小さい魚が、そして月に1度位、何グラムかの肉が与えられた。

「この食事は生死のさかいで生命を維持するに過

ぎないものだった」。「1日に3回、朝はスプーン数杯のご飯と熱い味噌汁椀1杯、昼と夜は量を増やすために煮過ぎた、小さな皿1杯のご飯を食べたあとで、半時間ほどの安らぎと静けさがやってくる。そのあと再び空腹が、時には胃の痛みと激しい空虚感となり、時には極端な無力感となって襲ってきて、それは食前よりも一層苦しいのだ」。

「化学者と技師が額を寄せて計算した結果、私たちの1日の摂取量は多分800カロリー位だろうということになった。大人はなにもしなくても1日2000カロリーは必要だというのに」。「妻と子供たちは、もう部屋から外に出ないようになった。1月10日の日記に、妻は室内の温度が氷点下に下がり、子供たちは横になっている、と書いていた」。「この頃になると、私たちの食べ物に対する態度は、やさしい、神秘的な、そして宗教的ともいえるようなものとなり、少しでもそれが手に入ると、熱狂的な喜びを示すようになっていた」。マライーニは、未開人たちが食糧を尊厳視したことが初めて判った、と書いていた。夕食後に翌日分の食糧を特高のもとに取りにいったのだが、食糧を受領して帰ってくる仲間を迎えるときが1日のうちで最高の瞬間だった。「いつもより1合多いときは子供のように飛び上がって喜び、いつもより1合でも少ないときは絶望のどん底に落ちこんだような気分になるのだった」。卵が2つついた（16人に2つ）といって大喜びし、28合獲得したといっちは大声を出し、24合しかないといっちは悲しむのだった。米は26合から25合へ、そして24合へと確実に減らされていった。翌年2月になると、米は「大豆、粗悪な麺類、メリケン粉、パン、それに最悪の場合には煮ると黒いどろどろになって、最低の栄養分しかない薄く切って乾燥した薩摩薯」などの代用食に変わることが多かった。「我々は食糧のことしか考えなくなった。朝から晩まで骨を求める犬同然になった」。ごみ箱をあさり、羊歯、カタツムリそれに蛇まで食べるようになった。きのこを食べて、吐き気と下痢を催したこともあった。みんな骨と皮だけに痩せ細った。特高は食糧を握ることによって、完全にイタリア人たちを制圧したのだ。マライーニたちは「砂糖の箱、卵の籠、米の袋、味噌の包み、醤油の瓶が宿舎に到着するのを現認していたが、不思議なことにいつの間にかそれらは姿を消していた」。

特高たちはそれらを自分たちとその上官たちに横流ししていたのである。

特高にとってイタリア人たちは、軍事同盟を裏切った裏切り者、背徳者であり、嘘つきであった。「名古屋の全警察は我々の犠牲において商売をしていた。実は内務大臣は我々に気前よく食糧を配給していたのだ。一般の日本人は1日、2合3勺の米と他に時々都合による少量の食糧が配給されていたが、我々にはこの普通の配給量に加えて、卵、脂肪、肉、豆、パンなどが追加されていた。しかし名古屋の警察はイタリア人は敵であり、裏切り者であったから、生きていけるだけの食糧を与えれば十分であり、残りは自分たちのために使えばよい、と考えていた」。

サルバージュ作戦

イタリア人たちは、特高の管理する食糧庫に忍びこんで、少しずつ食糧を盗み出し始めた。これはサルバージュ作戦と名付けられた。「行動は子細の点にわたって検討された。私達は盗み出す量は最小限にとどめ、用心に用心を重ね、事前、事後の警察官の行動を不断に観察しなくてはならぬ、という結論に達した。私達は警官が後に逮捕しやすくするために、暫くは気がついていないような素振りを示す可能性がある、と考えた。最適の時間は夕刻、それに風が強い日がよく、新しい交替勤務が始まった直後でニュース放送が行われている時がよい、という結論になった」。ひそかに獲物を入れる小さな袋を作って、決行の時を待った。マライーニは見張りの役を引受けた。「私は棒と大きな空き缶を持ち、もし粕谷か他の警官が現れたら缶を落として音をたてて仲間に知らせ、私自身は机の下に飛び込んで、`鼠だ！、と叫んで警官の注意をひきつけ、できれば警官の足をつまづかせる」。実際警官たちは天白の鼠が多いのには困惑しきっていたのだ。このような計画の下に作戦は敢行されたが、しかし実際には盗んだ痕跡を残さないように、米と卵と砂糖の山に踏み込んで、とってきたものといえば僅かに2、3合の米に過ぎなかった。

野菜は野外の壁で囲まれた場所に貯蔵されていたが、ロック・クライミングにたけたマライーニにとって、壁を乗り越えることは容易だった。「この野菜は警察官の食糧だったから、私は仲間の食糧を盗んだわけではない。私は壁を登って倉庫の中に入り、人参

の山の上に落下した。それは私にとってダイヤ、ルビー、ウラニウムなど、この世で最高に貴重なものだった。私は子供たちのためにシャツのなかを人参で一杯にして、外に出た。そして星明かりの下で人参を噛った。土臭い匂いを残していたが、しかしなんと美味しい人参を噛りながら、私は神よ、許し給え、とつぶやいていた。「それ以来、収容生活が終わるまでこのサルバージュ作戦は私達の生活と思考のなかで大きな、そして重要な部分を占めることになった。そして多分そのおかげで私達は生き延びることができた。随分危ない橋を何度も渡ったが、幸運にも決して捕まることがなかったのは、マーキュリーか恵比寿様のような可愛い神様が私達を見守ってくれたからだろう」。

ハンガー・ストライキ

「逃走を企てることは、半マイル先からでも西洋人であることを判別できるこの国では、考えられないことだった。我々は生き埋めにされたも同然で、時々黒い絶望に捉えられてひそかに死への道に身を委ねる気持ちになった」、「2月中は私たちはみんな深刻な危機に陥っていたように思う。私たちはあまりに死の近くにいたので、唯一の選択は屈服と死か、そして生き残るチャンスがあるとみたときは、歯と爪をたてて闘うか、この2つの何れをとるかにあるように思われた」、「粕谷の監視の目を盗むことに慣れた私たちは、所かまわず横になって、呼吸を少なくしようとした。試みに脈拍を計った人は、1分間に50かそれ以下になっていることに気がついた。命は確実に衰弱し始めていた」、「誰もが極端なまでに余力を失っていた。反抗か死か、それ以外に選択の余地はない、と思われた」。

「7月に終わる梅雨の季節が過ぎてから、よくわからない事情で、それは多分もっと粗野な新任の警察部長が着任したことによるのであろうが、私たちの生活には新しい時期が到来していた。悲惨と栄養失調が頂点に達したところで、私たちはハンガー・ストライキに入ることに決めた。それは突然の決定だった。誰かが提案をして、たちどころに全員が賛成した」。

1944(昭和19)年7月18日、この日は偶然にも東条内閣の総辞職の日であったが、マライーニ

たちはハンガー・ストライキに入った。飢餓のなかから待遇改善を求め、あえて飢餓の道を選んで立ち上がった。自分たちのような悲惨な境遇にある者が存在することを少しでも人々に知らせる機会をつくること、それがハンガー・ストライキの目的だった。

朝、炊事場の煙突からは煙が出なかった。そのことに気がついてとんできた粕谷に対して、イタリア人たちは「あなたの親切な御配慮に感謝します。しかし私たちは今日は食事をとらないことに決めました。私たちは直接に警察部長にお会いして待遇が少しでも改善されるまでは、食事をとりません」と宣言した。「私たちのこの態度が彼らに深刻に受けとめられたことはすぐにわかった。私は粕谷が、よろしい、いまに後悔するぞと云ったとき、その薄い唇を巻くようにして、不吉な微笑を浮かべていたことを、今でも覚えている」。2時間もたたないうちに特高は応援の警察部隊を呼んで、鎮圧に乗り出した。野外に整列させられたイタリア人たちに向かって、特高は日本語の最大限の侮辱語を用いて乱暴な演説をした。何事によらずお前達が要求を出すなどという恥ずべきことは許されない。お前達は絶対になんの権利も持っていないのだ。生きていられるだけでも最大の恩恵だ。イタリア人は嘘つきで、裏切り者だ、と怒鳴った。

小指を切る

この次に起こった事態を、マライーニは妻トパーチャの日記を引用することで叙述している。「『これに対して』——以下は妻の日誌から引用であるが——『フォスコは台所の包丁を取り上げていきなり左手の小指を切り落とし、それを拾い上げて狼狽する粕谷の目前に突き出した。(註、実際は私は彼にそれを投げつけたのだが)そして『イタリア人、嘘つきではない、と叫んだ。一同に驚愕が走った。私は後ろから見ていたので、最初は何がおこったのかわからなかったのだが、すぐに粕谷の顔つきでわかった。子供たちはそれらを見て泣き叫び始めた。私はトニを抱いたまま走り出たが、すぐに気を失ってしまい、Bが2階に運びあげてくれた。彼らも私たちに魂があることを少しは思い知ったろう。警察官たちは衝撃を受けて青くなっていた』」。

「私はまた、粕谷の白い制服に血が飛び散った光景を今でもはっきりと心に描くことができる。その

光景は微細な点で、重要な魔術的意味を持っていた。私はこの行為によって、粕谷に対して浄化の必要があることを突き付け、起こった事態の全責任を粕谷に帰したのである。自分に対する暴力、自分の血を流すこと、そしてその究極の場合は自分の命を断つことだが、それは目上の者に自分の誠実を示すことであって、そのことに十分な説得力を持たせようとするならば、決闘の場合のように、一定の様式を踏むことが必要だ。幸いこのときは万事がうまく運んだのである」。

やがて態勢をたて直した特高は激しい尋問を行った。首謀者は誰か、ハンストの実行は7月7日のサイパン陥落、そしてひき続く東条内閣総辞職と関連があるのではないか、というのが特高の関心事であった。しかしイタリア人たちはそれらのことを全く知らなかった。首謀者はいなかった。それは「生き延びることを要求する飢えた人々の自然発生的な行動だった」。

マライーニは、切り落とされてアルコールの瓶に入れられた小指を机上において、特高と対決した。左手の痛みを耐えながら、マライーニは「諸君はこれをスキヤキにしたらいいだろう」といった。「不幸なことにこの一言が、当時連合国側の新聞が日本人は人肉を食ったとって非難していたことと重なってしまった。私のこの不幸な発言を聞くやいなや、安積(特高)は立ち上がって私の顔面を殴り、謝れ、と怒鳴った。私は大いに面白そうに装って笑っていたが、しかし笑っている私の頬にはやがて血と涙が流れていた。私は冗談だった、と言いつけた。彼は殴ることを止めなかったが私は彼に頭を下げようとは思わなかった。遂に彼は殴り疲れたか、或は私の冗談だったという言葉を受け入れたのか、再び椅子に戻った」。2人のイタリア人が連行されて拘禁され、やがて彼らが戻ってきたときは、正視できないほどに衰弱し切っていた。

このハンストに対する仕返しとして、食糧は一層少なくなった。妻トパーチャの記録によれば、朝は半斤(300グラム)のパンに一杯の味噌汁、昼は1合(180CC)にも満たない粉とたまねぎ数片、夕は半合の米と手のひらに乗る程度の野菜だった。禁止づくめの日課は以前と同様な厳しさで復活し、そして新聞、ラジオを問わず、外界との接触は厳しく禁止

された。しかし仕返しの時期を過ぎると、食事は少し改善された。子供たちには毎日牛乳が支給され、米は32合に増えた。「それが戦況の進行の不具合によるのか、あるいは私たちの`反乱、の成果であったのかはわからなかったが、私たちの地位が明らかに強化されてきたのは確かだった」。

空襲と地震

1944(昭和19)年12月になると、空襲が始まった。その度に子供と布団をかついで裏の防空壕に入り、ひたすら爆弾の落ちないことを祈った。そこにもってきて12月7日の東海大地震である。「大地は液体のように波動して、立っていることはできなかった」。ガラスは割れ、壁土は落ちた。この時の地震と津波で死者998名、家屋の全壊2万6000戸に達した。空襲は激しくなるばかりだった。1945(昭和20)年2月から4月にかけての空襲で、名古屋の街は焼失した。「米機はもはや高空を飛ぶ必要はなかった、日本軍の防空陣はすっかり弱化していたに違いないので、米機は3000フィートかそれ以下の高度で楽に侵入してきた。そして何波にもわたる襲撃は必ず焼夷弾の雨を降らせていった。焼夷弾はばちばちという鋭い音をたてて発火し、爆弾の破裂する重い轟音とは全く違っていった。やがて都市は炎上し、炎は天を衝いた。何エーカー、何マイル平方もの家々が、そして何百、何千トンもの材木が巨大なかがり火となって燃え上がり、火災は一晩中続いた。防空壕のなかでちごまっている私たちにとっては、夜はしゃくにさわる程に長かった。壕のなかの数分は数世紀にも思える長さで時間を刻んだ。余りに多くの飛行機が飛来するので、この世にはもう飛行機は残されていないと思うと、それからまたもっと多くの飛行機がやってきた。煙のたちこめる空に、より低空で飛来する飛行機は、炎上する街の火災で下から照されながら次々に近接してくるのだった。最後に恐怖の沈黙があって、やがて亡霊のような陽が昇り、明け方がやってきた。我々にとって最悪の空襲は、最後の機会の空襲だった。このときは三方が郊外住宅地で囲まれている天白も破壊された。最初の機は爆弾を落として南の方を破壊した。つぎの一波はもっと近くを爆撃し、我々の方にやってくるように思われた。私と妻は息を止め、子供たちを布団の下

に押し込んだまま、ほとんど窒息しそうだった。しかしこの一波は爆弾を落とさないまま飛び去った。破壊は丘の反対側で行われたようだった」。娘のダーチャは炎上する名古屋の街をみながら、「どうしてパパちゃん、どうして?」と問い続けた。

「名古屋は壊滅した。そして空襲はやんだ。家康の遺した著名な城も焼け落ちた」。マライー二たちには知らされていないが、すでにアメリカ軍が上陸したときは、すべての敵国人の被収容者は例外なく殺害すべしという命令が発せられていた。

広済寺の境内

4月になってから、マライー二たちは挙母の近くの曹洞宗の古い寺、広済寺に移された。ここでは様子は大分好転した。「広済寺は、私の人生で最も幸福な記憶の一つを遺している寺だ。それはここに来て事態が急に変化したというわけではなく、また天白の恐怖から地上の楽園に来た、というわけでもない。我々は依然として空腹と寒気と屈辱という災厄を免れなかったが、しかしここではなによりも事態は動いているように見えたばかりでなく、食糧の補給は容易だった、それにここは特別に美しい場所だったのだ」。由緒のある古い寺とその静かな境内、それを取り巻く美しい山と川、山村の村人たちとの交流、それに敗戦に向かって確実にこの国が動いていることが感得されたこと、それらがなによりの励ましとなった。

特高の上官粕谷は名古屋に転出し、その後にもっと粗野な後任者がやってきたが、この男は仕事熱心ではなく、昼間も居眠りしていたし、夜になると自分自身の楽しみを求めて村に出て行ってしまった。監視は緩やかになった。それは特高自身のなかで規律が壊れ始めていたことによる。村の農家を訪ねることもできた。「農民たちは警察の脅かしを恐がってはいたが、しかし我々には友好的で、喜んで取引に応じてくれた」。妻トパーチャは敷布からシャツを仕立てる仕事を請け負って、米、味噌、卵などを手に入れた。長女ダーチャは農家の人達に愛されて、蚕の世話を手伝って一杯の米を貰った。マライー二は夜明け前に山に入り、桑の木を掘り起こして現物賃金を得た。農民たちとの交際が始まったのだ。「日々に我々の身体は回復した。それは、より沢山食えることができた

からばかりでなく、我々が孤独から抜け出ることができたからだ。孤独こそは人間に恐ろしく悪い影響を与え、我々はながくそれに悩まされ続けてきたのだ」。

8月のこと

やがて8月がやってきた。戦争の終結が間近いことは容易に感得された。実は日本帝国が崩壊するときに、マライー二たちにどういう命運が待っているかは彼らの最大の関心事で、マライー二をふくむ何人かは、日本人たちは殺害を含む最悪の行動にでるだろう、と予測したが、仲間の一人、もと外交官の老人は、日本人は鳩のようにおとなしくなるだろうという見解だった。この意見の方が的中した。

15日、天皇はラジオで降伏を告げたが、奇妙なことに「我々の周囲の日本人は誰一人としてそれを理解できなかった。演説は普通の言葉と違って沢山の宮廷用語を用いたので、その意味を理解するには言語学者にでもなることが必要だった」。寺の住職一家は赤飯を炊いてイタリア人達の解放を祝福した。

8月26日、連合軍の飛行機が寺の上空を飛び、沢山の日用品を投下した。「樹々には急に熱帯植物の果実がついたように、無数の靴がぶらさがり、千上った小川の岩床にはあらゆる種類の煙草の包みが散らばった」、「樹々の茂みのなかに時ならぬスーパーマーケット一店分の商品がまき散らされたようなものだった」。「子供たちは喜んで跳びまわり、チョコレートを手にして、この黒いものはなかに、食べられるの、と聞く。彼女たちはチョコレートを見たことがなかったのである」。この天から降ってきた日用品について、村人たちのとった態度は立派なものだった。彼らは欲しいものについて、米などの食糧との交換を申し出た。ひどかったのは警官だった。暫く姿を見せなかった藤田という特高がやってきて、おそろおそろ靴とジャケットと煙草をくれないか、とやってきた。マライー二は持っていけ、しかし二度と私の前に現れるな、と答えた。S・スピルバーグ監督の映画『太陽の帝国』には、日本の敗戦直後に、中国・上海の郊外にあった英米人の収容所に、米軍機が食料品などをパラシュートにつけて投下する場面が描かれているが、同じ光景が愛知県下の山村の一隅に現出したのである。

8月末に、マライー二たちは愛知県警察の差し向けたトラックに乗って懐かしいこの寺を後にした。

当時、広済寺の所在は愛知県西加茂郡石野村といったが、いまは豊田市の東北端に近い東広瀬町大根坂という。名鉄三河線の終点西中金に近い、水量豊かな矢作川の東側につらなる小高い丘陵の斜面にある。マライー二のいた頃は、この寺の本堂は「大きな不規則な茅葺屋根と、どっしりした木の壁で囲まれた、苔の生えた古い簡素な建物」で、「木々や穀物のように大地から生まれたものに特有の美しさ」を備えていたが、いまは瓦葺ですっかり建て替えられている。それでも14世紀、後醍醐天皇の時代に創建されたというこの古刹の山門はいまも静かなたたずまいを見せている。1988年4月、私をこの寺につれていってくれたタクシーの初老の運転手は、小学校の時に遠足に広済寺にきて、そこで初めて「異人さん」たちを見たときの驚きを語ってくれた。なお広済寺の西隣、東広瀬町にあるもう一つの寺、広沢寺に20人のオランダ人が収容されていたことも記録しておくべきであろう。

故国に帰る

マライー二は米軍の飛行機が広済寺の裏山に落ちてくれた軍服、靴、靴下、シャツなどを身につけて、家族とともに上京した。急に帰国できる情勢でもなかったもので、進駐軍に日本語の通訳として勤務し、進駐軍に求職する日本人労務者の通訳として働いた。翌年の1月、マライー二の勤務する東京・丸ノ内の赤煉瓦の事務所に、釈放されていた宮沢弘幸が訪ねてきた。2人は相擁して、落涙した。そのときのことはすでに記述した。

マライー二は1946年2月、イタリアに帰国した。彼が天白で飢餓に苦しんでいた頃、フィレンツェではその母が亡くなっていた。それは彼が切り落とした指の治療のために、医者に連れていかれた帰りのことだったが、なぜか突然母の呼ぶ声が聞こえた気がして思わず落涙したことがある。そのとき遠く離れたイタリアで母が死んだことを、マライー二はのちに知った。

帰国後のマライー二は、再度チベットの探検に加わり(48年)、カラコルムの高峯に登山して(58年)、同じく登頂した京都大学登山隊の桑原武大隊長

らとバルトロ氷河で交歓した(朝日新聞、88年4月15日夕刊)。オックスフォードで人類学の研究に従事し(59年~64年)、その間、53年~54年、66年~68年、70年(万国博イタリア館次長)に日本に滞在して日本研究にあたり、通算して十数年の在日歴を重ねた。72年フィレンツェ大学教育学部に日本語・日本文学科を創設する仕事に加ってその教授となり、いまは名誉教授である。72年にはイタリア日本研究協会を組織し83年にはその初代会長となった。82年、日本政府から勲三等旭日中綬賞、86年、国際文化交流基金から国際文化交流基金賞を受賞し、88年には京都の国際日本文化研究センターの客員教授として来日した。この間、アイヌ研究、チベット研究、日本研究、登山その他について多数の著書、論文を発表した。また写真家としても高名である。

マラーニは、彫刻家であった父アントニオが1926年に買入れた旧メジチ家のもと農園のなかの、管理人の家を改造したという家に住んでいる。広大な庭園をのぞむ書庫には蔵書1万冊を越え、その7割以上は日本関係の書籍という。そして天白寮の2階の窓から炎上する「名古屋の赤い空」を見て、「どうしてパパちゃん、どうして?」と問い続けた長女ダーチャは作家、劇作家として、札幌生まれの縁でユキと名づけられた次女は歌手、音楽教師として、そして3女トニは民芸研究者として活躍している。

「勇者として」

軍機保護法の刃に倒れ、歴史の闇のなかに葬り去られていた「ある北大生の受難」を戦後はやく世に伝えたのは、マラーニであった。彼の1957年の著作『オレ ジャポネジ』(イタリア語)の英語訳『ミーティング ウィズ ジャパン』だけでも10万部に達したといわれ、そのほか6カ国語に翻訳されてひろく世界に読者を得ていた。

そして86年10月、国際交流基金賞受賞のために来日したマラーニは、アメリカからやってきた宮沢弘幸の妹、秋間美江子に会って弘幸の無実を語り(朝日新聞10月12日付、21日付)、87年7月9日、札幌弁護士会主催の国家秘密法に反対する市民集会「宮沢事件の真実」には、情理を兼ね備えた長文のメッセージ「宮沢弘幸の思い出」を寄せた。

(同会編、昭和62年10月刊、同集会の『記録集』)
この文章は集会の席上で朗読され、聴衆に深い感銘を与えた。彼は札幌で過ごした日々を次のように回想していた。

「私は、宮沢弘幸の事件が日本で再び社会の関心と呼んでいることを知り、大変嬉しく思います。私が札幌で弘幸と初めて会ったのは、1939年でした。当時彼は北大予科の学生で、私は児玉作左衛門教授のもとで研究中の若い学徒で、アイヌに関する論文を準備していました。弘幸も私も登山が非常に好きでした。やがて私たちは心からの友人になりました。私たちはよく冬山に登りました。十勝岳、芦別岳その他数多くの雪を頂いた北海道の山々です。1940年、私たちは雪でイグルーを作り、冬の登山用具を少なくする実験をしました。最初のイグルーは、札幌近郊の手稲山で作りました。実験は大成功でした。手稲山は、いまではロープ・ウェイで簡単に登れますが、当時は寂しい未開の山で、軽川という鉄道の駅から登るのに3時間もかかりました。

弘幸は単に山登りの良きパートナーであるだけでなく、大変聡明で博学な青年でした。その彼と、彼が関心を持っていた歴史、哲学、宗教といった諸々の事柄について語り合うことは、私の楽しみでした。彼は西洋文明の重要性を十分に認識する傍ら、また常に和魂洋才の精神の持ち主でした。

弘幸は新しい言語を学ぶことで、その知識を広げようとしていました。英語はとても堪能でした。新たにドイツ語をヘルマン・ヘッカー教授から、フランス語をマチルド・太黒夫人から、イタリア語を私から習い始めていました。私は、彼がさらにギリシア語とラテン語の文法の本を読んでいたのを知っています。弘幸はレーン夫妻について英語の勉強を続けておりました。ハロルド・レーンとポーリン・レーンはともに北大予科の教官で、日本で長く生活しており、日本人の誠実な友人とでもいべき人でした。

1941年に私は北海道を去り、京都に移りました。そこで12月8日、真珠湾攻撃の日を迎えました。後に私はレーン夫妻が敵国人として数々の酷い仕打ちを受けた挙げ句、アメリカへの最後の船で送還されたことを知りました。また私はすぐに弘幸がスパイの容疑で警察に逮捕されたことを知りました。私は怒りが沸きあがるのを覚えました。私は弘幸の

逮捕が卑劣なフレーム・アップであると確信していたからです。弘幸は確かに西洋文明に大きな関心を寄せ、外国人からあらゆることを学ぼうとして頻繁に外国人と接触していましたが、しかしその心中は熱烈な愛国主義者であったのです。私のみるところでは、彼の愛国主義は性急なものであったことも再三だったと思います。私たちは、しばしば中国に対する日本の干渉の正当性をめぐって激しく議論したことがあります。私は、しばしば弘幸を吉田松陰のように思っていました。というのは、2人とも熱烈な愛国者であり、同時に2人とも西洋からできるだけ多くのことを学ぼうとしていたからです。そして、いま付け加えれば、2人とも日本の官憲の近視眼的な愚行によって、命まで奪われてしまったからです。

弘幸は決してスパイではなかったのです。私は、弘幸のレーン夫妻に対する友情は純粋なものだったと確信しています。私は彼の優れて独立心の強い性格が、自分の立場を危うくしたのではないかと、思います。おそらく彼は、官憲と向かい合っている際に求められる控え目で従順な態度を拒否し、尋問に対しては真正面から面をあげて答えたに違いありません。

このあとマラーニは弘幸の母が京都を訪ねてきたこと、マラーニ自身が抑留されたこと、弘幸が戦後に米軍に勤務していたマラーニを訪ねてきたことを叙述して、さらに次のよう書いていた。「この時期、弘幸と私はしばしば会いました。しかし、私は、私の友人が長く辛かった体験を語ろうとしないことに気がつきました。おそらく彼はそれを忘れようとしていたのです。

1946年2月、私は家族とともに日本を去り、イタリアに帰国しました。それから間もなく、私は弘幸が死んだことを聞きました。

日本人にとって、弘幸の悲しい運命を忘れないことは、とても大切なことだと思います。彼が全く無罪であることは一点の疑いもありません。彼は裏切者ではなく、勇者として記憶されるべきなのです。吉田松陰のように」。

私は、ほゞ50年前の北大時代の友情と信義に基づいて、友の無実を証言するイタリアの老碩学の言葉に、戦火と国境と生死を越え、半世紀の風雪に耐えて固く結ばれ続けてきた人間の絆の豊饒と強靱とを見る思いがする。



マラーニ夫妻（前列中央）と、宮沢一家。とく（前列左端）雄也（右から二人目）美江子（後列左端）弘幸（三人目）晃（右端）＝東京・雅叙園にて1940年夏（秋間美江子提供）

ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち

青月社／2014年9月・刊から



生年 ▶ 1936年生まれ

出身地 ▶ イタリア、フィエーゾレ

活動拠点 ▶ イタリア、ローマ

作品の特徴 ▶ 1970年代よりイタリアのフェミニズム運動を牽引した作家として、フィクション、ノンフィクション(自伝含む)を問わず様々な女性の物語を扱う。

<日本語で読める作品リスト>

『不安の季節』青木B出夫訳(角川書店)

『バカンス』大久保昭男訳(角川文庫)

『メアリー・ステュアート』望月紀子訳(劇書房)

『シチーリアの雅歌』望月紀子訳(品文社)

『帰郷シチーリアへ』望月紀子訳(晶文社)

『声』大久保昭男訳(中央公論社)

『イゾリーナ～切り刻まれた少女～』

望月紀子訳(晶文社)

『別れてきた恋人への手紙』望月紀子訳(晶文社)

『おなかの中の密航者』草皆仲子訳(立風書房)

『思い出はそれだけで愛おしい』

中山悦子訳(中央公論新社)

日本育ちのフェミニスト

ダーチャ・マライーニは、まず日本語を話した。フィレンツェ近郊に生まれ、幼少期の7年間を日本で過ごした彼女は、家ではイタリア語、近所の子供たちとは日本語という環境で、「イタリア語よりも日本語を話すほうが楽だった」という。登山家としても有名な文化人類学者の父フォスコ・マライーニは、戦前に日本の外務省の奨学金を得て、北海道でアイヌ研究に携わっていた。その後同盟を記念して京都大学に開設されたイタリア語学文学講座の外国人教師となり京都に移るが、イタリア降伏の際に、もともと生理的ともいえる嫌悪感からファシスト党员証をもつことなく、故国から遠ざかる選択をしていたフォスコは、当然ムッソリーニ＝ナチ派を支持せず、「敵国人」として名古屋市天白の収容所送りになった。解放までの2年弱は、ダーチャを筆頭とする幼い三姉妹にとってはひたすらひどい日々であった。にもかかわらず、最近でも2014年に来日しているように、ダーチャが日本嫌いにならなかったのは、後年ヒロシマを語る平和活動に身を投じることになる森岡まさ子のような人が乳母であったからでもあろう。日本の思い出は、自伝的小説『帰郷シチーリアへ』(1993年)、あるいは『神戸への船』(2001年、未訳)などで語られている。

戦後の帰国と生活再建は容易ではなかった。特に両親の別居から、父への愛憎こもった感情がうずき始める。文筆活動はまさしく生きるためでもあったが、25歳で発表した処女小説『バカンス』(1962年)へとつながった。

1960年代には、雑誌『新しき論題』にて批評精神を磨き、1968年のうねりのなか、湧き上がるフ

エミニズム運動に身を投じる。実験演劇にうったえて時事問題に切り込んでいく姿は、生来のリーダーのそれであった。行動する知識人として（それから「ご意見番」として）、中絶やレイプ、女性監獄での人権無視といった問題をめぐって、因習的な社会の闇に覆われてきた「弱者」と関わり続ける。1973年には、女性のみで運営する劇団マッダレーナを創設し、自作発表の場とする。女性同士の対話劇『メアリー・ステュアート』（1975年、原題はイタリア語名『マリア・ストゥアルダ』となる）は日本でも人気が高く、宮本亜門演出版は20年以上再演されてきた。

自身の道のりや、過ぎ去った時代を反芻し、再考するプロセスを経て1980年代から1990年代にかけて最良の作品を生んでいく。抵抗の世代についての『ヘルシンキへの旅』（1984年、未訳）、シチリアで過ごした若年期についての『帰郷シチリアへ』などである。後者は、代表作となった歴史小説『シチリアの雅歌』（1990年）にあわせて書かれた。70歳をこえても現役を貫き、親しかった人々を回想する『饗宴』（2011年）や、評伝『アッシジのキアラ―不従礼賛』（2013年）といった作品を発表し続けている（共に未訳）。ストーリーテラーとしての腕は映画にも活かされる。マライーニの小説が映画化された例には、モニカ・ヴィッティ主演のコメディ『女すり 嘆きのテレサ』（1973年）や、『声』（2001年、日本未公開）などがある。そればかりか、中長期の旅によく一緒に出掛けた詩人パゾリーニ（彼女のパートナーであるモラヴィアの親友）の要請で、彼の映画『アラビアン・ナイト』（1974年）の脚色を共同担当する。この同性愛者とフェミニストのコンビにより、エロティックなだけでなく、人生の愉楽に満ちた純粹無垢でユートピア的なラブ・ストーリーが生まれた。イタリア映画の奇才マルコ・フェッラーリ監督とのコラボレーション、『ピエラ愛の遍歴』（1983年）と『未来は女のものである』（1984年）も忘れられまい。

次に、マライーニに関連して、これまでノーベル賞候補となったイタリアの文人たちについてまとめてみたい。ロンドンのブックメーカーによってマライーニの名が挙げられるのは、イタリアの読者にとっ

ては意外であろう。確かにイタリアは、演劇人ダリオ・フォーが1997年に受賞して以来、そろそろ番がまわってきてもいいという声もある。しかし2012年2月に小説家アントニオ・タブッキが68歳で亡くなってしまったからは、国際的な名声を誇る目ぼしい人がいない。それでも、タブッキと並んで下馬評が高かったクラウディオ・マグリス（1929年生）は、現在もなお候補に挙げられてもよいだろう。東の国境の町トリエステ出身のマグリスには、中央ヨーロッパの文学と歴史をテーマにした『ドナウ ある川の伝記』（1986年）という無数の断章からなる作品がある。

可能性ある名前が他にあまりない現在、確かにマライーニを考えてみてもいい。しかし彼女を推すとすると、年齢の問題ではなく（彼女はまだ若い）、時代が一つ戻る印象を与える。ただジェンダー的観点からは、現在もなお意味をもつかもされない。またマライーニ以外で推挙されるイタリア人は、ベストセラー連発の国民的作家アンドレア・カミッレリ（なんと1925年生）であったり、はたまたルポルタージュ小説『死都ゴモラ』で一躍有名になったロベルト・サヴィアーノ（こちらもなんと1979年生）であったりするので、相対的にマライーニはまともに映る。もっとも、サヴィアーノの場合は、ナポリの組織犯罪カモッラから死刑宣告が出ていて、平和賞のニュアンスも加味される。繰り返しになるが、マライーニ受賞となれば、イタリアの多くの読者は、もちろん否定的には受け取らないが、エキサイトもしないであろう。「外国の評判はそんなもの」、うれしい勘違いとクールに受けとめるかもしれない。

ついでに、ノーベル文学賞を介してイタリアと日本が微妙に絡み合うエピソードを紹介したい。1959年のノーベル文学賞は、シチリア島出身の詩人サルヴァトーレ・クワジーモドに授与された。実際のところ、「他にもいい詩人はいるのに」という評がイタリアになくもなかった。なにせ代表作といえるのは、『古代ギリシャの叙情詩人たち』というシンプルなタイトルの、彼の手による翻訳アンソロジーである（若きダーチャの愛読書、彼女は詩も書いた）。おもしろくなかったのは彼より一つ上の世代に属する

詩人ジュゼッペ・ウンガレッティである。20世紀詩壇の重鎮である彼は、あまりのいたたまれなさから、授賞式が行われる時期にイタリアを後にして日本に来てしまった。個展のために来日する友人の画家ジャン・フォートリエの誘いに乗ったかたちだが、大物の来日に新聞各紙がインタビューにおしかけている。自然な流れでクワジエモード受賞のニュースについての感想を尋ねられたウンガレッティは、朝日新聞の記者に対して、あからさまに不機嫌になって、「イタリアの文学界では、こんどのノーベル賞をだれも満足していない」と言い切ってしまう。逆にオープンになり、若きイタリア文学者である奥野拓哉には、日本の短歌と自分の詩の近似性、そして自己への影響を認めるような発言もしている。

とはいえクワジエモードは、現在でも、高校生必修の全国統一卒業試験の「テキスト分析」の試験に出題されるくらいの存在感は保っている。このように扱われるのはまさにノーベル賞のおかげである。

一方、1960年代の前後に小説家として有力であつたのはアルベルト・モラヴィア(1990年没)である。最近公になった資料により、「のぞき見」作家との偏見からノーベル文学賞の選からもれていたことがわかった。モラヴィアとは1962年の邂逅に続いて懇意となり、処女小説を発表したばかりの

マライーニは急速な成長を遂げていく。そこにいたるまでに彼女は生涯で一度の結婚をし、のちにたびたび作品で描くことになる流産を経験していた。

無念は晴らされることなく、詩人ウンガレッティは1970年に亡くなった。彼だけのものではなかったリベンジへの思いが叶い、1975年には詩人エウジェニオ・モンターレが受賞し、誰もが納得する結果を残した。それから32年後のフォーの受賞時にまた論争が起きる。フォーの政治性、見定め難い文名は議論的となりうる。しかしそれよりも、あくまでも自分で演じるために書く姿勢や、時事問題に反応しつつ即興的に変化し続ける作品群は、確かに歴代受賞者のケースに比べて異質であることを指摘すべきであろう。演劇人がノーベル賞をとるのがめずらしくないイタリアでは、ナポリの喜劇作家エドゥアルド・デ・フィリッポ(1984年没)もかつて有力視されていた。

「世界で最も翻訳されている女性作家」マライーニは、はたしてノーベル文学賞を獲得できるだろうか。実際の賞の行方をあてるのはなかなか難しい(だから本命・村上春樹が勝つとは限らない)。マライーニが受賞すれば、イタリアにとってはよくもわるくもサプライズとなろう。(土肥秀行)

フォスコ・マライーニ (Fosco Maraini) 紹介

「北海道大学山岳部・山の会」ホームページの「山岳部蔵書ガイド」に、『番外 フォスコ・マライーニ (Fosco Maraini) 人物伝』が掲載されています。転載許可をいただいて掲載します。

<https://aach.ees.hokudai.ac.jp/xc/modules/Center/Review/trance2/Maraini.html>

『番外 フォスコ・マライーニ (Fosco Maraini) 人物伝』

フォスコ・マライーニ (1912-2004) 文化人類学者、写真家、探検家、登山家

1912年11月15日、彫刻家の父アントニオ・マライーニ、小説家の母ヨイ・パブロフスカの長男としてフィレンツェに生れる。フィレンツェ大学で自然科学を専攻。1935年、シチリア貴族の血を引くトパーツィア・アツリアータと結婚。

1937年、著名な東洋学者ジョゼッペ・トゥッチ教授のチベット学術探検隊に写真家として参加。写真集「LONTANO TIBET」(邦訳「チベット」)、「Dren Giong」(邦訳「ヒマラヤの真珠」)を出版。マライーニはイタリアの山岳界では名を知られた一流の登山家で、学生時代からイタリア・アルプスの峰々を歩き回り、ドロミティのいくつかで初登頂の記録を持っていた。スキーの腕前は素人の域を脱しており、札幌にも自前のスキーをイタリアから持ち込んでいた。

1938(昭和13)年12月15日、日伊交換留学生として日本の国際学友会の外国人研究者奨学金を取得し、トパーツィア夫人、1歳半の娘ダーチャを伴い来札。北大医学部解剖学教室の児玉作左衛門教授の下で、無給助手の身分でアイヌ民族の人種的起源についての研究を行った。

北大構内の外国人教師用宿舎へ入り、英語講師レーン夫婦、ドイツ語ヘッカー講師らと親交を結ぶ。レーンの紹介で宮沢弘幸、武田弘道、松本照夫らスキーと登山が好きな学生達と冬山登山、スキーツアーに盛んに出かけた。特に宮沢とは登山や小旅行で行動を共にする機会が増えていき、その度に2人の友情は深まっていった。

1939(昭和14)年初夏、学生の発案で発足した外国人講師と学生の親睦集会「心の会」(心のふれあい

の会)が、外国人家庭を持ち回りの会場として始まった。国全体がますます軍国主義に傾斜し、若者に閉塞感が漂い始めていた時代、外国人との交流、自由な発想と発言のできる場合は、学生達にとって自由な空気を呼吸できる、世界に向って開かれた小さな窓であった。のち、この集會を特高が目をつけるところとなり、後に述べる宮沢とレーン夫婦の逮捕へとつながる。

1940(昭和15)年1月5日、北大山岳部ペテガリ隊10名の内8名が、コイカクシュ札内沢で雪崩により遭難死した。マライーニも当初よりこの隊に参加する予定であったが、娘ダーチャの発熱の為、本隊より3日遅れて出発、隊員が誰もいないBCで3晩を過ごし、連絡が取れないまま下山を開始した。下山途中で遭難の知らせを受けて現地へ向う坂本直行ら捜索隊と遭遇、遭難を初めて知った。

マライーニはこの遭難事故から稜線への重い幕営装備荷上げの不利を覚り、イタリアの山岳雑誌に掲載されていたイグルーの試作を思い立ち、宮沢と手稲山に登り実験、問題なく作成できることを確認した。この結果に自信を持ち、同年3月、宮沢と旭川の八島定則の3人で十勝岳から大雪山への縦走をイグルーを使って敢行する。マライーニのイグルーはしっかりと山岳部員に引き継がれ、昭和18年1月5日、今村昌耕らはコイカクシュサツナイ岳頂上に建設したイグルーから、山岳部宿願のペテガリ岳厳冬期初登頂を果たした。

アイヌ研究ではしばしば二風谷を訪れ、そこで知合った医師ゴードン・マンローと宣教師ジョン・バチエラーのアイヌ救済、殉教的な生き方に強く惹かれ

た。1942（昭和17）年、マンローの臨終には、この時期外国人が遠距離の旅行をするのは至難の業であったが、京都警察の上層部に必死に嘆願し、旅行許可を得て二風谷まで駆けつけ、チヨ夫人と2人で最後を看取った。アイヌ研究の成果は、1942年イタリア大使館から「GLI IKU-BASHUI DEGLI AINU」（アイヌの髭揚篋）として刊行された。

1940（昭和15）年6月、イタリアの欧州大戦参戦により、奨学金が切れたあとの戦火のイタリア帰国が困難になり、京都大学に開設されたイタリア語科に講師として採用され、1941（昭和16）年3月末、トパーツィア、ダーチャ、札幌で生れた二女ユキを連れて京都へ移った。2年3ヶ月半の札幌滞在であった。

1941（昭和16）年12月8日、太平洋戦争開戦と同時に、レーン夫婦と宮沢弘幸がスパイ容疑で特高に逮捕された。宮沢は若者らしい興味から、また自身の見聞を広める為に日本各地、千島、満州などを頻りに旅行していたが、旅行中に得た軍事機密をレーン夫婦に提供していたという容疑であった。特高による全くのでっち上げであったが、翌年12月、レーン夫婦に懲役12年、宮沢に15年の有罪判決が確定する。懲役12年の刑で刑務所生活を送っていたレーン夫婦は昭和19年、交換船でアメリカへ帰国する。事実無根のスパイの罪を着せられ、日本の官憲に非道な虐待を受けたが、戦後昭和26年、北大からの求めに応じて、再び北大で教鞭をとることになり、昭和38年まで教壇に英会話教師として立ち、同年に死亡。札幌市営円山墓地に子供・妻と共に眠る。

1943（昭和18）年9月8日のイタリアの無条件降伏以来、特高はマライーニ一家を京都飛鳥井町の自宅に軟禁し、外部との一切の交信を禁止する。10月13日、ムッソリーニに代わったバドリオ政権のイタリアがドイツに宣戦を布告、敵国人となったマライーニは夫人、3人の娘（ダーチャ、ユキ、京都で生れたトニ）と共に名古屋市郊外天白にあった松坂屋の保養施設天白寮に、各地から送られてきた16名のイタリア人と共に捕虜として強制収容された。これから1年半、マライーニ一家は幼子を抱え、飢えと寒さとの壮絶な戦いを強いられる事になった。日本政府から捕虜への配給食糧を警官が横流し、そのため

1日僅か800カロリー分の食料しか与えられなかった。警官の不当で過酷な捕虜取扱いに抗議し、マライーニはついに、警官達の目の前で自分の左手の小指をマキ割り用の斧で切り落とした。この事件後、警官たちは食料の横流しをやめ、待遇は少しずつ改善されていった。マライーニの必死の抗議が勝利を勝ち取ったのである。

1945（昭和20）年5月中旬、名古屋へのB29による空襲が激化する中、イタリア人たちは天白寮から豊田市東広瀬にある広済寺へ移された。監視は以前より緩和され、住環境などもある程度改善したものの、食料不足は相変わらず深刻で、蛇、蛙、野草を取って飢えを凌いだ。終戦翌月の9月、ようやくイタリア人たちは解放され、愛知県が用意した名古屋市内の宿舎に落ち着いた。2年に及ぶ非人道的で過酷な収容生活であった。

英語、日本語に流暢なマライーニは、釈放後、丸の内の占領軍事務所（GHQ）の要請で、日本人採用の面接係として働いていた。イタリア帰国の船が手配されるまで、何もしないで居られるほどの経済的余裕はなかったのである。

1946（昭和21）年1月、この事務所を宮沢弘幸が訪ねてきた。宮沢は昭和20年10月10日に宮城刑務所から釈放され、東京の両親の下で静養していたのである。4年間、日本の警察に非道な虐待を受け、心身ともに破壊されてまるで老人のような26歳の宮沢にマライーニは驚き、ショックを受ける。1947（昭和22）年2月22日、宮沢は刑務所生活で罹った結核の為に死去する。盲目的で残酷な日本の軍国主義の犠牲となったのである。

1946（昭和21）年2月中旬、マライーニ一家はイタリアに帰国する。来日以来7年2ヶ月ぶりであった。帰国後、東洋各地を精力的に歩き回り、1948（昭和23）年にはジュゼッペ・トゥッチ教授の率いる第2回チベット遠征隊に加わり、2度目のチベット入りを果たす。帰国後、その経験を「Segreto Tibet」（邦訳：「チベット—そこに秘められたもの」）にまとめ、1951年出版した。

1953（昭和28）年、マライーニは苦難の経験をし、

愛憎交々の感情の染み付いた国・日本に取材の為に 8 年ぶりに帰って来た。マライーニはある種の日本人を憎んだのは確かであったが、それが日本人全体に対する偏見につながらなかった。それはレーン夫婦と共通する感情であったろう。マライーニ自身の言葉を借りれば、捕虜経験のおかげで、彼の日本に対する親愛の念は「戦前よりも成熟し、深まっていた」のである。(石戸谷滋「フォスコの愛した日本」)

来日の目的はイタリアのある放送局がスポンサーの、日本についての文化映画作成であった。長期間にわたり京都、アイヌ、東京、舩倉島などを取材した。舩倉島での取材からは 1961 年、「L' isola delle Pescatrici」(邦訳「海女の島」)を出版した。

帰国後、3 年を費やして長年の日本文化研究、撮り溜めた選りすぐりの写真、そして長年の日本での経験を材料に「ORE GIAPPONESI」を 1956 年、マライーニ 42 歳の時に出版、各国語に翻訳され大きな反響を呼んだ(邦訳「随筆日本」は 2009 年発行)。

1955 年、戦中、戦後の苦楽を共にしたトパーティアと離婚。

1958 年 2 月、マライーニはイタリア山岳会のジョバンニ・モリーニ会長から、この年のガッシャーブルム? 峯(8068m)を目指す遠征隊への参加を要請されて快諾、直ちに登山許可を得るためパキスタンへ向った。希望していたガッシャーブルム IV 峯は、既にアメリカ隊が許可を取得していた。次に前年ヘルマン・ブールが遭難死したチョゴリザ(7654m)を申請するが、これも桑原武夫を隊長とする京大学士山岳会が既に許可を取得していた。パキスタン政府は、代わりにガッシャーブルム IV(7980m)を許可した。これを受けイタリア山岳会は、リッカルド・カッシン隊長以下マライーニを含む 8 名の隊員を送り、チョゴリザ初登頂の 2 日後の 1958 年 8 月 6 日、ワルテル・ボナッティとカルロ・マウリが辛苦の末に頂上に立った。チョゴリザ隊は、登攀活動の途中で前年遭難したヘルマン・ブールのテントを発見、遺品を回収し、チョゴリザ隊の BC を訪問したマライーニらイタリア隊にヘルマン・ブール夫人に引き渡すべく託した。

マライーニは翌 1959 年、イタリア隊の公式記録「G4-Karakorum」(邦訳:「ガッシャーブルム IV」)を



写真: チョゴリザ BC の日伊登山隊、後列右から 3 人目桑原隊長、前列左から 2 人目マライーニ。
提供: チョゴリザ隊隊員 芳賀孝郎氏

発表、従来の登山紀行のマンネリズムを打破した世界を創出したとして評者の絶賛を浴びた。日本語版は、2 段組み 370 頁の本文と 80 ページの綴じ込み写真からなる分厚い本である。

引き続いて 1959 年、東ヒンズークシュ・サラグラール峯(7350m)にイタリア山岳会の登山隊を率いて初登頂を果たした。

1959 年から 64 年にかけて、オックスフォード大学セント・アンソニー・カレッジにフェロー(特別研究員)として招かれて滞在。

1968 年には並木見江子と再婚、1970 年には大阪万博イタリア館副館長、1972 年の札幌オリンピックにはイタリアチームの選手役員として来札するなど、終始日本との関係を持ち続けた。札幌オリンピックでの来日を機に日本をより広く世界に知らしめようと、日本文化、日本人、歴史を紹介した「JAPAN - Patterns of Continuity -」(邦訳なし)を講談社インターナショナルから発行した。

1972 年、新設されたフィレンツェ大学日本語・日本文学科に教授として招かれ、1983 年まで 11 年間勤めた。この間、1973 年に伊日研究学会を設立、会長に就任、その後名誉会長となった。フィレンツェ大学退官後は、生来の放浪癖を蘇らせ、東洋の国々を精力的に歩き回った。

1987~88 年、国際日本文化研究センター客員教授。2004 年 6 月 7 日、フィレンツェで 91 歳の生涯を閉じた。この世を去るに際し、神の啓示は特定の宗教

のみに現れるものではなく、地球上のあらゆる事象から得られるものであると説く「最後の言葉」を“親しき友人諸氏”に残し、葬儀は無宗教で行なわれた。フィレンツェのストロツツィ宮殿内、ヴィエッセウ図書館にはマライーニの希望によりその生涯をかけた東洋書籍コレクション 8000 冊と自作の写真 7000 点が収蔵されている。

長女ダーチャ・マライーニは現代イタリア文学を代表する作家。

1982 年、勲三等旭日中綬章

1986 年、国際交流基金賞

日本山岳会名誉会員

著書（邦訳のあるもの、*印は山岳館所有）

*チベット（Lontano Tibet） 塩見高年訳 春鳥社 1942

*ヒマラヤの真珠 牧野文子訳 精華房 1943

*チベット—そこに秘められたもの 牧野文子訳 理論社 1958

*ガッシャーブルムIV—カラコルムの峻峯登頂記録 牧野文子訳 理論社 1962

*海女の島—舳倉島 牧野文子訳 未来社 1964

*アイヌのイクパスイ ロレーナ・スタンダールディ訳 アイヌ民族博物館 1994

*随筆日本 岡田温史監訳 松籟社 2009

上記以外の参考文献

・北海道および大雪山の印象（北大山岳部部報 7 号） フォスコ・マライーニ 1928

・フォスコ・マライーニ氏とペテガリ遭難の秘話—其の時代（北大山の会会報 100 号）今村昌耕 2007

・ペテガリの思い出（北大山の会編「日高山脈」付録） フォスコ・マライーニ 1971

・イグルー普及と実践的登山（山の仲間と五十年（秀岳荘） 高澤光雄 2005

・フォスコの愛した日本—受難の中で結ぶ友情 石戸谷滋 風媒社 1989

・チョゴリザ登頂 桑原武夫 文芸春秋社 1959

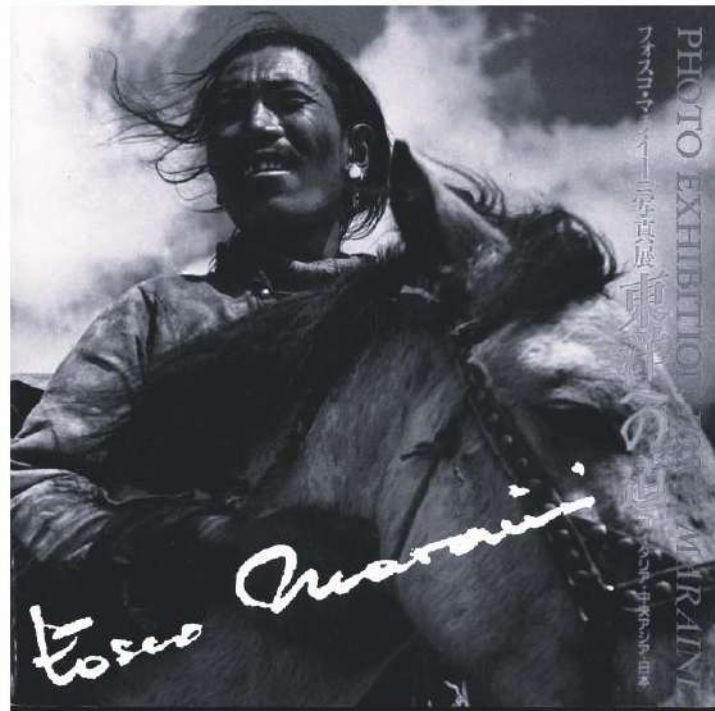
・武田弘道追悼集 会議は踊る—ただ一度の 武田ひろ子編 ミネルヴァ書房 1985

・ある北大生の受難 上田誠吉 朝日新聞社 1987

・フォスコ・マライーニの死にちなんで（aack ニュースレター 32 号） 谷泰 2004/9

フォスコ・マライーニ写真展

東洋への道



北海道立文学館
2003年 4月29日(火)～6月1日

ごあいさつ

マライーニ先生は、イタリアの日本学の草分けの学者である。先生は国際学友会の奨学金で戦争中に日本へ来て以来、日本が好きになり、日本に対するさまざまな研究をされた。特に先生はアイヌの文化に興味を持ち、アイヌ文化に関する興味深い本を書かれた。長い間イタリアの日本学会の会員をしておられ、私どもの国際日本文化研究センターが出来たとき、最初の外国人客員教授として約1年間87年11月から88年6月まで日本に滞在された。

マライーニ先生は学者としても有名であり、またその写真は素晴らしい。先生はあの美しい町フィレンツェにお住いになり、お父さんは有名な彫刻家であった。また、先生の娘さんは有名な作家であり、マライーニ先生には芸術家の血が多分に流れている。それで学者といってもかちかちの学者ではなくて、先生の学問は、広い東西の教養を背景にした暖かい芸術家の血の通った学問である。

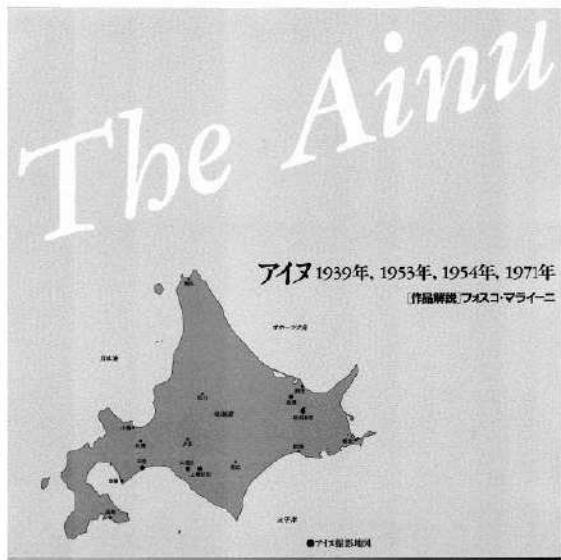
先生は日本滞在の間、日本の、主として京都の庭の素晴らしい写真を撮った。先生の日本の庭の写真には、ヨーロッパ文化、特にイタリア文化との比較の視点がかっきりしていて、日本の庭の独特の美しさを鋭くとらえているのである。また逆に、日本の庭との比較において見られたヨーロッパの庭の写真も素晴らしい。とても普通の写真家の撮り得ないものである。私はマライーニ先生の写真を見て、やはり写真というものは、それを撮る作者の目がいかに大切であるかを改めて感じた。

マライーニ先生は、戦争中捕虜になって、豊田市にあるお寺にいたといわれる。捕虜になったはずなのに、先生はその寺のことを懐かしんで、豊田市に深い親しみを持っておられる。今回、豊田市がマライーニ先生の写真展をされるのは大変よいことである。このルネッサンス的の万能人の面影を残すマライーニ先生の芸術的な香り高い写真を鑑賞しつつ、イタリアと豊田市を結ぶ不思議な縁に思いを駆ようではないか。

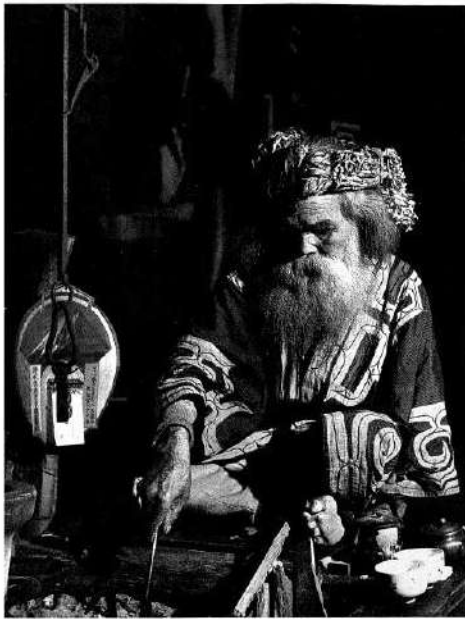
梅原 猛

国際日本文化研究センター所長

フォスコ・マライーニ写真展実行委員会委員長



白老(1958年)
アイヌの宮本村長
[日本名が
訪問者にアイヌの流
儀で挨拶する。



白老(1958年)
アイヌの正装ア
ツツシの飾りサ
パウンベをつけ
て小屋の中に
座る宮本村長
(日本名)。



美幌(1964年)
アイヌの長老
(エカシ)
菊池儀之助
(日本名)。



上貫知別(1939年)
アイヌの長老
(エカシ)。



白老(年代不詳)
白老村のアイヌ長老
(エカシ)。



屈斜路湖のコタン(1954年)
アイヌの女たち。



屈斜路湖のコタン(1954年)
イオマンテの祭りの前、熊の
オリの周りで踊るあアイヌの女
たち。



屈斜路湖のコタン(1954年)
アイヌの女たち。



屈斜路湖のコタン(1954年)「イ
オマンテの祭りの前、熊のオリ
の周りで踊るあアイヌの女たち。



屈斜路湖のコタン
(1954年)
完全に凍結した屈斜路湖畔でのイヨマンテの祭り。男たちは熊狩野真似をし、女たちは座って歌う。女たちの後方には数多くのイナウや捧げもの上がった祭壇ヌサ。



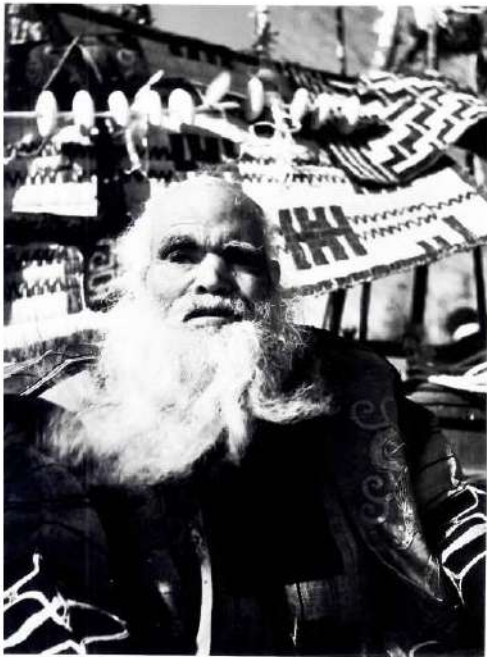
屈斜路湖のコタン
(1954年)
男たちが熊を村中に引き回す間、女たちは一列になり、手拍子をとって歌う。



屈斜路湖のコタン
(1954年)
熊が殺され、神(カムイ)となった。エカシがムシロに座り、神に祈りを捧げる。熊はオスだったので捧げものは月や弓矢である。もし、もしメスだったら漢し揚げ物は首飾りや耳飾りやその他の装飾品になる。



屈斜路湖のコタン
(1954年)
熊の死体が切り割られる。イヨマンテの最期を飾る儀式。右に祭壇ヌサ。背景に凍結した屈斜路湖。



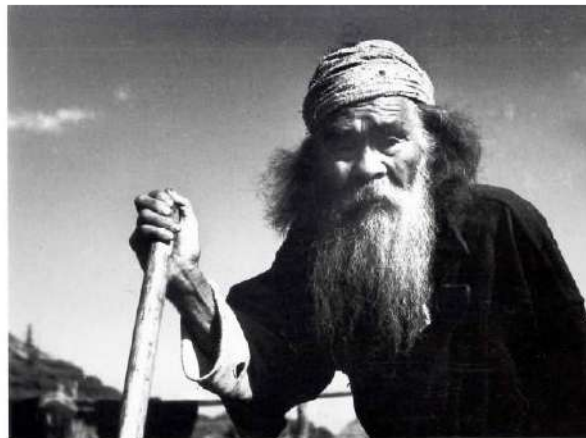
屈斜路湖のコタン
(1954年)
イヨマンテの祭りの後、祭壇ヌサの近くに座るアイヌのエカシ。



屈斜路湖のコタン
(1954年)
罽伊慕の女真カムイ、フチに献酒を捧げる2人のアイヌのエカシ。



二風谷のコタン
(1971年)
以前に行われたイヨマンテの祭りのイナウと熊の頭蓋が祭壇ヌサに飾っている。



白老(1989年)
白老村のアイヌ長老(エカシ)。



漁網 ©2015 MCL - Vieusseux - Alinari

フォスコ・マライーニ写真展 魅惑の海女たち

L'incanto delle Donne del Mare
Mostra fotografica di Fosco Maraini

2015 6.16 [火] » 6.30 [火] 11:00~18:00
日曜休館

入場無料

会場 イタリア文化会館エキジビションホール
東京都千代田区九段南2-1-30

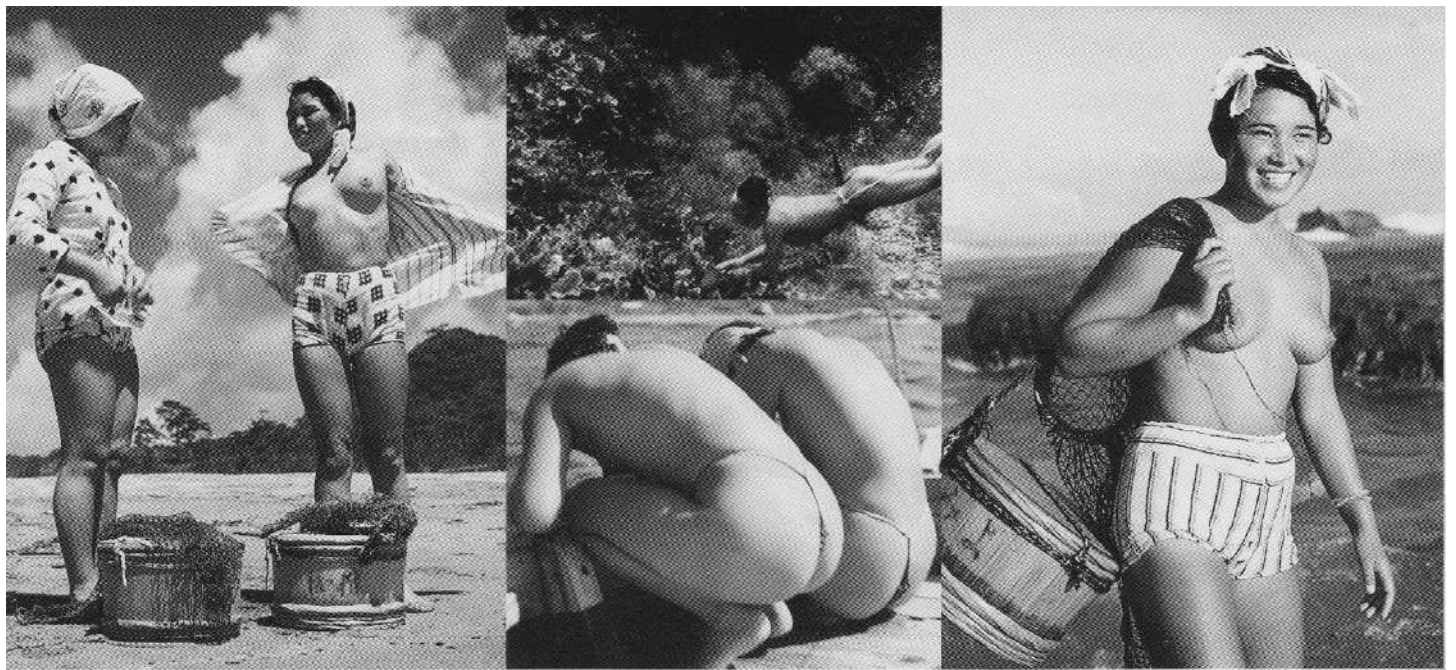
【お問い合わせ】Tel. 03-3264-6011(内線13,29) E-mail: eventi.iictokyo@esteri.it

【主催】 イタリア文化会館、ルガーノ文化博物館



Città di Lugano
Museo
delle Culture





【写真左】靴着を脱いで 【写真中上】海藻のはびこる庭 【写真中下】船上の天衣無縫なふたり 【写真右】岩場をつたって ©2015 MCL - Vieuxseux - Alinari

フォスコ・マライーニ写真展 魅惑の海女たち

L'incanto delle Donne del Mare
Mostra fotografica di Fosco Maraini

フォスコ・マライーニ(1912-2004)はイタリアの著名な人類学者で、民俗学や東洋学の分野でも多くの業績を残しました。また著述家、登山家、写真家としても活躍するなど、その活動は多岐にわたりました。マライーニが初来日したのは1939年で、北海道大学でアイヌ研究をするためでした。戦後イタリアへ帰国しますが、その後たびたび日本を訪れ、日本に関する論文や著作を多数著しました。

1954年、マライーニは長年関心をもっていた海女について調査をし、ドキュメンタリーを撮るために、能登半島の北に位置する軸倉島と御厨島を訪れます。そのとき、村の様子や伝統行事、村人たちや海女の姿を写真に撮り、その一部は1960年に出版された著作『海女の島 軸倉島』にも収められています。

本展では、そのなかから海女の写真を中心に30点展示します。水中でも多く撮られたこれらの写真は、躍動感にあふれた、純真無垢な海女の姿を写し出しています。

また、カメラを水中で使用するときに使っていた防水用の手作りのケース3点もあわせて展示します。

日本では一昨年、海女を描いたテレビドラマが話題になりましたが、マライーニの作品では、60年も前の海女たちの様子を目にすることができます。それらは、記録としての価値をもつだけでなく、それ以上に、芸術性の高い作品として評価を受けています。

フォスコ・マライーニ Fosco Maraini

1912年フィレンツェ生まれ。高校卒業の頃から写真に興味をもち始める。1936年にはフェッラーニア写真コンクールで最優秀賞を受賞した。1937年、G.トッチのチベット遠征に参加。1938年にフィレンツェ大学を卒業し、翌年、北海道大学でアイヌ研究をするため来日した。終戦後イタリアに帰国。その後たびたび日本を訪れた。1950年代にはカラコルム山脈のガッシャーブルムIV峰やヒンドクックシュ山脈の高峰サラグラールに登頂した。訪れたそれぞれの地で撮った写真は高く評価されている。

2001年には東京でフォスコ・マライーニ写真展「イル・ミラモンドーレンズの向こうの世界 60年間のイメージの記録」が開催される。2002年、90歳を記念して、フィレンツェ市がヴェッキオ宮殿五百人広間で祝賀行事を行った。

2004年没。蔵書や25,000点を超える写真は、フィレンツェのG.P. ヴィッジャー文庫が管理している。勲三等旭日中綬章(1982)、国際交流基金賞(1986)受賞。日本山岳会名誉会員でもあった。翻訳された著書に、「チベット そこに秘められたもの」*Segreto Tibet*, 1951(1958年、理論社)、「海女の島 軸倉島」*L'isola delle pescatrici*, 1960(1989年、未来社、新装版2013年)、「随筆日本 イタリア人の見た昭和の日本」*Ore giapponesi*, 1957(2009年、松籟社)など。



◆地下鉄「九段下」駅下車
(出口2)徒歩約10分。
※駐車場はありませんので、
車での来場はご遠慮ください。

イタリア文化会館 Istituito Italiano di Cultura

東京都千代田区九段南2-1-30
2-1-30, Kudan Minami, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0074
<http://www.iictokyo.esteri.it>

フォスコ・マラーニの死にちなんで

谷 泰 (たに・ゆたか) 文化人類学者、京都大学名誉教授

(京都大学学士山岳会ニューズレター第 32 号から。 <https://aack.info/ja/newsletter/01-49.html>)

フォスコ・マラーニ(1912年、フィレンツェ生れ)は6月8日、フィレンツェで92年の長い生涯を全うして、この世を去った。もちろんいまこのニューズレターでこの事実を知らされる人のおおくは、名前は聞いていても、直接会ったこともなく、一流のクライマーとして名をはせたわけではない彼の死を、縁遠い出来事と思われるかもしれない。ただ1968年、学士山岳会のチョゴリザ登攀隊のメンバーは、バルト口氷河上で、ガッシャーブルムIVを目指したイタリア隊のリエゾンオフィサーとしての彼に出会っている。そしてそこで、とりわけ京都を愛し、すでに日本研究者としてエスタブリッシュしていた彼の日本隊へさしむけた深い友情と、ボナッティなど若いイタリアのクライマーを暖かく包み込んで隊を率いていたエクスペディションの先輩としての彼の人となりに魅せられたことは、チョゴリザ隊の報告書を読んだ人ならば知っている。

1960年代以後、個人的に彼とそれなりに親しく交わったわたしは、ちょうどイタリアにいる立場も幸いして、個人的な立場でその告別式に参列した。ただうえのような縁から、編集者にマラーニにちなんでなにかを書いてほしいともめられた。そこで、たんに岳人としてだけでなく、日本について、いやアジアについて深い理解をもって、その意味を世界に知らせた文筆家としての彼の人生について簡単に記し、かつ死を予想して告別式のためにあらかじめ彼がしたためた遺言とも言える文を紹介しておく。

彼は、イタリア人で当時著名な彫刻家を父とし、オルダス・ハックスレーをはじめ、D. H. ローレンスなど、当時イギリスでの一流の知識人たちと親交のあったイギリス人の母のもとで成長している。つまり彼はすでにこの家族的環境において、イタリアというかざられた世界から距離をおいた、より広い視点

から世界をみる目を身につけたようだ。しかも両親はともに旅行が好きであったという。このことが山好きであるだけでなく、こよなき好奇心をもって異文化世界を旅した旅行家としての彼の人間形成に深く関係しているとみてよいだろう。20歳前後は、しきりにアペニンをはじめ、ドロミテ地方の山に出かけている。ところでアジアとはじめての関わりは25歳(1927年)のときであった。当時著名なチベット学者であったトゥッチが、再度チベットに調査行を計画していることを新聞紙上で知り、応募し、写真家としての才能を評価されて、チベットに赴くことになる。こうして、そのときの経験およびその後の再訪経験が、チベット人のところをよく映し出した写真を含めた名著「秘境チベット (Segreto Tibet)」を生むことになっている。ドライ・ラマはこの書物をこよなく愛したという。

ところで1930年代後半、イタリアはファシズムの流れが強まる時代であった。彼はそこでの息の詰まるような空気を嫌い、日本が留学生を募っていることを知って応募する。そして1938年暮れ、日本に向けて出発することになる。すでに民族学的関心をもっていた彼は、アイヌを研究の対象とすることをめざしていた。ただ、すでに自文明とは異なる高度に洗練されたチベット文明に触れた彼は、たんなる地域的な調査者としてだけでなく、異なる文明のもとで生活する人々を、先入観を抑えてみる目をはぐくんでいたのだろう。船で日本に向かう途上、寄港する場所場所で触れる現地の人々の生き様をつぶさにみるなかで、彼はつぎのような観察をしている。

インドの港で、香港の港で、寄港するたびに、土産物の小物や革細工などをつんだ小舟に乗った物売りが、雲霞のように船のまわりにたむろする。それはだれもが経験する光景だ。ところが日本の神戸に近

づいたとき、湾内は静穏そのもの、これまでみてきたアジア的喧噪とカオスが全くみられない。そして港の岸壁をみれば、そこに一直線に並列した黒々とした人の列がみえる。そしてそれが、やがて手には白い手袋をした人力車の車夫であることをみいだす。こうして彼は、そこで、これまでみてきたアジア世界のたんなる連続ではない、別個の文明世界がそこにあるという思いにいたるのである。

なんということない日常の出来事の差異の中に、ことの核心をみる鋭敏な観察者の姿とってよいだろうか。彼はこうして、日常の出来事をありのままに写す写真家をこえて、日常の出来事の背後にある固有性を、それぞれの歴史と文化の深みのなかでとらえるべく、つねに好奇と思索を繰り返す生活を、日本で開始したようである。彼はまず、札幌は北大の人類学教室に籍を置き、アイヌの村を訪れて、まさにアニミズム的とも言える神々の世界を知る。またその後、京都大学のイタリア語教師として京都に居所を移し、日本人が磨き上げた自然への繊細な感性と美学の粋に触れることになった。

ただ当時の彼を取り巻く世界情勢は、彼を、そして彼の家族を思いがけない運命へと導くことになる。日本はまもなく戦争状態に突入し、やがて同盟国としての日伊関係がゆらぐ。こうして彼は、外国人としていずれの側につくかという政治的立場を表明することを余儀なくされる。そしてファシズムを肯定できないものとして自己表明をするとともに逮捕されて、家族ごと名古屋郊外で、外国人捕虜としての収容生活を送ることになった。ただそこで支給される食料はひどくまずしく、幼い3人の子供と妻をとともなうものにとって、そこでの生活は耐え難いものであった。彼はついに思いあまって、戦争捕虜にも最小限保証されるべき生存権を主張して、官憲の前で自らの小指をナイフで切り落として抗議する。身体全身を張っての自己表明としての血書へのなぞり、それは相手(日本人)のもつ論理を我が身のものとすることによって相手を封ずる、劣位にあるものが唯一とりうる抗議の手段であったともいえる。

ただその背後に、人間性への等しき尊厳をもって



「チョゴリザBCにて、自著の邦訳『チベットーそこに秘められたもの』にサインして桑原先生に贈呈するマラーニさん。1週間前に日本の出版社から“バルトロ氷河マラーニ様としてとどいたもの” = 「チョゴリザ隊資料」提供

最低限の生存条件をみとめられることへの、身を切った強い要求がたぎっていたことは、だれもが推測できることだろう。官憲の取り扱いは、この彼の行為で急速改善するのだが、彼はこの逆境のなかで、彼等を等しく人間としてみて、彼らにひそかに慈愛の手をさしのべる老婆や仏教者に出会いもしたのであった。日本という異国の地で、惨めな虐待を受けながらも、その後日本人を愛し続け、戦後いくども日本を訪れて、日本紹介の名著としていまも読み続けられている『日本ときどき (Ore Giapponesi)』が生み出されたのも、このような小さきものの示した人間としての温情との出会いがあったからだといっただろう。彼は、この時代に彼等に温かい手をさしのべた人々を、終生忘れず、折に触れて訪ねている。

さて戦後、イタリアに帰って以後、彼は日本、チベットを再訪するだけでなく、イタリアの山岳会の求めに応じて、ガッシャーブルム登攀隊の年長メンバーとして、1958年、カラコラムに出向くことになる。イタリアのK2登攀隊が、体制に密着したデジオを隊長にした国を挙げた事業であったのにたいして、ガッシャーブルム隊は、フォスコという、権力からつねに距離をおきつつ、豊かな知性とユーモアに満ちた人間性をもつ隊長のもとで、のびのびとした隊であったことは、いまでも当時の隊員が述懐している。

また当時はクライマーとしての実力はあるが、地方の出身の登山屋であったボナッティが、のちに世界の僻地まで赴いて、優れたドキュメンタリーをものす著述家となったのも、まさにフォスコに触れたためだと告白している。ある意味でチョゴリザ隊隊長の桑原さんの役割を想起するのは、わたしだけではないだろう。翌年1959年には、ヒンドウクシュのサラグラール峰登攀隊隊長として、ローマの学士山岳会の隊を率いている。その報告書は、『パロパミーゾ (Paropamis)』という題で出版されているが、登攀報告の域を超えて、それはヒンドウクシュ地域の歴史と文化を広い視野から紹介したものとして、優れた著書となっている。

こうして、彼は写真家、登山家、旅行家、民族学者、文明の省察者として、その著書を世に問うことになったのだが、イタリアのアカデミズムの世界ではけっして早くから評価されたとはいえない。彼はながくイギリス、オックスフォードでの講師としての地位に甘んずることにとどまった。彼が祖国イタリアでようやく大学での地位を獲得するのは、人生のなかばを終えてのこと、ようやく1970年代になってフィレンツェ大学に日本学の講座が創設され、その教授になってからのことである。

彼はこうしてイタリアで日本学を学ぶ若い研究者が集える場「イタリア日本学研究協会」を創設している。そしてのちに京都の国際日本文化研究センターに客員教授として招聘されもした。

死の数年前からである。彼は心臓の疾患でペース

メーカーを体内に装着する身になった。ただ終生明晰な頭脳を維持して、その広い知見で著述活動を続けた。また、つねに山登り屋がもつづくたのまない人間味と寛容さを持ち続けて、おおくのフィレンツェを訪ねる日本人の相談相手になった。死因は、ペースメーカーの不調を直すための手術の結果が不首尾で、病院で最後の息を引き取ったとのことである。

わたしは彼の死の知らせをまずはテレビのニュースで聞いた。そして告別式が6月10日、フィレンツェの旧市庁舎パラッツォ・ヴェッキオで執り行われることを彼の奥さんミエコさんから確かめて、その日フィレンツェに赴いた。時はすでに6月、ヨーロッパは観光シーズンがはじまっており、フィレンツェの駅前も、街路も、現地のフィレンツェ人よりも、はるかに外からの観光客の方が多くみかけられる、そんな季節に入っていた。パラッツォ・ヴェッキオは、かつてルネッサンス時代の都市中心、市の政庁があったところで、その前にはよく知られたミケランジェロの若き頃の作品ダヴィデの彫像が立っている。そしてここでも庁舎の前の広場は、観光客であふれかえっていて、およそこんなところのどこで告別式があるのかという趣きを呈していた。

いったいこの建物のどこで？ こんな思いでわたしは、この高い石造りの建物の一方にある入り口脇に立っている女性警官に、フォスコ・マラーニ二氏の葬儀に来たが、どこであるのかとたずねた。すると彼女は入口の奥の暗い空間を指さす。たしかに指さされた方向には細長いテーブルが置いてあり、そこに記帳用の帳面が3冊あまりボールペンとともに置いてあった。告別式の時間帯に都合がつかず、すでに記帳だけを済ませて立ち去った人もあるのか、すでにいくつものサインがされていた。ともあれ一時間ほど早く来たために、記帳を済ませたが、そのテーブルから奥、右を見れば、うすくらい空間のむこうにひっそりと遺体を入れたお棺がみえた。棺のまわりには20鉢ほどの花が飾られているだけ。さしずめ日本だったらその花鉢には、献花をした団体や個人の名前が書かれているのだが、およそそんなものはまったくない。そしてそのわきに30席ほどの折りたたみ椅子が並んでいるだけのひっそりした告別式場で、

フォスコはその脇のお棺の中で穏やかな表情で永遠の眠りについてた。

誰か親族がもたせたのであろう、バラの一枝が右手におかれてあった。わたしはフォスコに向かって手を合わせてからあと、右手に彼の娘ダーチャ（現代イタリアの著名な小説家の一人）がいることに気づき、挨拶をした。そして苦しんだのかとたずねると、いや眠ったままみまかったということであった。

ともあれ少々早めに来たわたしは、しばらく外に出てから、4時にもどると、すでに告別式場には200人近くの人に来て告別式の開始を待っていた。そしてのちに紹介するフォスコが予め死を予期して書いた参列者への最後の言葉を記した印刷物が配られた。そこには、なぜ教会の葬儀を避けて、一見味気ない世俗の葬儀を依頼したのか、その信条が、彼の最後の信念表明として記されていた。

そうこうするうち、程なくフィレンツェ市固有の祭服を着込んで、片手にトランペットを持った市の儀使兵が2人、市長とともにやってきた。そして娘のダーチャが前に立ち、式次第としてこれから追悼の言葉を述べる予定者を紹介する言葉を発し、告別式は始まった。そこで弔辞を述べたのは、フィレンツェ市長、イタリア山岳会フィレンツェ支部の会長、イタリア日本学研究会会長、山岳会ガロファニャーナ（アペニン山脈のフォスコの山小屋のある地域）地区会長、日本大使、司祭になったが、山にゆくことをフォスコに教わって自然の美しさ、そして無償の山

登りのうちに喜びを見いだすことを教えられたというフォスコの若いときの友人、そして妻ミエコといった人々だったが、いずれもフォスコに対する友情と敬意に満ちたものであった。

そして最後にトスカナの地方山岳会のグループによる山の歌、死せる友を悼む歌を含む3つ（わたしも知っているものだが）、しっとりとした合唱で、フォスコの死を悼みつつこみ上げてくる涙をぬぐう人の姿も見受けられた。最後にチベットの僧侶が2人読経、そして市の祭服を着た楽師の哀悼のためのトランペットの吹奏で式は終わった。

ところで、教会での著名人の葬儀に比すと、いかにも簡素なものであったが、そのとき配られた彼の残した最後のメッセージは、たんにイエルサレムという呪縛からみずからを解放しえない（じつは自分もそこに属している）ユダヤ、キリスト、イスラム文明世界の人々をこえて、これまで彼が旅してきて出会ったすべての文明世界の人々に向けられており、文明の対立のもとで不安に満ちた日々を送らざるをえない現在の世界情勢を考えると、だれもがひそかに心に抱きつつ希求している立場を、控えめながらも心強く表明している。それを読む人は、味気ない俗なる告別式場に友を招くことにした理由釈明とともに、矛盾に満ちた現代に生きるひとびとにむけての、立ち去るものとしての最後の祈りの声をそこに見いだすはずである。

親しき友人諸氏へ 人生最後のメッセージ

この度、宗教色抜き葬儀の常として、いかにも味気ない葬儀場に集まっていたことになったことを、心苦しく思います。もちろんわが愛するフィレンツェの崇高で歴史の香りあふれる教会、そして賛美歌、散香の香り、音楽そして花に満ちあふれた場に、皆さんをお招きできたのであれば、言うまでもなくすばらしかっただろうことは、重々承知してのこと。た

だそれを阻んだのは、つぎのような自己の信条を最小限貫きたいという思いでありました。

あなた方は尋ねることでしょう。いまお前は何処に居るんだい？ いったいどういう信念のもとで、おまえは、だれも避けることのできない不思議な旅に向けて、地球を去ろうとしているんだいと。

それにたいして、わたしは、わたしの人生でのある決定的な出来事からことを話しはじめたいと思います。1965年から66年にかけてのことです。わたしはニューヨークのハークルート・ブレース社の依頼を受けて、かの3つの大宗教のセンターである都市イエルサレムについて一書をものすことになりました。その書物は1969年『イエルサレム：時代を語る岩』という題で発刊されていますが、そのためにイエルサレムに数ヶ月滞在することになりました。おまけにこの訪問の機会に、わたしは聖書(旧約聖書と新約聖書)とコーラン(わが友アレッサンドロ・パウサーニによる名訳ですが)を丹念に読むことになったのです。実際わたしの書齋にある『イエルサレム・バイブル』と『コーラン』を見てみてください。そこにはたくさんアンダーラインがしてあるのを見るでしょうが、それはすべてそのときのものなのです。

ともあれこの経験以後のことです。わたしは神の啓示(Revelation)という問題を真剣に考えはじめました。そしてその後「月から地球にメッセージを伝えるために来た月界人」ということを意味する“CITLUVIT”という語を造語したのですが、このような立場、言い換えると真の意味で偏見から自由な精神の持ち主からみて、この〈啓示〉というものは、なにもイエルサレムにおいて発せられたかの有名な2つの啓示に限定されるものではないと考えはじめたのでした。それこそ、視野を広げて、啓示は、ゾロアスターの思想にも、ヒンドゥーのリシの考えにもある。いや仏教をどうして無視できません。サツダルマ・プンダリーカもまた啓示の一つではないか。さらに世界の諸宗教へと視野を広げてみるなら、モルモンのそれ、バハイのそれ、ヴィエトナムのカオダイのそれ、日本の天理教のそれと、おおくの啓示の事例を見いだすことができる。それこそガルザンティ社の宗教小辞典を見るだけでも、そこには38もの宗教が指摘されています。そのそれぞれにおいて啓示という現象が認められなくてはならないというわけです。まさにこういう啓示の洪水を前にして、神様、いったいどれが本当の信用にたる啓示なのですか？まさか神様あなたは、人間をからかおうとしておられ

るのではないでしょうね？ある啓示に対してこれがより優れているといういったい何処にそういう保証があるんでしょう？と尋ねたくなるほどなのです。

わたしはこうした疑問を抱きつつ、それぞれに互いに距離を保った諸文明に向けての旅をし、それにじかに触れる経験を通じて、はっきりと次のように思うようになったのです。つまり、ある特定の場所、特定の時点で、特定の人物に開示されるところの〈局在する啓示 Rivelazione Puntuale〉というのではなく、〈常在する啓示 Rivelazione Perenne〉というものが実はあるんだ。それは自然の中でも、日常の人間的世界のなかでも、もし聴こうとするものならいつでも何処でも、神秘的な語りかけとして受け取られるものであり、じつはそういう宗教的場にわれわれはいる。なにも預言者から聴くのではなく、聴く、見る、読むだけでよい。すべては啓示としてそこに、いつも示されていると。

もちろんこういう考えに対して、あなたは、たしかに美しいもの、崇高なもの、朝日に輝く樹上の雪、月光のもと岩に砕ける波頭、林の梢を吹き渡る風に触れるとき、われわれはある神々しさを感じ得る。しかし醜いもの、悪しきもの、恐るべきものに触れても、お前はこの常在する啓示を感じ得るのかと、尋ねるでしょう。答えは言うまでもなく〈そうだ〉です。ある意味で悪は善や美よりもより啓示としての教えを含み、はるかに神秘である。神は無垢の子供の死を、そして苦悩をどうして許容するのか？神秘性が増すにつれて、苦しみはいや増し、恐れにおののくと言うべきでしょうか。

確かにこういう視点から見ても、イエスはモーゼやムハマッドと等しく、いや仏陀や老子と同様に偉大なる人物であり続けます。しかし(おそらくあの巧妙かつ天才的なパオロの創作でしょうが)イエスをわたしはどうしても〈神の子〉とは見なせないのです。

常在する啓示の中で、わたしは平和と安心とを見いだしてきました。きわめておおくの理由から、わたしは〈局在する啓示〉よりも〈常在する啓示〉の方が

はるかに優れていると思えたということをいま告白します。

そう、常在する啓示は、それこそ最初にこの世に到来した人類が不安と、感謝と、希望と不思議の思いをもって天を見上げたそのときから、つねに常在していたのです。もし局在する啓示の立場に立つなら、啓示は人類史のなかできわめて遅れて立ち現れたと言うこととなります。常在する啓示という考えに立つときはじめて、啓示宗教が現れる以前の人類、古代の、また異教の、そして未開の人々にも啓示はあったということになり、この不自然さは解消するのです。そしてこの常在する啓示という観念のもとで、ネアンデルタール人も、さらに遠い過去の人々と同様に、われわれの親しき同胞、親しき精神の友となるのです。

この常在する啓示のもとでは、まさにある啓示を信ずるがゆえに、他の啓示の信者を物理的に抹消することに向かう、あのファンダメンタリスト的崩壊現象は回避されるはずで、あの恐ろしい出来事は、すでに過去においていくどもおこったことです。十字軍を、アメリカ大陸征服時のあの悲劇を、ヨーロッパを初め各大陸で繰り広げられた宗教戦争を想起するだけでよいでしょう。またあまたのテキストを引用するまでもなく、次の二つをあげるだけで十分でしょう。教父フランチェスコ・パニガローラ（1548～1594）は『ドグマにかんする教え』（フェララ、1585）においてこう言っています。「もし（キリスト教を信じない）不信仰ものに勝利すべく神が恩寵を賜るのであれば、彼等を赦すことなく、殺してしまえ」と。ときに心優しき仏教徒でさえ、輪廻に関

する観念を危険な方向に押し曲げています。

イエチケは彼のチベット語辞典（123頁）でこう言っています。「チベット人の信仰によれば、仏教の敵を殺すのは一つの慈悲である。それで彼が罪をさらにつみ重ねることが防げるからだ」と。（異なる宗教信条の保持者の共住を希求する）エクメニズムは、もし自己の宗教の啓示の内部にとどまるかぎり、こころよい懐のなかに安住しつつ、彼らの言葉は、たんなる言葉、虚ろで偽善なものにとどまる。〈歴史〉ではなく、〈自然〉に結びついた〈常在する啓示〉こそが、深くかつ実感のこもった人類同士の精神的一体へと、われわれを導くのです。

常在する啓示という考えのもとでこそ、宗教と科学、人間と自然とのあいだの対立は克服されるはずで、科学はそこでは常在する啓示の探求になり、隠された神との協力のもとで、宗教的な営為と一体化するはずで、

常在する啓示こそが、遠き孤島で自足しつつ謙虚に住む人から、高度なる文明中心で最高の知性の高みに達した人にいたるまで、すべての生きとし生ける人類のすべてが、ひとつになることを保証してくれるのです。

もう一度最後に、伝統的なしきたりに従ったふさわしい告別の場を用意して、あなた方をお招きすることをしなかったことの許しを乞うとともに、いまなぜそうしなかったかその理由がおわかりいただけたいことを期待しつつ、お別れの言葉に代えさせていただきます。 フォスコ

（注）筆者の谷泰先生から転載の許可をいただきました。また、筆者訂正を頂いた箇所は訂正いたしました。

アジア太平洋戦争下の民間人抑留

——その経緯と日本各地の状況

小宮まゆみ

民間人抑留とは

戦争に伴う民間人抑留とは、軍人として戦って戦場で捕らえられる捕虜とは異なる。対戦国の国籍にある民間人を、敵の戦力になることや情報が漏れることを防ぐため、予防的に収容するのが民間人抑留である。

武器を持たない民間人が戦争によって初めて大量に抑留されたのは、第1次世界大戦時のヨーロッパであると言われる。第2次世界大戦においては、1939年9月、大戦が勃発すると直ちに、イギリスでは敵国ドイツ人の抑留が、ドイツでは敵国イギリス人の抑留が始まった。日本では1937年以降の日中戦争によって英米との関係が悪化しており、ヨーロッパの戦況を見据えて、各県警察による敵性外国人（敵国人となる可能性の強い外国人）への監視が強化されていった。そして1941年12月8日、アジア太平洋戦争開戦と同時に、「敵国人」となった英・米・蘭人などの抑留が始まった。アメリカでは日本の真珠湾攻撃に対する恐怖や敵愾心から反日感情が高まり、1942年2月大統領令9066号が発せられ、太平洋沿岸に住む12万人に及ぶ日本人や日系米国人が、内陸の収容所へ強制収容された。それに比べると、当時日本にいた英・米・蘭・カナダなど連合国側の外国人は2138人と数が少なく、抑留者数は延べ約1200人と、アメリカにおける日系人強制収容の100分の1程度の規模である。しかし数が少ないからと言って、知らなかったと済ませる訳にはいかない。ではどのような人々が抑留され、その抑留生活はどうだったのだろうか。

開戦と抑留の開始

日本政府は日米開戦前から、開戦に備えて敵国

人抑留の準備を進めていた。1941年11月28日、つまり太平洋戦争開戦の10日前、内務省警保局は「外事関係非常措置に関する件」通牒で、開戦に際して敵国人として抑留すべき対象者を定めて通達した。この通牒により、基本的には18歳以上45歳までの男性が抑留の対象者とされた。目的は防諜と身柄の保護である。

そして12月8日の開戦から一斉に、日本に在住する連合国籍外国人の拘引と抑留が開始された。抑留所は外国人が居住する都道府県内に設置することを原則としたため、全国に34か所もの敵国人抑留所が設置され、英100、米93、カナダ73、蘭23、ベルギー16、ギリシャ14、その他23の計342人が抑留された（『外事月報』1941年12月による）。

開戦時の抑留所と抑留者数

1	北海道 室蘭	1	英1, ノルウェー1
2	北海道 札幌	1	
3	青森	5	カナダ4, 蘭1
4	秋田	1	米1
5	岩手 盛岡	13	米3, カナダ4, ベルギー6
6	宮城 仙台	53	米11, 英2, カナダ40
7	福島	1	カナダ1
8	富山 高岡	1	英1
9	石川 金沢	3	米1, 英1, カナダ1
10	群馬 前橋	5	英3, カナダ2
11	栃木 宇都宮	1	カナダ1
12	茨城 水戸	1	カナダ1
13	埼玉 浦和	2	カナダ2
14	東京 世田谷	36	米13, 英9, カナダ5, 他9
15	神奈川1 横浜	59	米24, 英47, カナダ1, 蘭3, ギ
16	神奈川2 横浜	34	リシャ13, 他5
17	静岡	3	米3
18	三重 津	1	米1
19	三重 宇治山田	1	米1
20	滋賀 大津	5	米4, 蘭1
21	京都	6	米2, カナダ1, ベルギー1

22	大阪	5	米2, 英2, 日1
23	奈良	1	米1
24	兵庫 神戸1	35	米6, 英25, 蘭8, ベルギー1, ギリシャ1, 他3
25	兵庫 神戸2	9	米1, 英3, ベルギー3, 他7
26	岡山	12	米11, 英1
27	広島 三次	14	米1, 英3, ベルギー3, 他7
28	島根 松江	1	米1
29	福岡 大濠町	4	カナダ4, 仏4
30	福岡 浄水通	4	
31	長崎	21	米5, 英4, カナダ6, 他6
32	熊本 高浜村	1	
33	熊本 久玉村	1	英1, 蘭1, ベルギー1
34	熊本 八代	1	
	計	342	英100, 米93, カナダ73, 蘭23, ベルギー16, ギリシャ14, 他23

*道府県別の抑留者の合計が20人以上になるところにグレーの網をかけた。

これら開戦時の抑留所のうち、20人以上の外国人を抑留したのは、宮城県、東京都、神奈川県、兵庫県、長崎県の5都県である。宮城県以外は、幕末から明治初めにいち早く港を開いて貿易を行った都県で、そのころから多くの外国人が住みついていた。宮城県の場合は少し事情が異なり、明治以降カトリックの布教活動が盛んに行われた地域で、抑留された53人のほとんどは神父や修道士であり、本来抑留対象外の女性である修道女までが多数含まれていた。その他の各県の場合、抑留者は県で1人～3人というごく少数がほとんどで、ミッションスクールや旧制中学・高等学校の英語の教師が多かった。抑留施設の半数以上は教会や修道院、キリスト教学校の校舎など、キリスト教関係施設だった。抑留者が県で1人という場合は、外国人の自宅を「みなし抑留所」として軟禁し、特高警察の監視下に置くこともあった。

開戦の時点で最多の抑留者を抱えたのは神奈川県であった。横浜市中区根岸の横浜競馬場^{うまぬし}の馬主会館を接收し神奈川県第1抑留所(☎695)とし59人、中区新山下町の横浜ヨットクラブのクラブハウスを接收して神奈川県第2抑留所(☎708)とし34人、計93人が抑留された。抑留者にはフォード自動車やライジングサン石油など米英系企業の会社員、貿易商、インターナショナルスクールの教師、横浜港で拿捕された外国船の船員などが含まれて

いた。開戦当初海外への宣伝効果も考慮されて、抑留所の待遇は比較的良かったと思われる。

1942年3月末に抑留所は監視の便宜のため、宮城、東京、神奈川、兵庫、広島、長崎の6都県に統合された(末尾の「民間人抑留所・抑留者変遷表」参照)。

交換船による抑留者の帰国

1941年12月の開戦によって、アメリカ、イギリスなど連合国の大使館には、大使や領事など多数の外交官が、軟禁状態で生活することになった。米英の日本大使館でも、外交官たちが同様の状態で敵国内に孤立していた。こうした外交官を相互に交換して帰国させることは、開戦後間もないころから日米、日英の政府間で折衝が重ねられていたが、1942年6月、ようやく日米交換船「浅間丸」と「コンテベルデ号」(イタリア船)の出航が決定した。「浅間丸」は横浜から、「コンテベルデ号」は上海から、中立国ポルトガル領の東アフリカ、ロレンソ・マルケスに向かった。一般居留民や抑留者にも交換船による帰国の機会が与えられ、「浅間丸」には計416人の外交官や民間人が乗船したが、そのうち76人は日本各地に収容されていた抑留者だった。アメリカからは、日本人外交官や民間人を乗せた中立国スウェーデン船の「グリッpsホルム号」がニューヨークを出港し、7月中旬交換地ロレンソ・マルケスに到着した。そして相互に乗船者を乗り換えさせる方法で、外交官・居留民などを帰国させた。航行ルートや日程を細部まで協定し、白十字の印を船体に描き、絶対安全航行(安導券)を保証されての航海だった。7月には日英交換船「龍田丸」と「鎌倉丸」が日本を出発し、454人の外交官・民間人をロレンソ・マルケスに運んだ。そのうち60人は日本各地からの抑留外国人だった。その1年余り後、1943年9月に第2次日米交換船「帝亜丸」が出港し、インド西海岸のポルトガル領ゴアのマルマゴン港でグリッpsホルム号と乗船者の交換を行った。日本からは124人の乗船者を運んだが、そのうち抑留者は73人だった。

ちなみに、各回の交換船に乗って交換地で交換された乗船者は、それぞれ約1500人だった。従っ

て双方の外交官の帰任や抑留者の帰国はそのごく一部にすぎなかった。中国・東南アジア各地にいた欧米人の帰国、英米からの日本人留学生の帰国、フィリピンや蘭印、太平洋地域で拘束され、オーストラリアで抑留された日本人の送還など、目的は多様だったと思われる。3回の交換船で日本国内の抑留所からは計209人の外国人が帰国した。その結果、日本国内の抑留所の収容者数は、減っていったと思われがちだが、実際はそうではなかった。

海外から連行された外国人の抑留

戦争の拡大とともに、日本軍が侵攻した海外の占領地から捕虜と共に、あるいは拿捕された船に乗ったまま、多くの外国民間人が日本に連行され抑留された。

最初に到着したのは1942年1月、グアム島作戦で捕らえられたアメリカ人で、その多くはグアム島の米海軍基地建設中の、建設会社の技師や作業員だった。彼ら計130人は神戸市内の抑留所（兵庫県第2⑥736、第3⑥741、第4⑥747）に収容されたため、兵庫県は神奈川県を抜いて176人という全国最多数の抑留者を抱えることになった。

それ以降、42年7月福島市（⑥667）にドイツ海軍による拿捕船「ナンキン号」等の乗客乗員137人を抑留。8月ラバウルで捕虜になったオーストラリア人看護師18人を横浜市の神奈川第2抑留所に抑留。9月北海道小樽市（⑥643）にアツ島の先住民アリュート40人を抑留。12月広島県三次町（⑥759）にインドネシアで拿捕された病院船のオランダ人船員・医師・看護師44人を、宮城県（仙台第1⑥656）に同船のインドネシア人水夫35人を抑留した。

その後も44年3月に東京港区（チリ公使館⑥691）に、ジャワ島バンドンで捕らえられたオランダ人電気技術者と家族計22人を連行して抑留と、大量の連行型抑留者を抱えることになった。彼らは日本の気候や生活習慣に慣れず、面会や差し入れをしてくれる友人もなく、その抑留生活は厳しかった。グアム島のアメリカ人以外は、彼らの存在は

厳重に秘匿されていたため、赤十字国際委員会などの人道活動の対象からも漏れて、支援物資もなかなか届かなかった。

拡大する抑留対象——1942年9月～1945年初め

女性宣教師と修道女の抑留

緒戦の勝利が過ぎ去り戦況が厳しくなると、1942年9月新たに「女子と高齢者を含む教師・宣教師・修道女・保母」の抑留が始まった。全国で女性126人を含む152人が新たに抑留され、東京では聖心女子学院のアメリカ人イギリス人などの修道女27人、兵庫県では小林聖心女学校のイギリス人などの修道女18人、岡山県ではノートルダム清心学園のアメリカ人などの修道女12人が抑留された。彼女たちを収容するために、東京抑留所（世田谷区の^{ナミカ}童女学院⑥678、現・田園調布雙葉学園）は女性専用の抑留所とされた。東京抑留所に収容されていた外国人男性たちは、10月から埼玉県浦和の聖フランシスコ修道院に移され、そこが埼玉県抑留所（⑥674）とされた。

イタリア人抑留

1943年9月イタリアが降伏すると、それまで同盟国だったイタリア人が敵国人となる（コラム⑥209）。10月からイタリア人が新たな抑留対象となり、イタリア大使や大使館員など外交官とその家族計42人は東京田園調布の聖フランシスコ修道院へ収容され、そこが東京第1抑留所（⑥682）となった。民俗学者のフォスコ・マラーニなどイタリア民間人16人は、愛知県名古屋市内（天白村、⑥724）に抑留された。

横浜山手などに居住の女性・子ども・老人の抑留

1943年9月29日に公布施行された内務省令「外国人の旅行等に関する臨時措置令の一部改正」によって、横浜市中区山手をはじめとする高地・臨海地帯など指定地域居住中の外国人は、全員地域外に退去させられることになった。同盟国のドイツ人や中立国のスイス人などは、箱根や軽井沢への移転が推奨されたが、敵国人の場合は強制的に集団居住させられた。そのために1943年12月7日、厚木市七沢に「敵国女子抑留所」（⑥718）が設置さ

れた。ここに移転させられたのは、英13、米4、蘭1など20世帯30人余りの人々で、抑留所とされたのは七沢温泉の旅館、福元館と玉川館であった。外国人のほとんどは、すでに開戦時に一家の柱である男性が抑留され、留守宅に残っていた妻子や高齢の親と思われる。中には貿易商として活躍し裕福に暮らしていたチャールズ・バーナードや、観光客に人気の洋館山手111番館を建てた実業家ラフィンの家族も含まれていた。

抑留所の地方移転と戦争末期の状況

1943年6月25日、神奈川県第1抑留所は足柄山山麓の北足柄村内山 (㊦700) に移転した。抑留所だった横浜競馬場が海軍の印刷所となったためだが、空襲を避ける意味もあったと思われる。53人いた収容者のうち、1943年8月に1人が病気のため抑留解除となり、同年9月の第2次日米交換船で3人が帰国したため、抑留者は49人となった。その後1944年後半から終戦までの1年間で、寒さや食料不足から5人もの抑留者が亡くなった。医療の欠如と、抑留所に配給される食料を、警備の警察官が私的に流用していたためであった。七沢の抑留所だった福元館と玉川館でも、医療の欠如や深刻な食料不足から、1年半の間に自殺者を含む5人もの死者がでた。

1945年5月末、七沢の抑留所は本土決戦のための将校宿舎になり、外国人たちは秋田県へ移動させられた。秋田県平鹿郡^{なてあい}館合村(現・横手市)の産業組合事務所が新たな抑留所となった (㊦653)。同時期に田園調布に抑留されていたイタリア人外交官ら48人も、秋田県鹿角郡^{かづの}のカトリック教会(毛馬内^{けまな}㊦649)へと移転させられた。

九州では沖縄戦の敗北を機に米軍上陸による本土決戦が現実的なものになり、それまで抑留対象にしなかったフランス人、ポルトガル人、ポーランド人など89人を、7月ごろから佐賀県小城^{きよみず}の清水 (㊦773)、熊本県阿蘇の柝ノ木温泉 (㊦777)、福岡県英彦山^{ひこさん} (㊦771) と、いずれも山間の辺地に収容した。

東京では1945年5月25日の山の手空襲で、文京

区関口台に設置された東京第2抑留所 (㊦687) が全焼した。収容されていた36人の女性たちにけがはなかったが、住居を失い、新宿区の聖母病院修道院に避難し収容された。8月9日の長崎への原爆投下で、長崎県抑留所 (㊦765) となった聖母の騎士神学校も被害を受け、抑留者が軽傷を負ったが幸い死亡者はいなかった。

まとめ

日本における敵国人抑留は、戦争の進展に伴って当初の抑留計画から外れ、その対象は女性や高齢者にも拡大されていった。また本来は日本国内に在住する外国民間人を対象にしていたにもかかわらず、海外の占領地から多くの外国人を日本に連行して抑留した。北はアリューシャン列島から南はニューブリテン島のラバウルまで、この戦争が資源や領土を求めての侵略戦争であったことが、連行型抑留者の来歴からも判明する。末尾に掲載した、「民間人抑留所・抑留者変遷表」を見てほしい。開戦時の表で342人だった抑留者は、交換船で多くの抑留者が帰国したにもかかわらず、713人と倍増している。実際には戦争末期に九州で外国人の根こそぎ抑留をしたので、この表よりさらに抑留者は多く、全国で858人が抑留されていた。抑留中の死亡者は約50人いたことが判明している。

それに対しアメリカでは、開戦当初のヒステリックな日本人への恐れや敵対意識が収まってくると、段階的に抑留所からの日本人の解放を進めていた。敗色の濃くなった日本では、開戦時の2倍以上の外国人を抑留し、彼らにまともな食事も与えられずに、抑留者たちは終戦時には殺されるのではないかと恐怖していた。

防諜と身柄の保護から始まった敵国人抑留だったが、外国人の多くはスパイどころか、日本の経済発展や教育・文化の向上に貢献した人たちだった。彼らの身柄を安全に保護することすらできず、多くの外国人が抑留中に亡くなった。また心に傷を負ったまま戦後の混乱の中で日本を去っていった外国人も多い。戦争による民間人の抑留は、身近に起こった戦争加害の歴史として忘れてはなら

ない。

本書の構成と記述

本書の民間人抑留所記事の構成と記述は、捕虜収容所とは、以下の点で異なっている。

対象としているのは、国内の主要な民間人抑留所で、見なし抑留所や、開戦時から短期間設置された抑留所は扱っていない。

記事は設置場所ごとに立てた。従って、例えば神奈川県厚木市七沢抑留所は移転して秋田県館合抑留所となるが、これを本書では別々の記事としている。

民間人抑留所の管理は、中央官庁である内務省警保局外事課の配下にある全国都道府県警察の特高（特別高等警察）外事課が担った。そのため、都道府県をまたぐ移転の場合、同じ抑留者でも組織的にはまったく別の抑留所の管理下に移されたことになる。記事を設置場所ごとに立てたのはこのような理由からである。

民間人抑留所を管理したのが特高外事課であったことから、内務省警保局が毎月発行していた『外事月報』が主な公文書資料となる。『外事月報』によって初めて、次ページの「民間人抑留所・抑留者変遷表」に示すような、すべての抑留所を俯瞰しての抑留者の複雑な異動を把握することができた。その意味では非常に貴重な史料である。しかし『外事月報』は1944年9月分を最後に、その後の発行は中断されたりしく、復刻版も存在しない。また『外事月報』の記述は、当然のことながら警察側の視点に偏っており、抑留を正当化して抑留される外国人の思いには無頓着である。

そこで本書の執筆に当たっては、抑留者の人権保護に努めた赤十字国際委員会代表や中立国スイスやスウェーデン公使館による、抑留所訪問視察の報告書を活用した。また抑留者の待遇を巡る、外務省と内務省警保局とのやりとりや、終戦後に占領軍に提出した抑留者名簿などの1次史料を、可能な限り見つけて積極的に用いた。これらは外務

省外交史料館や、国立公文書館、国会図書館憲政資料室、米国国立公文書館などに所蔵されているもので、従来アクセスは容易ではなかった。しかし近年アジア歴史資料センターによって、外務省外交史料館と国立公文書館の史料がデジタル化され公開されたため、資料の利用が非常に容易になった。

またもう一つ重要な資料となったのが、抑留者自身によって書き残された、手記や体験記である。例えば神奈川県第1抑留所に抑留された英国人学生シディンハム・デュアによる『英国人青年の抑留日記』、神奈川県第2抑留所に抑留されたオーストラリア人看護師アリス・ボーマンによる、『*Not Now Tomorrow* (今じゃなく明日)』、チリ公使館抑留所等に抑留されたオランダ人ベップ・アイントホーフェンの日記を孫がまとめた『*The Temple with the Chrysanthemums* (菊の花の寺)』、兵庫県第4抑留所等に抑留されたアメリカ人ジェームズ・トーマスによる『*Trapped with the Enemy* (敵の手に捕らわれて)』などである。これらの体験記から抑留所の実態が、生き生きとした抑留者自身の言葉によって伝わってくる。しかし残念ながらこうした手記がすべての抑留所に存在するわけではない。例えば宮城県第1抑留所に抑留されたインドネシア系オランダ人は、体験記のようなものを何も残さなかったため、彼らの抑留生活については、ほとんど分からないままである。

しかし今回この事典で、すべての抑留所について、ある程度共通の項目に従って悉皆調査をしたことは研究を進捗させ、個々の抑留所の調査研究だけでは知り得なかった、民間人抑留に共通する実態やその問題点が見えてきたと思う。

記事は北から配列した。末尾には、正確には民間人抑留所とは言えないが、強制移住や自主的な疎開により外国人が多数集住した軽井沢に関する記事を置いた。

民間人抑留所・抑留者変遷表

濃い網掛けは海外から連行された民間人の抑留所。

開戦から1942年3月まで、および1945年6月ごろから終戦までの、短期間の抑留所は省略した。

< > は抑留者の属性を表す。

	北海道	宮城	福島	埼玉	東京	東京第1	東京第2	チリ公使館	神奈川第1	神奈川第2	神奈川七沢	愛知	兵庫第1	兵庫第2	兵庫第3	兵庫第4	広島	長崎		
1941		12.9			12.9				12.9	12.9			12.9	12.11			12.12	12.9		
1942		仙台〈米英カナダ 修道士・修道女〉			世田谷区〈教師・記者など男性〉				横浜競馬場〈米英貿易商など男性〉	横浜ヨットクラブ (男性)			カナディアンアカデミー〈英貿易商など男性〉	イースタンロッジ〈修道女・宣教師〉	1.23 バターフィールド〈グアム米男性〉	1.23 シームズクラブ (グアム米男性)		12.12 三次〈教師・修道女〉	12.9 聖マリア学院〈修道士・貿易商など〉	
	9.28 小樽〈米アリユート〉	12.20 〈蘭病院船インドネシア水夫〉	7.11 福島市〈「ナンキン号」乗客・乗員〉	10.5 浦和〈東京・宮城・広島より米英カナダ・ギリシャ男性〉	9.16 〈宣教師・修道女など女性〉				6.24 第1へ	8.5 〈ラパウル看護師〉						10.10 マークスハウス〈グアム米〉	12.18 〈蘭病院船 医師・看護師・高級船員〉			
1943									6.25 北足柄村内山										3.4 聖母の騎士神学校〈男性〉	
					10.19 へ 第2	10.19 大田区〈イタリア外交官〉	10.19 文京区関口台神学校〈女性〉	3.28 チリ公使館〈オランダ人〉			12.7 厚木市七沢〈老人・女性・子ども〉	10.21 名古屋〈イタリア民間人〉		5.26 再度山						
1944														7.1 長崎へ		5.26 再度山				
																			7.2 〈兵庫県第2の修道女など〉	
1945																				
人数	25	35	139	56		48	36		44	19	27	36				163	44	42		
																	総計	714		

てんぱく 愛知県天白村抑留所



壮絶な飢えと闘ったイタリア民間人の抑留所

(参照資料④ 890)

抑留所の位置

北緯35度7分46秒、東経136度57分53秒。愛知県愛知郡天白村八事やごと(現・名古屋市天白区表台1-1竹中工務店竹友寮)。名古屋地下鉄鶴舞線・名城線の八事駅から徒歩約20分。

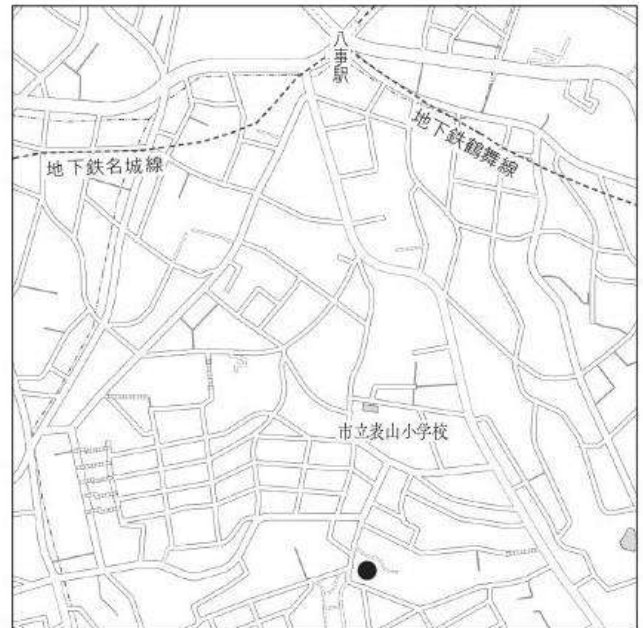
収容人員と死者数

閉鎖時の人員15人(イタリア)。死者無し《公④:石戸谷 1989》。

開設から閉鎖まで

- 1943.9.8 イタリアが連合国に無条件降伏。
- 1943.10.13 イタリアのピエトロ・バドリオ(Pietro Badoglio) 政権がドイツに宣戦布告。
- 1943.10.21 愛知郡天白村八事にあった松坂屋(名古屋市内の百貨店)の社員保養所「天白寮」を接収して抑留所開設。
- 1944.4.29 言語学者オreste・バッカーリ(Oreste Vaccari, 58歳)が抑留を解除される。
- 1944.7.16~18 過酷な待遇に抗議して、抑留者がハンガーストライキを行う。
- 1945.5.14 名古屋空襲で名古屋城天守閣焼け落ちる。
- 1945.5.16 抑留者全員を愛知県西加茂郡石野村石ヶ瀬(現・豊田市東広瀬町)の広済寺(④727)に移転させ、抑留所を閉鎖。

《この節、公④:石戸谷 1989》



抑留者の生活

(1) 敵国となったイタリア

この抑留所に抑留されたのは、日独伊三国同盟締結による同盟国だったイタリアの民間人である。アジア太平洋戦争開戦の1941年12月時点では、日本国内に官民合わせて253人のイタリア人が在留していた《公③》。ところが1943年7月、イタリアではピエトロ・バドリオがムッソリーニ(Mussolini)を追放して政権を握り、9月8日、連合国軍に無条件降伏をした。三国同盟の一面が崩れたのである。さらにバドリオ政権は10月13日、ドイツに宣戦布告し、イタリアは同盟国から敵国に転じた。

ところが1943年9月12日、ナチスドイツは北イタリアに幽閉されていたムッソリーニを救出し、

共和ファシスト党を創立させた。そして9月23日、北イタリアのサロに傀儡政権「イタリア社会共和国」を樹立させたのである。日本政府はこの政権を承認し、国内のイタリア人に対しても、イタリア社会共和国に忠誠を誓った者は中立国人と扱い、それ以外は敵国人として扱うこととした。その宣誓は10月21日までに各府県で実施され、ほとんどのイタリア民間人は、表面上忠誠であることを宣誓して抑留を免れた。しかしごく一部の、ファシズムへの協力を拒否した気骨ある人物か、社会的影響力があると見なされた文化人や自由主義者は、敵国人としてこの抑留所に抑留されたのである《公④ 1943.10; 石戸谷 1989: 85》。

(2) 抑留者の構成

収容者は16人で、5人は文化人類学者フォスコ・マライーニ (Fosco Maraini) と妻のトパツィア (Topazia)、そして幼い3人の娘だった。トパツィアは宣誓の際、夫のフォスコと別々に尋問され、「ナチス・ファシズムは私の思想と相いれない」と答えた。つまり夫に従うために強制収容所に行ったわけではないと、後に娘のダーチャ (Dacia) に語った《望月 2015: 121》。他の11人は男性で、横浜で外国人クラブの経営をしていたエドワルド・デンティチ (Edward Dentici) や、言語学者のオレスト・バッカーリなど4人が比較的年配、学生のブルーノ・ジョルダーノ (Bruno Giordano) や宣教師アレッシェンドロ・ベンチベンニ (Alessandro Bencivenni) など6人は若手だった《公④ 1943.10: 11》。長く日本で活動していた人が多く、日本語を流暢に話せる人もいた。抑留者代表には横浜生まれのデンティチが選ばれた《石戸谷 1989; 望月 2015》。

(3) 日本人職員

収容所長は愛知県警察部外事課長H. ミナミだった《公①》。監視員は特高課の警察官で、粕谷主任と部下の西村、青戸主任と部下の藤田の2人ずつ2組が交代で勤務した《望月 2015: 134》。彼らはイタリア人を三国同盟への裏切り者として侮蔑的態度をとった。特に粕谷は冷酷な男だった《石戸谷 1989: 99》。

抑留所とされた松坂屋天白寮。



(4) 居住環境

抑留所は松坂屋百貨店の保養施設「天白寮」を接収したもので、丘の上の木造2階建て家屋だった。2階から物干し台に出られるようになっていて、遠くに名古屋の市街地を見晴らすことができた。1944年3月19日に行われた赤十字国際委員会の視察報告書によると《公①》、2階を除いた建物の面積は1023㎡。台所と便所がついた別棟の平屋があった。2階の7室のうち5室が抑留者居室。畳敷きの和室でマットレスと3枚の毛布と4～6枚のキルトがあるが、ほぼ抑留者が持ち込んだもの。暖房は食堂の石炭ストーブだけで、冬は室内でも氷点下になるほど寒かった。便所は1階の廊下の突き当りに四つ日本式便所があった。風呂は1か所あり、週に1回沸かされた。

(5) 食事

抑留者に労働が課されることはなかったが、監視の警察官らは細かい規則と、食料供給を制限することでイタリア人を統制した。抑留者に配給されるべき食料の横流しも激しかった。その結果抑留者には生命を維持することができる最低限の食料しか与えられなかった。「四人の老人だけが外部からの差し入れのおかげである程度の体力を保っていた。[中略] 魚とか乾パンとか油などのささやかなものだったが、飢餓との極限の闘いの中では大きな助けになったのである」という状況だった《石戸谷 1989: 103》。やがて彼らはゴミためを漁り、みかんやじゃがいもの皮を拾って食べるまでにな

った。フォスコ・マライーニの3人の娘のうち下の2人(5歳と3歳)には食料の割り当てがなく、他の抑留者から毎回の食事ごとにスプーンでわずかずつご飯やスープを恵んでもらわなければならなかった。フォスコの妻トパツィアはかっけと栄養不良から、起き上がることもできなくなった《望月 2015》。

1944年3月19日、この抑留所に赤十字国際委員会駐日代表部から、スイス人H. C. アングスト(H. C. Angst)が視察に訪れた。抑留者たちには、この日普段の2倍の食材や卵8個(16人に対して)が配られた。粕谷の合図で一斉に食べ始めると、戸が開いてのぞき込んだ代表はにっこり笑って立ち去った。好待遇に見せかけるための演出だったと分かり、イタリア人たちは悔しがった《石戸谷 1989》。この視察後に赤十字代表が赤十字国際委員会へ提出した報告が日本の外務省に残されている《公①》。食料の欄には、1日1人あたりパン110g、小麦粉40g、マカロニ15g、大麦入りごはん220g、うどん30gと書かれている。実際より割増した量の報告と思われるが、これらを合計しても主食は415gにしかない。他の抑留所では、パンとご飯を合わせた主食が600g程度は出されているので、彼らがいかに虐待されていたかが分かる。

このような状態の中、1944年4月29日、抑留者オレステ・バッカーリが、「特に抑留継続の必要を認めざるに至りたるに因り」《公④ 1944.5.4》という理由で解放された。実はバッカーリは以前面会に来た妻から、ファシスト政権を否定したのは誤りだったと警察官に言うよう勧められていたのだ《公④ 1943.12.9》。その結果ここでの抑留者は15人になった。

(6) 抗議と懲罰

1944年7月6日、抑留所に再び赤十字国際委員会のアングストが視察に訪れた。同年3月に視察に訪れて以来2回目である。この日は抑留者代表のデンティチが「米はパン無き時は1日5.94ℓ [33合]、他の日には3.6ℓ [20合]乃至4.14ℓ [23合]とパン3.15kgなり。肉は月1回にして抑留所全体に対し4~5ポンド [1816~2270g]なり」(外務省による仮訳《公②》)とその量の少なさを訴えた。抑留者15人当

りの量であることから、米1日5.94ℓ(33合)は1人当たり2合2勺(330g)にしかない。これは都市部の日本国民への配給分である。「日本国民と同等に支給している」というアピールだろうか。しかし一般国民は買い出しなどで不足する食料の確保に努めており、そうした手段のない抑留者とは違う。しかも実際はこのころ1日当たりの米配給はさらに少なく、時には24合にまで減らされていたという《石戸谷 1989: 103》。まさに餓死すれすれの状態だった。また同視察報告書では、この抑留所には赤十字国際委員会からの救^{きゅうじゅう}恤品である食料小包が一切届かず、ローマ法王庁使節からの食料・現金と、イタリア大使館からの慰問品若干が、受け取った救恤品の全てであることも指摘されている《公②》。赤十字による食料小包は、日本各地の捕虜収容所や民間人抑留所に配布され、捕らわれた人々の命を救う有効な援助物資だった。なぜそれが愛知県抑留所で配布されなかったのか不明だが、抑留生活をさらに過酷なものにしていたことは間違いない。

1944年7月、イタリア人たちはあまりのひどい待遇に愛知県警察本部宛てに請願書を書き、食料配給や、面会の制限に対する不満を訴えようとした。しかしこれは警察官・粕谷たちによって握りつぶされ、抑留者たちはついにハンガーストライキを起こした。まさに死を賭しての抗議だった。フォスコはこのストライキ3日目の7月18日に、決意をしめすため自分の左手小指を自ら斧で切断した。この「指切り事件」は反逆と見なされ、フォスコらは厳しい尋問を受けることになった。しかしイタリア人の結束は揺るがず、その後監視員たちによる食料横流しは減り、待遇は少しずつ改善されていったという《石戸谷 1989: 122-124》。

空襲と抑留所の移転

1945年になると、名古屋市は米軍B29爆撃機による空襲を3月12日、19日、24日と立て続けに受け、市街地はほぼ壊滅する。さらに5月14日の空襲では名古屋城天守閣が焼失した。5月14日の空

襲後、程なくイタリア人たちは名古屋を離れ、西加茂郡石野村（現・豊田市）へと移転させられた。

横浜軍事法廷で裁かれた関係者

該当者なし。

戦後

戦後46年目の1991年、フォスコ・マライーニは

長女ダーチャ（Dacia Maraini）と共に来日して、テレビドキュメンタリー番組『シャッターがきれなかった2年間』《他①》に出演し、抑留体験を語った。そして警察官が抑留者の食料を自転車の荷台に括りつけて持ち去るのを何度も目撃したと証言している。また忘却をよそおう元警察官・粕谷に対して、長い歳月を経た当時でも激しい憤りを見せた。（小宮まゆみ）

愛知県石野村抑留所(広済寺・広沢寺)



戦争末期に疎開した抑留所で日本人と触れ合う

(参照資料⑧ 891)

収容所の位置

こうさい
広済寺 北緯35度9分11秒、東経137度13分44秒。
愛知県西加茂郡石野村石下瀬（地図中①。現・豊田市東広瀬町大根坂21）。

こうたく
広沢寺 北緯35度9分15秒、東経137度13分37秒。
愛知県西加茂郡石野村石下瀬（地図中②。現・豊田市東広瀬町極楽12）。

両寺ともに名古屋鉄道豊田市駅からバスで、広瀬バス停下車。徒歩約15分。

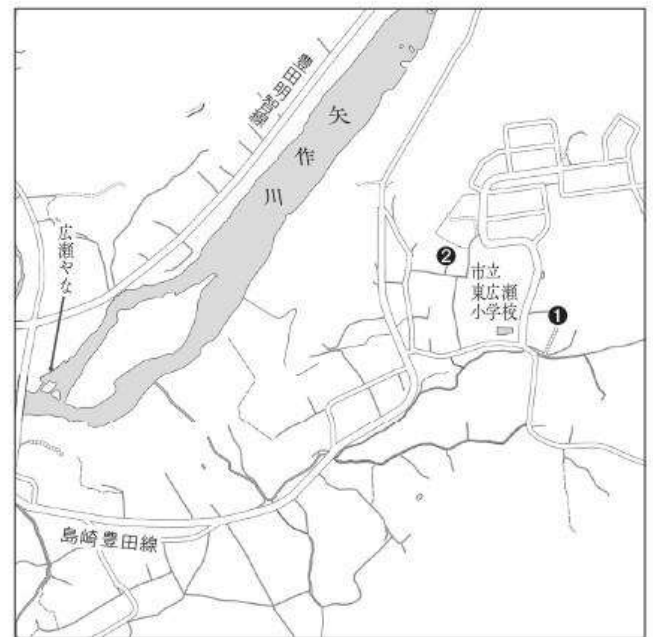
収容人員と死者数

閉鎖時収容人員：広済寺にイタリア人15人（石戸谷《1989: 131》では14人）、広沢寺にオランダ人21人。抑留中の死者はなし《公①:石戸谷 1989》。

開設から閉鎖まで

1945.5.16 名古屋市の愛知県天白村抑留所（⑧724）に収容されたイタリア民間人の疎開先として、石野村広済寺の本堂を接収して開設。

1945.5.17 東京都港区の元チリ公使館（⑧691）に



収容されたオランダ民間人の疎開先として、石野村広沢寺の本堂を接収して開設。

1945.8.15 ポツダム宣言受諾発表、戦争終結。

1945.8.26 スウェーデン公使館代表、広沢寺訪問。オランダ人の一部、名古屋市内のホテルに移る。

1945.8月下旬 米軍機による救援物資投下。

リアちがさき」第7号，茅ヶ崎市。

戦時下の小田原地方を記録する会，2003，『戦争と民衆』第51号，戦時下の小田原地方を記録する会。

中西道子，2001，「エリスマン邸に住んでいた人々」，横浜学連絡会議10周年記念誌編集委員会編，『わたしの横浜』横浜学連絡会議。

◆公文書

公①：GHQ/SCAP Legal Section Investigation Division Reports No. 415, "Civilian Internment Camp at Tateai, Akitaken, Honshu, Japan" (GHQ/SCAP 法務局調査課報告書415号，国立国会図書館憲政資料室蔵，LS 36388-36389)。

公②：「2. 抑留者関係/30. 七沢ニ於テ死亡セル英人『A. B. ニューマン』ノ財産目録並ニ旅券入手方ノ件」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02032550100, 大東亜戦争関係一件/交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/帝国権下敵国人関係/在本邦敵国人関係 第二卷 (A-7-0-0-9_11_2_1_002) (外務省外交史料館蔵)。

公③：「2. 抑留者関係/36. 七沢ニテ死亡ノ英婦人『モリソン』ノ遺言ニ関スル件」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B02032550700, 大東亜戦争関係一件/交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/帝国権下敵国人関係/在本邦敵国人関係 第二卷 (A-7-0-0-9_11_2_1_002) (外務省外交史料館蔵)。

公④：「2. 抑留者関係/29. 七沢ニ於テ死亡セルニュージーランド人『トーマス，ジョセフ，ビビー』ノ旅券入手方ノ件」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02032550000, 大東亜戦争関係一件/交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/帝国権下敵国人関係/在本邦敵国人関係 第二卷 (A-7-0-0-9_11_2_1_002) (外務省外交史料館蔵)。

公⑤：“In the matter of the observations of prevailing conditions at Camp Nanasawa, near Tokyo, Japan, and Civilian Internment Camp at Tateai, Akita-ken, Honshu, Japan,” Judge Advocate General's Department (米国立公文書館蔵)。

公⑥：内務省警保局『外事月報』1941～44，複製版，不二出版，1994。

◆ウェブサイト

W①：トーマス・ビビー (Thomas Bibby) のプロフィール，Geni (家系図サイト)，(2023.9.13取得，<http://www.geni.com/people/Thomas-Bibby/6000000022449914202>)。

◆聞き取りや通信，講演などによる関係者の証言，現地調査等

証①：山本淳一 (玉川館4代目主人，1943年生まれ，先代の「営業統計簿」を所蔵) への聞き取り (2004.10.3，玉川館にて，筆者による)。

証②：古根村喜代子 (福元館女将，1927年生まれ) と鮑子和歌子 (古根村喜代子の義理の妹，戦時中に旅館を手伝っていた，1929年生まれ) への聞き取り (2003.3.28，2005.11.15，福元館にて，筆者による)。

証③：ローダ^{ロダ}針生 (旧姓ウォーカー，Rhoda Walker，元抑留者) およびジェームズ・ウォーカー (James Walker，元抑留者，ローダの兄，カリフォルニア州在住) への聞き取り (2020.3.18，横浜のローダの弟イアン・ウォーカー (Ian Walker) の自宅にて (ジェームズはウェブ会議システムを介して)，筆者による)。

証④：志立^{しだちたくじ}託爾 (当時，三菱信託銀行最高顧問) への聞き取り (2005.3.11，三菱信託銀行本社ビル (東京丸の内) にて，筆者による)。

◆新聞

神奈川新聞：『神奈川新聞』。

愛知県天白村抑留所

◆日本語

石戸谷滋，1989，『フォスコの愛した日本』風媒社。

望月紀子，2015，『ダーチャと日本の強制収容所』未来社。

◆公文書

公①：“Aichi Prefectural Civil Internment Camp” (原文英語，本文中への引用は福林徹の翻訳による)，「1. 在本邦各収容所視察報告/4 在本邦各抑留所訪問視察報告ノ件」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02032517400, 大東亜戦争関係一件/交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/一般及諸問題/帝国権下敵国人収容所視察報告 第一卷 (A-7-0-0-9_11_1_9_001) (外務省外交史料館蔵)。

公②：「1. 在本邦各収容所視察報告/2 大阪並愛知抑留所訪問視察報告書送付ノ件」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B02032517200, 大東亜戦争関係一件/交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係/一般及諸問題/帝国権下敵国人収容所視察報告 第一卷 (A-7-0-0-9_11_1_9_001) (外務省外交史料館蔵)。

公③：内務省警保局「内地居住外国人国籍別人員表（1941年）」、『外事警察概況 第7巻 昭和16年』付表，1941，復刻出版，龍溪書舎，1980.

公④：内務省警保局「外事月報」1941～44，複刻版，不二出版，1994.

◆その他

他①：『シャッターがきれなかった2年間』，名古屋テレビ製作，1991.3.16放送.

愛知県石野村抑留所(広済寺・広沢寺)

◆日本語

大沢寿一，1980，「六 大戦終末期の研究所」，日本電気株式会社編『日本電気ものがたり』「第二部 戦中・戦後 — 研究所生 田分所と兵器開発」，日本電気.

日本電気社史編纂室編，2001，『日本電気株式会社百年史』日本電気.

望月紀子，2015，『ダーチャと日本の強制収容所』未来社.

石戸谷滋，1989，『フォスコの愛した日本』風媒社.

奥住喜重・工藤洋三・福林徹，2004，『捕虜収容所補給作戦——B-29部隊最後の作戦』私家版.

レルス，アニー（Annie），『アニーの日本抑留日記』（*Dagboek van Annie Lels-Visser*, 2004）戸田系子訳，私家版，未公開.

レルス，A. P. フレーヴェン（Greeven），2004，「日本への強制連行——事実解明の旅」，日蘭イ対話の会カンファレンス第8回「和解は可能か」2004.11.6，講演原稿，日蘭イ対話の会ウェブサイト（2022.2.23取得，<https://www.dialoognji.org/ja/%E7%AC%AC%EF%BC%98%E5%9B%9E/>）.

◆外国語

Wal, Ineke van der, 2018, *The Temple with the Chrysanthemums: Dutch Prisoners of War in Tokyo*, Independently published, ISBN: 9781790557769.

◆公文書

公①：「2. 抑留者関係／38. オランダ人抑留ニ関スル件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02032550900，大東亜戦争関係一件／交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係／帝国権下敵国人関係／在本邦敵国人関係 第二巻（A-7-0-0-9_11_2_1_002）（外務省外交史料館蔵）.

◆聞き取りや通信，講演などによる関係者の証言，現地調査等

証①：安藤久江（当時の広沢寺住職の娘）への聞き取り（2016.8.2，筆者による）.

証②：大沢寿一（オランダ人抑留者が東京チリ公使館抑留所時代に使役されていた住友通信工業の研究所元所長）のスピーチ（2001.12，信濃町教会聖和会（高齢男性グループ）のクリスマス祝会にて，長谷川ゆり子（筆者の元同僚で大沢の孫）が保管していた聖和会会報による）.

◆その他

他①：『シャッターがきれなかった2年間』，名古屋テレビ製作，1991.3.16放送.

他②：ミュージア・マライーニ・メレヒ監督，2016，『*Haiku on the Plum Tree* 梅の木の俳句』ドキュメンタリー映画.

兵庫県第1抑留所(カナディアンアカデミー)

◆日本語

高木一雄，1985，「カトリック宣教師被抑留者一覧表」，『大正・昭和カトリック教会史 3』聖母の騎士社.

福林徹，2007，「神戸にあった捕虜収容所と敵性外国民間人抑留所」（歴史教育者協議会兵庫大会第1分科会発表），『歴史地理教育』第722号，歴史教育者協議会.

リー，レオノラ・エディス，2008，「戦中覚え書」，『松蔭女子学院史料』第8集，松蔭女子学院.

◆外国語

Tamura, Keiko, 2007, *Forever Foreign*, National Library Australia.

Thomas, James O., 2002, *Trapped with the Enemy!*, Xlibris.

◆公文書

公①：「2. 抑留者関係／40. 米国人（日本内地）抑留者名簿ニ関スル件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02032551100，大東亜戦争関係一件／交戦国間敵国人及俘虜取扱振関係／帝国権下敵国人関係／在本邦敵国人関係 第二巻（A-7-0-0-9_11_2_1_002）（外務省外交史料館蔵）.

公②：「LIST OF INTERNEE, 31.8.1945, Home Office」，JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A06030111000（国立公

「捕虜収容所・民間人抑留所事典—日本国内編—」

負の歴史繰り返さないため、詳細な記録掘り起こす

福永 徳善 (POW 研究会会員・事典編集委員)

POW (ピー・オー・ダブリュー) 研究会は2002年3月に発足、国内外約80人の会員が互いに協力しながら、連合軍捕虜・民間人抑留者や戦犯裁判の調査、元捕虜や遺族との交流など様々な活動に取り組んでいる市民団体です。POWとは、Prisoner of War の略称で「戦争捕虜」を意味します。このたび、20年超に及ぶ活動の集大成として、アジア太平洋戦争下に日本国内で開設された連合軍捕虜収容所と民間人抑留所の概要と記録を網羅した研究事典を公刊しました。

私たちはアメリカの国立公文書館や日本の国会図書館憲政資料室に所蔵されるGHQの公文書を集めました。元捕虜とその家族だけでなく、元収容所職員や地元住民からの聞き取り調査を行い、捕虜側と日本人側の双方の視点から実態を解明しようと努めました。本書はこれらの多種多様な資料、情報源から事実をひとつひとつ掘り起こした詳細な記録です。

1945年8月、広島への原爆投下に関してトルーマン米大統領はラジオ演説の中で、「日本は予告なしにパールハーバーでわれわれを攻撃した。米人捕虜を殴打し、餓死させ、処刑した。日本の戦争遂行能力を完全に破壊するまで原爆を引き続き使う」と述べました。捕虜虐待は原爆投下の口実にされるほどの国際問題でした。

戦時下、労働力不足に悩む日本では敗戦までに10の捕虜収容所が作られ、アジア各地から移送された約3万6000人の連合軍捕虜が鉱山、造船所、軍需工場などで働かされました。病気や飢え、暴力などが原因で約3500人の捕虜が死亡しました。その結果、収容所関係者らが戦後、BC級戦犯裁判で裁かれました。また、日本に宣戦布告した国の国籍を持っていた民間人の一部を「適性外国人」として拘束し、全国の抑留所に収容しました。短期間のものを含め



延べ約60カ所の収容所がありました。

「シベリア抑留」における収容所の数や実態は未だ詳細不明だと聞きます。日本国内の捕虜収容所・民間人抑留所についても、敗戦直後に日本側は多くの資料を焼却処分してしまい、記録のほとんどは闇に葬られようとしていました。ところが連合国側は収容者・抑留者への聞き取りを丁寧に行い、詳細な記録を残しました。そして元捕虜らが自らの体験を手記にして、その一部が刊行されることもありました。筆者の調査した通称「広畑収容所」(兵庫県姫路市)に限っても。収容されたアメリカ軍元捕虜が戦後に刊行し

た手記は少なくとも6冊あります。日米開戦直後にグアム島で捕虜となったアメリカ海兵隊委員ら80人は、香川、大阪を経て広畑に移送され、日本製鉄の工場で使役されました。彼らは約3年8カ月の間、日本軍の捕虜として生活しましたが、乏しい食事や苛酷な労働、体調などのひどい待遇に加え、感謝祭やクリスマスに許された娯楽や赤十字国際委員会からの支援助資配布に狂気したことなどを書き残しています。

日露戦争時のロシア軍捕虜、第一次世界大戦時のドイツ軍捕虜について、日本は国際法を遵守したうえで「文明国からのお客様」として丁寧な待遇をしましたが、アジア太平洋戦争では、連合軍捕虜と日本人

戦犯の双方に大きな痛手を残す結果となりました。たとえ生き延びたとしても身体だけでなく心に傷を負った元捕虜の存在を忘れてはなりません。また、処刑された戦犯の遺族も苦しく長い戦後を生きることになりました。多くの人にとって捕虜収容所・民間人抑留所の存在は「知られざる歴史」と思われますが、戦後80年近くが経っても解決されない問題を引き起こしました。しかし同様の事態は世界で戦争・紛争が起こるたび、何度でも繰り返されます。負の歴史を繰り返さないために、なぜこのような問題が起きたのかを考えながら、ご一読いただければ有難く存じます。

【2023年12月刊、B5判・960頁、税込み23,100円】

捕虜収容所の姿 後世へ

民間グループ 20年超の調査 事典に

トラウマ・抑留・強制疎開：1千ジピー



終戦直後の山形県捕虜収容所第3分所（細倉鉱山）での捕虜の食事風景。米国立公文書館所蔵、工藤洋三さん提供



POW研究会のメンバー。右から、日本妙子さん、小宮まゆみさん、高橋雅人さん、高川邦子さん。東京都下田町

出版されたのは、「捕虜収容所・民間人抑留所事典1日本国内編1」（すいれん舎、2002年）から。2002年から20年以上かけて丹念に調査してきた結果が今月、1千7百近い事典として出版された。埋もれていた歴史を市民の手で掘り起こす作業だった。



函館俘虜収容所第2分所（赤平）の捕虜たち。米国立公文書館所蔵、POW研究会提供

進めてきた。収容所で死亡した捕虜だけでなく、生き残って故国に帰った捕虜たちも心と体に深い傷を負ってトラウマに苦しむ、その傷が子や孫の世代に引き継がれていることを知った。

同会共同代表で元放送作家の笹本妙子さん（75）は「戦後80年近くになるのに今も癒えない傷で苦しんでいる人がいる。自分の身近な所に収容所があったことを知ってもらい、戦争と平和を考える材料としてまとめておきたかった」と話す。

執筆は、元教師や元銀行員ら会員約20人で分担した。収容所ごとに、収容人員と死者数、開設から閉鎖までの経緯、捕虜の生活と労働などが詳細に説明されている。

笹本さんが担当した一つが、長崎市の三菱重工長崎造船所幸町工場敷地内にあった福岡俘虜収容所第14分所。爆心地から1・7キロの距離で、原爆で8人（英国人1人、オランダ人7人）が犠牲となり、病気で100人以上が死亡した。「長崎に捕虜収容所があることを知りながら米軍が原爆投下を実施したこと、米軍資料からわかってい」と笹本さん。

高校の日本史の教師だった小宮まゆみさん（70）は民間人抑留所を担当した。例えば、神奈川県足柄市足柄山麓にあった神奈川県第1抑留所。戦犯裁判に出された証言記録によると、抑留者の食事は44年ごろからひどくなり、一日の食事が茶わん一杯のご飯と水っぽいスープだけになった。病気で医師にもかかれず、衰弱するなどして、抑留者の1割にあたる5人の死者が出たという。小宮さんは、「民間人であっても、敵国人は強制的に収容されるという戦争の現実を知ってもらいたい」と話す。

連合軍の将兵 3.5万人を連行

POW研究会の調査によると、戦時中に日本軍はアジア・太平洋地域で約16万人の連合軍の将兵を捕虜とし、3万5千人を超えて捕虜を労働力不足を補う要員として日本に連行した。

国内各地に約1300の捕虜収容所が造られ、捕虜たちは炭鉱や鉱山、造船所、工場などで働かされた。病気や飢え、暴力などが原因で亡くなった捕虜も多く、戦後、収容所関係者がBC級戦犯に問われた。

（編集委員・豊秀）

2023年12月25日 朝日新聞

「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」を伝え続ける活動の報告(東京)

われわれが、ダーチャ・マライーニさんを知ったのは、父上のフォスコ・マライーニさんが北大時代に「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の被害者・宮澤弘幸と「心の会」はじめ登山・スキーなどで親交を重ね、宮澤を「心からの友人」と讃えた無二の親友であったことを知ったことによる。

1941年12月8日の太平洋戦争開戦の日、北海道帝国大学学生の宮澤弘幸、同大学予科英語教師のハロルド・レーン、ポーリン・レーンらが軍機保護法違反容疑で検挙され、暗黒裁判で宮澤とハロルドは懲役15年、ポーリンは同12年と断罪された。戦後開放された宮澤が唯一当時の知人を訪問したのはフォスコであった。

戦後この冤罪事件は埋もれていたが、宮澤の妹・秋間美江子さんとの縁で事件を知った毎日新聞と北海道大学OBの有志らは、2013年に札幌で「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」を結成し、「国家権力犯罪には“時効”はない」との視点から、事件の真相を糺し伝える活動を続けている。東京周辺在住の北大OBも、『宮澤・レーン事件を忘れない！』北大・戦後世代をつなぐOBOGの会」を結成して、宮澤が不当検挙された12月8日墓参と、2月22日命日墓参とつどいを続けている。

われわれは、「戦争の残酷」を体験され「反ファシズム」小説を書かれているダーチャさん来日歓迎を機に、文字通り「戦争前夜」の様相である日本の現況に危機感を持ち、活動を続けていく方針である。

【“宮澤ら検挙”を無視した北海道帝国大学】

北大で外国人教師と学生が親睦目的で結成した「心の会」の会員である宮澤弘幸、レーン夫妻らが1941年12月8日、特高にスパイ容疑で検挙された。大学の自治侵害と冤罪という不当弾圧に対し、北大当局は何の抗議も救済もしなかった。宮澤の母親とくは、検挙の報を聞いて今裕・北大総長の自宅を訪ねたが応えてくれなかった。戦後、レーン夫妻は、有志教員らの働きかけが実り1951年に北大復帰し、事実上、名誉回復がなされたが、宮澤弘幸については、上田誠吉弁護士の著作『ある北大生の受難—国家秘密法の爪痕』(1987年刊)によって事実が明らかになった後も北大当局による無視が続いた。

【われわれが「スパイ冤罪事件」を知った発端】

登山家・山野井泰史は、1985年6月、コロラド州でロッククライミング中、転落して大けがをし、収容された病院でボランティア活動をしていた秋間美江子の介護を受けた。これが縁で、秋間と泰史の父・孝有との交流も生まれ、「私の兄・弘幸は、特高に検挙され、網走刑務所に収監されたが劣悪な環境下で体力が衰え、戦後釈放されたが27歳で死んだ。墓は新宿・常圓寺にある」と話した。正義感の強い山野井孝有(毎日新聞印刷OB)はこの事実を放っておかず、

ブログに書いたりして広く、訴え続けた。

【北海道大学に宮澤弘幸遺品アルバム贈呈】

2012年秋、山野井宅を訪問した秋間美江子は、高齢になったことから、兄・弘幸の遺品アルバムを北海道大



学に寄贈したいと申し出た。山野井は秋間と一緒に、10月24日、北大を訪問。新田孝彦・北大副学長らに遺品アルバムを手渡すと同時に「宮澤弘幸の退学撤回と名誉回復」を求めた。

続いて11月12日、東京新宿・常圓寺で、秋間美江子・山野井孝有の北大訪問報告会を開催、山野井の友人ら約40人が参加した。この場で宮澤弘幸の名誉回復と国家による冤罪事件を繰り返させないための運動を組織しようとの意見が出された。

【2013年1月以降の主な活動記録】

◆2013年1月29日 札幌・エルプラザで約40人が参加して「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」(以下「真相を広める会」)を結成した。代表・山野井孝有、山本玉樹、世話人7人。会則の目

的で「スパイ冤罪事件を糾し、宮澤弘幸の退学撤回と名誉回復、そして秘密保全法(当時の呼称)立法阻止」を掲げた。



◇2月26日、「真相を広める会」の代表3人が、北大に「宮澤弘幸の名誉回復と謝罪」を求める申入書を渡す。北大側は総務課長補佐が無言のまま受け取った。◇5月27日、山口佳三・北大総長名で「真相を広める会」代表宛に、再調査結果として、学籍簿、教授会議事録など7点の資料を送付。同文書は、5月30日に米国在住の秋間美江子さんに直接手渡された。

◇10月10日 「秘密保護法阻止 10.10 シンポジウム—この道はいつか来た道—宮澤・レーン『スパイ冤罪』事件の再来を許すな 10.10 東京集会」(エデュカス東京)。北村肇・週刊金曜日代表、西本武志・日本勤労者山岳連盟会長らが発言。この集会以降、北大OBOG有志が積極的に参加。

◇10月13日 「この道は、戦争への道—宮澤・レーン・スパイ冤罪事件の再来を許すな—秘密保護法阻止 10.13札幌集会」(札幌エルプラザ)。岸本和世・日本キリスト教団牧師、今橋直・自由法曹団弁護士らが基調報告。

◇12月8日「もう一つの12月8日—札幌集会」(北大学術交流会館)。齋藤耕・北海道憲法会議事務局長が問題提起。声明「憲法破壊・日本を戦争する国に変える秘密保護法の強行採決に厳重に抗議する」

◆2014年2月22日「宮澤弘幸追悼・顕彰墓参」◇「宮澤弘幸追悼・顕彰のつどい—悪夢再来の秘密保護法を許さない」(東京・常圓寺)140人参加。岸井成格・毎日新聞特別編集委員、戸塚章介・新聞OB九条の会事務局長らが発言。

◇4月6日「秘密法に反対する全国ネットワーク」第1回全国交流集会(名古屋)に参加。その後、大阪、東京で交流集会を開催し、秘密保護法に関連する情報を詳細に報道、提供している。本会も連帯して、宮澤・レーン・スパイ冤罪事件を全国に広げる活動を開始。

◇3月11日 秋間美江子が毎日放送ラジオの取材で訴える(東京・毎日放送ラジオスタジオ)

◇5月6日「秘密保護法と宮澤弘幸の名誉回復を求める市民のつどい」(北大学術交流会館)

◇5月7日 北大・三上隆副学長が初めて「真相を広める会」との交渉に応じ「宮澤・レーン事件」は「冤罪だった」と明言し「風化させない」とも表明。さらに宮澤弘幸顕彰し、その精神を次代の学生に伝えるために「宮澤賞」を創設するなど、不十分ながら従来の無視対応から転換した。



◇9月30日 「真相を広める会」、北大総長に、宮澤らを顕彰する「心の会の碑」(仮称)の建立をめざす502人の賛同署名文書を渡し、協力を申し入れる。

◆2015年2月22日 「『戦争への道』許さず秘密保護法廃止を! 宮澤弘幸追悼・顕彰2.22のつどい」(常圓寺)◇このつどい後に開催した「北大OB懇親会」(新宿ニューシティホテル)にて、北大OBとして今後活動に協力して継続することを決意。

◇12月6日「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件の再来を許さない道民の集い」(北大学術交流会館)。講演=荻野富士夫・小樽商科大教授。

◆2016年2月22日 宮澤弘幸追悼・顕彰墓参◇「宮澤・レーン事件を忘れない—北大OBOGのつどい」(新宿ニューシティホテル)



◇12月10日 「宮澤・レーン事件を忘れない—太平洋戦争開戦75周年に集う北大OBOGの会」(四谷・主婦会館)=写真。「広める会」活動に協力でまとまる。

◆2017年2月22日「宮澤弘幸追悼・顕彰墓参」◇「宮澤・レーン事件を忘れないー強権国家づくりノー！北大OBOGのつどい」（常圓寺）。講演＝伊藤セツ・昭和女子大名譽教授が「山川菊栄研究からみる戦前の運動・言論取締り」。36人参加。

◆2018年2月22日「宮澤弘幸追悼・顕彰墓参」◇「強権国家NO！宮澤・レーン事件から学ぶ 北大OBOGの集い」（新宿・常圓寺）。講演＝宮田汎・治安維持法 国賠同盟北海道本部会長が「治安維持法による道内・北大における諸事件を振り返る」。58人参加。

◆2019年2月22日「宮澤弘幸追悼・顕彰墓参」◇「『無罪』宮澤・レーン事件を忘れない！ 2.22宮澤弘幸七十四回忌 北大OBOGの集い」講演＝荻野富士夫・小樽商大名譽教授が「レーン・宮澤事件ーもう一つの12月8日」（常圓寺）

◆2020年2月22日「宮澤弘幸追悼・顕彰墓参」
◇10月25日 秋間美江子さん死去。「事務局たより」

号外「秋間美江子さん追悼」発行。

◆2021年、2022年2月22日「宮澤弘幸追悼・顕彰墓参」。
（集会はコロナ禍のため中止）

◇12月4日～2022年1月30日 『「宮澤・レーン事件」80周年特別展』＝主催・北海道大学総合博物館・北海道大学大学文書館。入場者1万人。

◆2023年2月23日 「君にも知ってほしい！国が戦争に暴走し自由を圧殺した宮澤・レーン『スパイ冤罪事件』のことを！ 北大OBOGのつどい」（新宿・農協会館）。講演＝青木美希（ジャーナリスト）が「原発・憲法、ジャーナリズムの今」。

◇4月12日 遺族が宮澤弘幸と4人の家族の遺骨を宮澤家墓地から供養塔へ移動し法要（常圓寺）

◆2024年2月23日「宮澤弘幸七十八回忌法要・追悼・顕彰墓参」◇「2.23『宮澤・レーン事件』を考える 北大OBOGの集い」（常圓寺）。講演＝藤田正一・元北大副学長が「クラーク精神と大戦前夜の北大生」

>>>>> 「真相を広める会」刊行の主要な書籍・冊子 <<<<<

「真相を広める会は、「引き裂かれた青春ー戦争と国家秘密」（花伝社）「宮澤レーン・スパイ冤罪事件総資料総目録」「同補遺2020」のほか、同様の国家権力による弾圧・犯罪にも視野を広げ、以下の書籍・冊子を発行している。花伝社刊以外は全て本会ホームページで公開している。



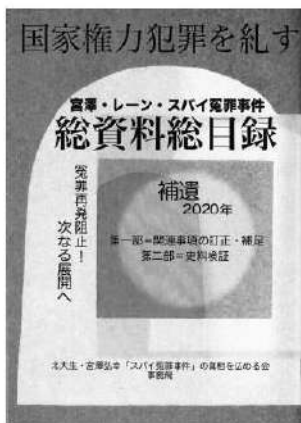
2014年9月5日刊



2018年1月29日刊



2019年10月1日刊



2020年6月1日刊



2020年12月31日刊



2021年11月2日刊



2022年2月22日刊

「真相を広める会」ホームページ <http://miyazawa-lane.com/>



フオスコ・マライーニ在日墓

(愛知県豊田市東広瀬町大根坂21 廣濟寺)

墓碑にある「CITLUVIT」は「月から地球にメッセージを伝えるためにきた月界人」という意味の造語



2015年 未来社・刊



1988年 花伝社・刊

ダーチャ・マライーニさん歓迎・交流会 プログラム・参考資料

2024年6月12日 発行 非売品

「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会・東京」

【代表】泉 定明・北大OB (izumi@kxe.biglobe.ne.jp)

大我晴敏、平田更一、向山征哉、村瀬喜之、湯原 宏、黒澤多佳子、寺沢玲子、西里扶甬子

<編集・制作> 福島 清・毎日新聞OB (misuzuya@jcom.zaq.ne.jp)

【写真・書籍の引用元】◇表紙・ダーチャ写真=<https://en.italiani.it/the-italian-writer-dacia-maraini-talks-about-herself-in-an-interview-with-italians-it/>

◇表紙・書籍=『帰郷シチーリアへ』ダーチャ・マライーニ 望月紀子訳 (1995 晶文社)

『Vita Mia』ダーチャ・マライーニ (2023 Rizzoli)